

# 教化研究

2000年(平成12年)

No. 11

浄土宗総合研究所



# 教化研究

2000年(平成12年)

No. 11





## はじめに

浄土宗総合研究所が設立されてより、はや十二年目を迎え、ここに新たな『教化研究』第十一号を発刊するに至った。歴代所長のもとに集えるプロジェクトチームの面々の周到なる計画の成果の一端が提示されていることは、まことに嬉しい限りである。

歴代所長である竹中信常博士、藤堂恭俊台下、ついで水谷幸正現宗務総長と錚々たる方々が勤められた後を継いで、不肖石上が職責を汚すこととなったことは、まことに恥ずかしく、肅然たる思いをしている次第である。前所長水谷先生は、意欲的にプロジェクトチームを組織して、現今、仏教徒がなすべき課題を率先して研究対象として取り上げ、研究員たちに全幅の信頼をおいて、研究を推進させたことは、すでに十分に熟知されていることである。その一端の発表だけでも、すでに注目を浴びるだけではなく、その対応に全員が取り組まなければならないほどの関心の的となっていることを理解するだけでも、研究所はつねに活性化している現状を知っていただきたいと思っている。

人間が先にあつて、プロジェクトチームが結成されたわけではなく、現在何が検討されるべきかを討議して、プロジェクトそのものが成立し、それにふさわしい人材を適材適所に配置されて、研究チームが作られたのである。それだけに、つねに研究所は前進を続けている。その折に、研究所の所長として、いかに重大な立場に置かれているかを、改めて感じている次第である。

「浄土宗義と現代」はさらに多角的に論じられなければならないであろうし、「開教の基礎的研究」は国際化の課題をさらに追究すべきである。「浄土宗典籍・版木の研究」という地味なる精査、「教化儀礼」の中の「伝承儀礼」と「現代教化儀礼」の二系列の研究、「ホームページによる教化情報」の提供拡充と英文による情報の提供は、未来へ向けての大きな役割を荷うものと確信している。「葬祭仏教研究」の一つである「戒名に関する調査」の調査集計結果は、まだ単に提供した段階で、このような反響を呼ぶことに驚いている次第である。「現代布教研究（教化方法論）」は、前述の研究テーマともかわるものであることはいうまでもない。

研究所はただ問題を提示するだけで、事足りるとしているのではない。これを今後、さらにどのように意義づけ検討すべきかをも視野に入れ、研究所全体で研究し集約すべき役目を負っている。それだけに関係各位の、さらなる御協導を心より念願し、あるべき研究所としての態勢を確立していきたいと思っている次第である。

平成十二年六月

浄土宗総合研究所長 石 上 善 應

## 目 次

はじめに	石上 善應
研究成果報告	i
ハワイにおける日系宗教の現状	2
——浄土宗ハワイ開教研究調査概要報告(その二)	2
——開教(海外布教)研究班	2
PCの普及化と「阿弥陀仏の表現」について	63
——布教・情報研究成果報告	63
——布教・情報研究班	63
平成十一年度 研究活動報告(概要)	92
僧侶(宗教的指導者)養成の総合的研究	92
——熊井 康雄	92
浄土宗義と現代	97
① 浄土教比較論研究	97
——村田 洋一	97
② 『法然上人のご法語(第三集)』対話編の編集	100
——林田 康順	100

浄土宗典籍・版木の研究——浄土宗寺院所蔵文献調査整理研究	竹内 真道	104
教化儀礼研究——比較浄土儀礼の研究	田中勝道・坂上典翁	108
葬祭仏教研究（第二次）——戒名・その歴史と現代における諸問題	細田 芳光	116
総合研究所所員・嘱託名簿		119
平成十二年度 研究課題・担当者		122
平成十一年度 行事報告		123
編集後記		129

研  
究  
成  
果  
報  
告

浄土宗ハワイ開教研究調査概要報告（その二）

ハワイにおける日系宗教の現状

開教（海外布教）研究班

目次

はじめに

〈第一部〉総合分析

1. ハワイにおける日系人と仏教
2. ハワイにおける伝統仏教教団の現状と課題
3. ハワイにおける仏教系新宗教の展開
4. ハワイにおける神道および神道系新宗教の現状
5. ハワイにおける日系キリスト教の現状

〈第二部〉教団別調査報告（全十六教団）

（仏教系）

- ① パロロ観音寺
- ② プウネネ日蓮宗教会
- ③ 高岩寺
- ④ 本派本願寺別院
- ⑤ モイリリ本願寺
- ⑥ ミリラニ本願寺
- ⑦ ハレイワ真言宗弘昭寺

(神道系)

⑧ ハワイ大神宮

(キリスト教系)

⑨ ホノルルキリスト教会日本語部

⑩ マキキ聖城教会

⑪ オリベッティ・バプティスト教会

⑫ チャーチ・オブ・クロスロード

(新宗教系)

⑬ 天理教ハワイ伝道庁

⑭ 金光教ハワイ教務所

⑮ 真如苑ハワイ

⑯ 立正佼成会ハワイ教会

はじめに

以下は、浄土宗総合研究所海外布教研究班によって一九九五（平成七）年に実施された、浄土宗ハワイ開教区の現地実態調査の研究結果の概要報告（その二）である。前回（『教化研究』第十号掲載）のハワイ開教区浄土宗教団の報告に続き、今回はハワイにおける日系宗教教団全体に関する研究結果の概要を報告する。

## 〈第一部〉 総合分析

### 1. ハワイにおける日系人と仏教

本調査の目的は、今後の浄土宗の海外布教のための現状把握にある。

そのためハワイ日系宗教の現状と問題点を探ることが主な仕事であった。ハワイに展開してきた日系宗教には

伝統仏教系、新宗教系、神社系、キリスト教系（カトリック系、プロテスタント系、福音主義系）、民間信仰系などが主なものである。

一九九四、九五年度の二度の調査では全体的には衰退傾向にあることが知られた。とくに伝統仏教系、神社系、「古手の新宗教」と呼ばれる戦前から新宗教系が古い二世世代の老齢化、死亡と新しい三世世代以降の日系宗教離れに苦慮している。またキリスト教系でも伝統教会であるカトリック、バプティスト、メソジスト等は信者が高齡化し、減少している。この衰退傾向の原因をなしているのが、信者の世代交替である。一般的には三世は宗教に関心をもたないか、または関心があってもキリスト教に顔が向いているといわれる。事実、いくつかの教団の聞き取りでは「二世以降の世代の取り込みが課題である」という。また「非日系人への布教が課題である」ともいうが、ほとんどの伝統仏教教団は成功していない。これに対して、信者を集めている教団もある。仏教系ではプウネネ日蓮宗教会であり、福音伝道教会（Evangelical, fundamental churches）のホノルル・キリスト教会（北米ホーリネス教会連盟）であり、「新手の新宗教」と呼ばれた真如苑であった。

前二者は指導者のリーダーシップの強さ、日本人・日系人を対象とした伝道活動であり、後者は日本的な伝道方法をそのまま用い、なおかつ神秘的要素を持つものであるが、非日系人をも多く信者に加えている。

ハワイにおいても伝統的な教団の影響力は衰退しつつあるが、注目をあつめている日系宗教もあるという事実を見て、ハワイの日系人そのものが宗教に対して、これまでとは異なる関心を見せているといえる。

#### へ一世と二世

最も大きな要因としては信者の世代交替があげられる。現在の浄土宗の場合ほとんどが二世であり、他の教団の多くも同様な状況にある。

一世と二世の世代、そして三世以降の世代とは大きな違いがある。これまでの研究を参考にして、世代の違



いを概観しておこう。

B・ホソカワ等は、一世は近代日本の歴史的伝統を受け継いでいた。それは「身に備わった価値観、理想、行動原理、心の持ち方、人生観は、例えて見れば、見えないうし手荷物」であつた。その見えない手荷物（カルチュラル・バゲッジ）はアメリカの原則と異なり「不平等を当たり前のように考え」ていた。日本の価値観では身分の上下関係は際立っており、その結果組織の中では「分をわきまえる」ことに重きがおかれていた。それゆえ「このような考え方を根本とした生活態度がアメリカに持ち込まれた。そして、移民社会の中に根を下ろし、社会的圧力が加わるようになると、日本人移民には、「一匹狼」が少なくなつた。」（『ジャパニーズ・アメリカン』R・ウイルソン、B・ホソカワ、猿谷要監訳）と分析している。またフランク・チューマンは「日本人としての誇りを誇示したバンブー」（『バンブーピープル』サイマル出版）と見た。

これに対して二世は「境界人」として位置づけられた。

一般的には二世の登場は戦後と見てよい。アメリカ本土では強制立ち退きが始まつた時期（一九四二年二月十九日）の平均年齢が、一世の男性は五十五歳、女性は四十七歳になつていて、二世はまだ平均十七歳にすぎなかつた」（『大和魂と星条旗』トマスK、タケシタ・猿谷要、朝日新聞社）という。この二世は成長の過程で日本人としての伝統を受け継ぐものの（日本語学校に学んでいる）、アメリカ人としての教育をうけ、白人の価値に同化しようと勤めたが偏見の壁に阻まれた。アメリカのよい職業には参加できず、また日本の銀行などの企業からも締め出されるといふ境界に立たされた。二世がアメリカ社会のなかに頭角を現すのは、ハワイにおいてダニエル・K・イノウエが下院議員に当選（一九五九年）したことに見ることができるといふ。七〇年代にはいつては日系アメリカ人が議員に当選する。この頃から日系二世の位置が高まつたといえる。三世は「政治的に活発な世代」（『二世・おとなしいアメリカ人』ビル・ホソカワ 時事通信）であり、「黄色への覚醒とイエローパワー」（『日

系アメリカ人』鶴木真・講談社)の世代である。多元的文化論を背景として日系アメリカ人としての自覚を明確に表現している世代である。

#### へ寺院の役割と変化

一世と二世は日本的価値・文化を持続し続けてきた。そうした持続を助けたのが寺院の位置であり、役割であった。

事実、ハワイへ上陸した仏教の目的は、日本人移民の宗教的・社会的救済にあった。しかしそれは純粹に宗教的役割にとどまらない、日本の価値、仏教とむすびついた日本的仏教でもあった。寺院の建立、日本語学校の設立であり、青年会や処女会の組織化、華道や裁縫などの日本文化の伝達でもあった。

具体的には①宗教活動(先祖供養を中心)、②教育活動(移民子弟のための日本語学校)、③福祉活動(移民の諸問題への協力)、④日本人としてのアイデンティティ確保(文化活動)、⑤移民社会の統合的機能(青年会

処女会、その他の組織)などが寺院に求められたのである。(拙稿『ハワイにおける日系人と仏教』平凡社)

いわば、移民生活の全般にわたる援助が寺院の機能であった。

こうした初期の仏教寺院の役割も戦後(太平洋戦争以後)には大きく変化した。基本的な移民への役割はかわらないものの、その位置は弱まった。

まず信者の拡散化である。かつて寺院は移民の働く耕地の中心地につくられていた。しかし砂糖やコーヒーの耕地も縮小、閉鎖された。耕地に働いていた人々も仕事を求めて都市部に移転して寺院は取り残されたのである(例外としてマウイ島ブウネ浄土院は信者の移転に応じてカフルイに移転してカフルイ浄土院となっている)。現在、ハワイの人口はオアフ島に集中し、他の島は中心部を除いて過疎化傾向を強めている。そうした環境の中、三世以降の世代も都市部やアメリカ本土に転出し、寺院の周辺には退職した二世が残っている、というのが過疎地の現状である。

こうした環境のなかで、日系人の社会的地位も上がり、経済的にも向上して寺院がその初期に持っていた日系人社会全般に渡る役割は縮少した。寺院の主な機能も宗教的役割とその延長上にあるボランティア活動になつていく（高齢者ホームとか幼稚園、保育園などの組織的な福祉活動はほとんど行われていない）。

信者層の中核をなす二世はハワイにおける仏教寺院の伝統的な役割に期待を持っているが、反面それは開教使の活動を狭めるといふ逆機能としても働いている。聞き取り調査からみると、非日系人や新しい信者の導入には必ずしも賛成ではない。「自分たちの寺」という意識が強いのである。また、新たな宗教活動の展開にも消極的である。既存のメンバーへの奉仕は積極的だが、それ以外の方向には消極的な態度となる。例えば、人口が集中し、新しい町ができていくのがホノルル郊外である。しかしそこへの進出は開教使会では重要課題にあがっていないが、信者集団の中心である理事会などの了解が得られない等の問題がある。さらに開教使との関係でみれば、

宗教的な局面では「先生」であるが、信者集団である理事会との関係からは被雇用者という立場にある、などの要因がマイナスに働いているのも実態である。

こうした変化の中で、二世も高齢化してきた。寺院を支える信者は確実に減少している。今後は、新日本人といわれる日本からの移住者も潜在的な信者層であるが、何よりも三世の信者獲得、非日系人へのアプローチが不可欠になる。

三世は日本的枠組を越えた世代である。しかし、その三世も自らのルーツとして日本の価値・文化に関心を持っているが、それは一世・二世とは違う視点からである。いわば日本的枠組を基盤にしながら同化しようと勤めた二世に対して多元的文化論を背景にして日本の価値・文化を捕らえ直そうとするのが三世である。日本的枠組みに支えられた仏教がどのように再生していくのかが今後のハワイの仏教である。

また、三世を導入できるプログラム、体制ができれば、非日系人へのアプローチにも応用できるであろう。その

意味でも三世に対応した教化体制が課題となる。

(鷲見定信)

## 2. ハワイにおける伝統仏教教団の現状と課題

へハワイ浄土宗教団の現状へ

第二次世界大戦勃発までの浄土宗の各開教寺院は、日系移民の文化的アイデンティティ保持のため、純粋な宗教活動とは別に、日本語教育を中心とする様々な文化的活動を行い、日本人の「民族協会」としての役割を果たしてきた。ほとんどの寺院に日本語学校が併設されていたことや、開教使が日系人協会の要職についていたことなどがその証左である。ある意味では、寺院と開教使は彼ら日系人のコミュニティの中心であった。

しかし、その移民の子孫である二世以降の世代に、第二次世界大戦を契機としてアメリカ市民としての自覚が生まれ、彼らが英語を母国語として、アメリカ的生活スタイルを取り入れるようになる、寺院に対するニーズ

もそれまでとは違ったものになってきた。ハワイの浄土宗教団は、この変化を重要な問題と受けとめていたが、その変化への具体的対応が十分に果たせずに今日に至っている。そのため、現在のところ教線（メンバーシップ）の現状維持に腐心せざるを得ない状況である。そしてまた、こうした現状は、ハワイ浄土宗教団に限られたことではなく、広く伝統仏教教団全体の課題であると指摘されている。

今回は、伝統仏教教団がハワイの環境変化に十分対応できず、今日の状況に至った原因として、特に教団組織の構造とそこから派生する開教使の処遇の問題、そして人材養成制度上の問題について取り上げてみたい。そして、この問題を克服しようとする試みのいくつかを紹介する。

へ教団組織の構造上の問題点へ

アメリカにおける宗教教団の運営は、「プロテスタント的伝統に基づき、「会衆政体 (congregationalism)」と

呼ばれる、民主主義による合議制の教団運営が基本となっている。法的には、日本の宗教法人法に当たる特別法はなく、教会や教団は、一般法人の中の非営利法人としての位置づけによって組織化されている。

戦後に制定された日本の宗教法人法もこのアメリカの制度の影響を受けているので、教団運営を定義した定款 (by-laws) も表面上は、ほぼ日本の寺院規則と同一の体裁と内容をもっており、制度面での明確な違いは見い出せない。しかし、日本では、幕藩体制の元、長年続いた寺檀制度が、戦後の新法制定を経ても大きく変化することはなく、住職の権限や裁量権が実質的に守られている場合が多い。これに対して、アメリカの寺院は、権利行使上の代表権はすべて理事会にあり、住職（開教使）といえども複数名からなる理事のひとりに過ぎないし、この理事の地位を得ていない場合も少なくない。

この理事会制度による寺院運営では、開教使の権限は儀礼の執行などの宗教的事柄に限定される。そのため、開教使の宗教的価値観と信者である理事側の世俗的価値

観が対立することもしばしばあり、開教使の裁量権が大幅に制限されている。僧侶の持つ宗教的権威は、教団の統制権とは結びつかないのである。

#### 〈開教使の処遇の問題〉

前述した制度を前提として、各寺院の理事会と開教使の間には雇用契約が締結される場合が多く、そのため寺院運営上、開教使は寺院にとっての被雇用者という立場の側面を否定できない。各種生活保障等の待遇もそういった契約の範囲内で実施されている。このように権限が小さく、被雇用者の扱いを受けている現状から、自らの立場を「雇われマダム」と自虐的に述べる開教使もいるほどである。日米の寺院運営のスタイルの違いに葛藤する開教使も少なくないと思われる。

こうした雇用関係は、開教使の生活状況にも多大の影響を及ぼす結果となっている。浄土宗教団の場合、調査の結果、被雇用者として低賃金で冷遇されているというのがアンケートから読みとれる開教使の実感であり、そ

それを証明する各種経済指標が存在する。例えば、知的労働者という範疇でハワイ州の公立学校教師の平均給与水準と比較した場合、収入がその半分にも満たない事例がいくつもある。このように、可処分所得が少ないので、蓄えがままならず、現状はともかく子どもの教育費の問題や引退後の生活の不安があり、日本への帰国を余儀なくされる場合もある。

調査の時点で、浄土宗の場合、全十五カ寺中五カ寺が兼務寺院（専任開教使が不在の寺院）となっている。他教団の状況についても、ハワイ最大の寺院数（二十七カ寺）を有する浄土真宗本願寺教団において、その約三分の一の寺院が兼務化している現状は、ハワイにおける伝統仏教教団の慢性的な人材不足を物語るものであるが、その原因として開教使のこうした雇用関係と生活状況に由来する面を否定できない。

このような状況を改善するために、開教使が理事長職を獲得し、日本的な寺院経営で乗り切ろうという寺院が一部存在するが、アメリカの宗教風土に逆行する試みで

あり、今後どのような結果をもたらすのかは、注意深く見守っていく必要がある。一方、日本の寺院運営の慣習に影響されていないアメリカ出身の開教使を養成することによって、この問題を解決しようという動きもある。このことについては、後述の人材養成制度の項でみるととする。

#### 〈人材養成制度の現状〉

現在、ハワイ浄土宗教団に属する開教使は、すべて日本の浄土宗の教師資格を取得した者の中から、日本において任命され、ハワイに派遣されている。調査の結果、この制度に対して、現任の開教使の中には、現地の人材の中から現地で開教使を養成する制度を提案する者もある。その理由としては、すでに英語を母国語としている日系二世以降の世代や、非日系人を教化布教の対象とした場合、日本語を母国語とする開教使の英語能力の限界や、文化的背景の違いによる教化活動上の障害（前述した日米の寺院運営のスタイルの違い等）をあげる者が多

い。しかし、現在のところ、日本の浄土宗教団が、日本以外の場所で、かつ英語による一宗の教師養成を行うことは制度的・能力的に不可能というのが現状である。

この問題に関する他教団の状況は、調査の結果、以下のようなものである。まず、浄土真宗本願寺教団では、現地の信者が本山で得度を受けるための準備プログラムとして「ブレ得度プログラム」を近年から実施している。勤行・行事への参加から始め、基本的な教義・儀礼の習得と、ローマ字による日本語や日本文化の学習、教団組織の把握などを行う内容となっている。このプログラムの目的は、現時点では、浄土宗と同様、日本でのみ養成されている開教使を、近い将来、現地で養成できるようにすることをめざしたものと言える。

曹洞宗別院で実験的に開始された開教使養成プログラムは、ハワイ現地のみで通用する曹洞宗の教師資格を創設し、アメリカ出身の開教使を作り上げていくという試みである。アメリカの大学での学士号を取得している開教使志望者を対象に、一年間の奨学金の支給（四千ド

ル）をし、ハワイ大学宗教学科での哲学系・宗教系の一  
定数以上の科目の履修を必須とすると同時に、曹洞宗別  
院での僧堂教育（日課と呼ばれる）を経てハワイ現地の  
みで教師として認められる現地開教使位を授与する制度  
である。伝統仏教教団においては、現地任用開教使を養  
成する初の試みといえ、今後その成果が注目される。

（結びにかえて）

ハワイにおける伝統仏教教団は、「生き残り」という  
大きな課題を前にして、その解決法を模索している。そ  
のためには、アメリカという異文化状況下で人々の宗教  
的、文化的、社会的ニーズがどこにあるかということに  
関する深い洞察と理解のもと、それに対応した教化布教  
の方法論を組織的、理論的に確立していく以外にはない。  
ある識者が言うように、その結果は、日本仏教の殻を脱  
ぎ捨て、ハワイ（アメリカ）仏教に変貌していかざるを  
えないと予測するのは、ある意味で当然のことであらう。

（水谷浩志）

### 3・ハワイにおける仏教系新宗教の展開

ここでは仏教系新宗教の立正佼成会（正式名称、立正佼成会ハワイ教会）と真如苑（同、真如苑ハワイ）の相違点を対比することで、既に日本でも訪れつつある極端な個人主義社会における日系宗教の現状と問題点と明らかにする。

#### 〈両教団の開教の目的〉

立正佼成会ハワイ教会も真如苑ハワイもハワイ開教は、朝鮮戦争米軍兵士の花嫁のハワイ日系女性が日本で入信してハワイに戻り布教活動を開始したことに始まる。そして立正佼成会は一九五八年世界巡教の途にあった庭野日敬会長の来布が、真如苑は一九七〇年教主伊藤真乗の北米巡教の際の来布が、ハワイ支部結成に契機を与えた。立正佼成会の開教目的は、ハワイ在住信者の活動が活性化してきたことを契機に、海外信者の支援維持組織と

しての消極的な布教を開始し、近年ようやく日本本部が日系人以外への新たな信者獲得という積極的海外布教への転換を図り始めた。これに対して真如苑は、最初から新たな信者の獲得のための積極的布教を行うことを主たる方針とした。この主たる目的の差は、後に述べるように今日の状態に大きな影響を及ぼしている。

#### 〈教勢の展開と信者構成の現状〉

初期の両教団の開教目的の違いは、現状に相違を見せている。立正佼成会は伸び悩み公称六百世帯、実質三百五十世帯、個人登録信者数は五百八人である。信者構成は、日本語使用信者対英語使用信者比率は三対七で、日本語使用信者は五十歳以上が七三パーセントの高率に上り、日本語信者の高齢化が進んでいる。真如苑は、一九九四年時点で二千名を超えている。最近の新規入信者の特徴は、非日本人化傾向（四割）と若年信者が圧倒的多数を占めていることである。



## 〈布教の特徴の比較〉

ここでは、両教団の特徴を、教師のあり方、布教組織、儀礼の実践などの点に絞ってみたい。立正佼成会において教師とは教会運営と法要執行、信者指導にあたる専門（資格）である。<sup>（注1）</sup>教師教会長は一人で、日本本部から任命される。赴任期間は、各人の希望や教団の事情などによって異なるが、五年から十年の期間務める。

真如苑の場合は全く異なる。信者（教徒）全員の目的のひとつに、布教師養成機関を卒業し教師資格を獲得し僧階を得ることがある。<sup>（注2）</sup>教師養成機関として「ハワイ智流学院」があり、教師は七十二名を数える。教会長は事務職で本部専従職員が開教師を兼任し、半年間ほどの短期就任である。

立正佼成会の布教組織は、日本の伝統的な「親子」の導き型から、現在信者間の横一列の組織「フレンズのグループ」型を採用した。これは極めて拘束力が弱い組織で、自分が導いた信者であっても、信仰は自分のためであって他人に対して生活全般の悩みや相談に乗ったり

就職の世話をしたりという他人の生活に干渉したりすることを避けて他人に責任を負いたくない、という志向が強いことから採用された制度だといえる。しかしこの制度はまた、求心力のなさから組織的な信仰強化に繋がっていないとは言い難い。真如苑の場合は、真如苑の布教組織は、導きの親子関係の重視する日本での方式を踏襲している。このアメリカの宗教にないシステムは有効な布教化システムであるという。

立正佼成会の法要は、ハワイ化を推し進め、ハワイ文化を再解釈し、ハワイの神々を祭り、メモリアル・デー戦没者供養式、十二月第一日曜 真珠湾慰霊祭などを行うなど土着化を目指し、信仰の活性化と信者の獲得を目指す。法要も英語部と日本語部を別々に行う。真如苑の法要の特徴は本部中心主義、ないしは原理主義があげられる。立正佼成会と異なり、法要は日本と同じ行事を同じ日に行い、平日に当たっていても日曜日への移行は行わない。また、拙い英語で間違っても伝わるくらいなら使わないほうがいいという理由で、法要での教会長

の法話は日本語で行い、日本語に堪能な現地教徒が同時通訳を行っている。法要中には、立川本部で行われたビデオを大画面で放映し差し込むという形で、遠隔地でのギャップをメディアを利用して補い、併せて本部や継主・苑主との緊密度を強化している。

最重要な儀礼に接心がある。接心修行は、自己の魂をミーディアム（霊界との仲介者）である入神した霊能者の鏡に写しだし霊言によって、仏性を開き本来清浄な自分の心を自覚する修行法である。教徒は接心で得たところを日常生活で活かすことが求められる。

#### 個人主義社会における布教

真如苑は、「1. ハワイにおける日系人と仏教」で述べたようにこれまでの日系宗教と異なる役割を担っているように見える。真如苑はアメリカ人化した四世や非日系人に、個人が孤立し他人と分かり合えない現代のアメリカの個人主義社会で、キリスト教と異なる人間救いと個のアイデンティティを求める人たちに応じた新たな救

いを提供しているように見える。中牧のいう普遍主義的宗教として、新たな民族宗教として受け止められつつあるように見える。

最後に両教団の比較を通して、個人主義化するなかで新たなアイデンティティを模索するアメリカ社会における宗教の今日的需要とその意味について考察しておきたい。

立正佼成会は、先の調査で森岡が、祖国を離れた初期信者には法華経による先祖供養の功德が布教面で有効だったが、逆に非日系人や三世四世には、抽象的法華経の世界観やその宗教的日常生活化に対して理解が及ばないため教勢の拡大に力を失っているように見える。また、懺悔・感謝などの心根性の入れ替えによる悪因縁の断切りは、アメリカ文化圏の者には自己の否定と受け止められているために消極的になっている、と指摘しているが、<sup>(注3)</sup>現在では一層深刻になってきていると思われる。アメリカの個人主義が一層深刻化してきていて、各教団の開教使すべてが戸惑いを覚えている。<sup>(注4)</sup>特に立正佼成会

の抽象的な実践倫理の目標が、自己のアイデンティティの確立を模索する新しい個人主義社会の世代に理解されるのが難しいのかもしれない。また儀礼的实践が信仰の教化と信者間の連帯に結びついていない面もある。

日本型共同体的連帯を再強化化するシステムが第一ではなく、積極的な個人の肯定を求めるこの社会のひとびと個人のアイデンティティの確立のうえに人間的連帯感を構築することを必要としているのかもしれない。

いっぽう真如苑は、非日本人コミュニティへ浸透し、若い世代と非日系人に受け入れられている。その大きな理由のひとつは接心にある。霊能者による自己の内省を追究する接心には、自己啓発的要素もあるが一時的なものではなく、霊能力の絶対性と一生涯の修行による心なおしという継続性が特徴である。日々自己を改善して行くことが重視され、修行によっても霊界との仲介者である霊能者にもなれる。病気や事故、また人間関係（家庭の和合―夫婦、親子、職場）の悩みの解決、人格の向上、幸せを求めてといった入信動機からもわかるように、現

代社会に特有の人間関係の絆の崩壊や孤独、不安や不信などさまざまな苦悩を背負った個人に、霊能者という宗教的人格による接心を通して、直接触れ合い人間的向上を霊位の向上に重ね合わせ、人間的な信頼と生きる喜びと自信を取り戻させる宗教的システムをもっている。こうした個人的悩みや救いは現代社会の特徴であり、まさにグローバルな問題なのである。接心が懇切丁寧に信者の心の内にまで手を差し伸べるいわば宗教的カウンセリング法として教義上確立されている点と霊能者になる宗教的目標があることが大きな特徴である。さらに霊能ということが、日本ほどオカルティックに受け止められていないことも注目される点である。ひとつの宗教的資質の開発として、ニューエイジ的潜在能力開発的宗教としても受け止められていると考えられるかもしれない。また、日本ほど機能していないと言うものの、経親のタテの人間関係は、接心を日常生活の中で生かす時その先達としての経親を見本としたり相談するというように、人間不信自己不信に陥りつつも他者との信頼も失いたくない

いという狭間で揺れ動く個人主義社会の中の人たちに有効に機能しているのではないだろうか。

立正佼成会は、家族や先祖との結びつきを通して生きがいや感謝を感じ取るというこの教団の生活宗教の日本的宗教システムの特徴が個人主義的社会的アメリカで受容されるのが困難だと開教使が認識している一方で、真如苑は、霊能力を行使した接心による宗教的カウンセリシグの救いが、逆に個人主義化した世界で受容されることを示している。近代合理主義社会の混沌のなか、これからの宗教システムのあり方の重要性を示唆しているように、ハワイの宗教状況を見て取ることができるのではないだろうか。

(注1) 一九九七年度『宗教年鑑』(文化庁編、平成九年度版) ぎょうせい 七六頁 一九九八)によれば、

男女別では不明だが、総教師数は二万二千百八十八名で、信者比は〇・三六%で、一人人に対して三十六人である。

(注2) 同年度『宗教年鑑』(六八頁)によれば真如苑

の教師数は、男七千五百名、女二万五千八百七十五名の合計三万二千八百八十名に上る。全信徒数に対して四・三%で、一人人について四百三十人と高い。

(注3) 森岡清美「立正佼成会ハワイ教会の形成と展開」、石井研士「日系新宗教における青年層の受容―世界救世教と真如苑の事例を中心に」、『ハワイ日系人社会と日本宗教―ハワイ日系人宗教調査報告書―』柳川啓一・森岡清美編 一九八一。

(注4) R・ペラーは『心の習慣』九五年度版の序文の中で、九〇年代のアメリカ社会を「ラディカルな個人主義」の時代になったと言っている。「究極的な、行過ぎた」と言った意味だろうか。

(武田道生)

#### 4. ハワイにおける神道および神道系新宗教の現状

現在、ハワイにおける神社神道(ハワイ大神宮)および神道系新宗教(天理教・金光教)は厳しい現状に置か

れている。本来、民族的アイデンティティの拠り所となるべき神道であるにもかかわらず、車のお祓い程度の活動しかできていないところもある。布教の必要のなかった神社神道と、布教は「座って待つ」を旨とする金光教は、特にそれが顕著である。天理教はむしろ神道的色彩が布教上の障害になると、それを払拭しようとしてつとめている。ここではこれら三つの教団を対象に日系宗教が抱える問題点を指摘したい。

ハワイ開教の目的は、ハワイ大神宮に関しては不明な点が多いが、三教団とも個人的な布教に端を発していること、また基本的には日系人を布教の対象としている点で共通している。天理教と金光教の場合は、戦前より教団の本部の世界布教の理念のもと強力なバックアップがあり、これは今も継続されている。

教団の展開・趨勢に関しては、日系宗教、特に神道を標榜することもあって、第二次世界大戦時には、いずれの教団も教師がアメリカ本土に抑留されている。敗戦後、

天理教は教団トップの巡教と十年ごとに行われる教祖祭をバネに教勢を立て直し、ハワイ州における教会数は二十四（一九四〇年代）から三十七と増加をみている（現在の信者数は千百から千二百名程度）。だが、ハワイ大神宮と金光教に関しては教勢の低下を押し止めることに成功していない。ハワイ大神宮は戦前は大祭に一人の参拝者があつたというが、現在活動的な信者数は百名程度である。金光教は戦前は数千名いたという信者が、現在は約七百名になつている。

組織形態では、ハワイ大神宮はヒロ大神宮と同様、伊勢神宮との精神的な繋がりを重視しているが、組織上の連携は全く行われていない（教師は宮司一名）。天理教と金光教では本部との関係が強く、専従職員は本部での任命制をとり、教師になるにも本部での一定程度の研修が必要となつている。特筆すべきことは、天理教・金光教においては「親教会―子教会」といった教会の本末関係にハワイの教会も大きく規定されており、教師任命などにも影響をあたえていることである。

布教方法の特徴として、三教団とも日本国内のものとはほとんど変わりはない。ハワイ大神宮では、神宮大麻のダイレクトメールでの頒布の他は特に布教はしていない。金光教では国内同様、教会で教師が信者を待ち、「取次」を行うことを基本とする。天理教は教師による個別訪問（病氣治しや悩み相談）や奉仕活動、そして非信者をも巻き込んだ本部への団体参拝があげられる他、日本文化の普及やバザーを通して日系・非日系人にアピールしようとしている。

問題点として、まず第一に異文化・異世代間の問題がある。三教団ともコミュニケーションの問題（英語のできない布教師と日本語を解せない信者）を、大きな問題としてとらえている。ハワイ大神宮では神観の合理的な説明に苦慮し、天理教と金光教では、信者の内面に踏み込むために、英語の必要性を痛感しているという。また、三つの教団では、いずれも若い世代の教団参加を重要な課題としているが、それがうまくいっていない。天理教

は組織改革で若い人を登用するよう、工夫しているが、日系一世のプライドの高さが支障をきたしているという。一方、金光教では他の参拝者がいるところで悩みの相談を行う「取次」や、体験談がプライバシーの問題でうまくいかない。天理教と金光教は日本国内においては教師と信者との密接な関係のうえに教勢を伸ばしてきたという伝統があるため、こうした異文化・異世代間のギャップは深刻である。

第二に教師の資質・内容・養成システムの問題がある。天理教も金光教も本部が一方的に専従者を任命しており、教師のヤル気にも支障をきたす危険性がある。また教師養成に関しても、金光教では本部での一年間の研修が義務づけられており、天理教でも研修はハワイでできるが、最終的には本部に行かなければ任命されないシステムになっている。これら布教師の地採用の難しさや布教師の任期が短いために生じる帰属性の低さは布教上の障害となるであろう。

第三に新たな布教展開の困難さが指摘できる。異文化

間、異世代間、教師―信者間など、さまざまなレベルでの齟齬に十分に対応ができない。ハワイ大神宮では教団規模から考えて力量の問題といえるが、天理教や金光教のように立教から百年以上の歳月が経ち、強大な組織を有している教団では、既成化や官僚制化の問題が指摘できよう。異文化接触や世代交代の新たな局面を前に、多くの場合教団の伝統の重さが桎梏となって柔軟な対応がとれないでいる。

(弓山達也)

## 5・ハワイにおける日系キリスト教の現状

日系キリスト教教団を中心に、四つの教団の調査を行ったので、教団ごとの宗教活動の特徴と課題を以下にまとめて述べる。

a ホノルルキリスト教会 (The Honolulu Christian Church)

北米ホーリネス教会連盟(カリフォルニアやハワイの独立系の日系教会の連盟)所属の教団である。現在、英語部(三百人)と日本語部(二百人)によって構成され、それぞれに牧師がいる。信者の九割が日系人か日本からきている日本人である。

主な宗教的活動としては、日曜礼拝、キリスト教の年中行事、人生儀礼、保育等の活動を行っている。ケア・グループ<sup>(注)</sup>、青年部、熟年部、インターナショナル・スチューデント・グループ、シングル・キャリア・グループ等の教団内グループをつくり、少人数によるきめ細かい対応をして、信仰を基礎とした相互信頼関係を築くことに努力している。また活動の特徴として毎週水曜日に行われる聖書の勉強会があげられる。これは教会の中心的な布教伝道活動でもあり、一日数回少人数にて信者同士が学びあうもので、助教師(平信徒)が中心となり、単なる聖書の勉強会という性格だけでなく、悩みの打ち明け、苦しみの分かち合いの場ともなっている。教会だけでなく信者の自宅でも行われ、牧師は必ず出席するよ

うに努力して、信者との強い信頼関係を築くことに成功しており、これがこの教会の活発な活動と発展を支えている。またワイキキ・ビーチプレス（ホノルルの観光用新聞）等にカウンセリングや結婚式等の宣伝を掲載したり、他の五つの教会と共同でラジオ番組「心に光を」を放送して、積極的に信者獲得に努力している。

問題点としては、これらの積極的な活動が担当牧師の個人的な信仰と力量に基づいているため教団としての組織力にかけることや、活動の方針が個人の内面的な救いと伝道に力点を置き、社会の諸問題とは距離をおいているため、教会の社会性が弱いことなどが挙げられる。

(注一) ケア・グループとは教会設立時の中心的な活動で、少人数にて各家庭にて行われる集会で、信仰を深め、互いに助け合い信頼関係を築いてゆくもの

b マキキ聖城キリスト教会 (The Makiki Christian Church)

United Church of Christ of Hawaii Conference に所

属する教会で、英語部（八百人）、日本語部（二百人）にそれぞれ牧師がいる。英語部は日系二、三、四世で世代の高齢化がみられる。日本語部は平均五十八歳（十二年前は七十五歳）で、留学生や日本から海外赴任者を中心とする日本人一世の加入増加が見られる。

主な活動は、日曜礼拝（英語の同時通訳、ランチ）、聖書研究会、日曜学校、婦人会、日本語子供会、布教伝道活動としての 'Preschool・Elderly School'、英会話クラス（月から金、無料）、にじの集い（生活に役立つタウン情報）、のぞみの会（聖書の話や心の触れ合いを通して、シニアの人々の生活に望みをみいだす）、JOY BRDS（留学生会）、希望のダイアル（電話相談）等を行っている。また、ラジオ番組「心に光を」（月から金）では説教ではなく生活に密着した聖書の話、またテレビでは、日曜日の「連盟アワー」を放送している。多数の日本語での出版物もあり、信者に対してきめこまかい対応をして布教伝道活動に勤め、たすけあい・安らぎ・解決の場としての教会の発展に努力している。



活動の特徴としては、月曜日を除き毎日様々な活動があり、伝道活動だけでなく人々のニーズの多様性に対応してコミュニティづくりに努め、特に日本人一世の信者獲得に成功し、平均年齢の若年化をもたらししている。

問題点としては、こちらの活動が、前述のホノルルキリスト教会同様、現在の担当牧師の積極的な努力の成果であり、牧師の力量に左右される傾向がある。また日系人信者の高齢化、日本からの日本人信者の非定着化が挙げられる。

c オリヴェット・バプティスト教会 (The Oliver Baptist Church)

米国サウザンバプティスト・コンベンションに所属する教会である。ハワイには五つの教区があり、その傘下にある約百の教会のひとつである。四人の牧師がおり、信者数は約千人でそのうち約六割がアジア系である。平均年齢は四十五歳で日系の一世二世は少ない。

主な活動は、Sunday Service (朝と夜)、Midweek

Service (水)、日曜学校 (single, youngest, middle, high, adult の五部門)、語学学校 (日本語・タガログ語) 等である。

この教会では、一般信者が教会コンサルタントとして教会活動の企画・運営に大きく携わっている。特に社会活動に力をいれ、カウンセリング、ホームレスの救済、ターミナルケア、ドラッグやエイズの問題に対する支援等、コミュニティベースで活動している。

問題点としては、教会が行う社会活動に多くの人が参加するが、それが信者の獲得には至らないことである。

d チャーチ・オブ・ザ・クロスローズ (Church of the Crossroads)

アジア系の移民の独立系教会として創立された。一九五〇年代には信者のほとんどがアジア系であったが、現在は非アジア系が半分をしめている。信者数は現在、三百五十名程度であり、以前存在した日本語部はすでに消滅している。

主な活動としては、人権・差別・平等・正義・平和などに関わる社会活動を中心に行っている。儀礼よりも社会性を重要視しており、高学歴で社会的地位の高いメンバーが多い。

問題点としては、前述のバプティスト教会と同様、このような社会活動が教宣拡張に効することはなく、信者数そのものは減少傾向にある。

以上、ハワイにおける四つの日系キリスト教教団を概観して言えることは、a ホノルルキリスト教会とb マキキ聖城キリスト教会が属する福音伝道教会 (evangelical, fundamental churches等) では、信者数が増加して教宣を拡大している現象がみられる。その特徴としては、儀礼、社会活動より個人の内面的な救いや、心にふれる布教に力を入れ、牧師の深い信仰に支えられ個人個人のケアを中心に家族的な人間関係を築くことに成功している。その結果として若年・壮年層の信者の増加が見られる。

それに対して、c オリヴェット・バプティスト教会とd チャーチ・オブ・ザ・クロスローズが属する伝統教会 (Catholic, Baptist, Methodist, 等) では、教会の活動を多方面にわたって行っているが、信者数は横ばいで信者の高齢化、若年層の教会離れがみられる。その特徴としては、社会問題にも積極的に関わり、社会活動には多くの人が参加し、社会的評価を得ている。教会の運営は安定しているが信者の獲得にはいたっていない。

両者の教会にみられる共通の課題は、教会の聖職者養成過程において強い個性と深い信仰心をもつ牧師を養成する方法論の確立が重要である。なぜならば教会の活動・発展は、牧師の深い信仰に支えられた積極的な布教と、信者との相互信頼の人間関係づくりに依るからである。大学卒業後の社会経験に基づいた動機を重要視し、神学校 (大学院) において、教会運営学・宣教学・典礼学・応用神学・インターン制度など真のプロフェッショナルの養成方法で、牧師が代わっても同じ活動、状況を維持できる牧師を養成する組織を造りあげる、組織論の

# 1. 人 口

## No.83. 宗教選択——教会会員数、参加者数：1967—1993年

[単位：%。18歳以上の民間非施設収容人口ベース。数値は、表示年間に実施した数回の調査を合わせて求めた平均値。標準抽出の文化については、資料を参照。脚注に示す略号については、表紙表の図を参照。本頁前年版の表No.83も参照]

年	宗教選択					教会/シ ナゴブ 会員	教会/シ ナゴブ 参加者 <sup>1</sup>	年齢、地域	教会/シ ナゴブ 会員 1992-93
	プロテ スタ ント	カ ト リ ック	ユ ダ ヤ 教	其 他	無 答				
1967	67	25	3	3	2	73	43	18—29歳	59
1975	62	27	2	4	6	71	41	30—49歳	68
1980	61	28	2	2	7	69	40	50歳以上	76
1985	57	28	2	4	9	71	42	東北部 <sup>3</sup>	69
1990	56	25	2	6	11	65	40	中西部 <sup>4</sup>	72
1991	56	25	2	6	11	68	42	南部 <sup>5</sup>	76
1992-93	56	26	2	7	9	69	40	西部 <sup>6</sup>	55

1. 過去7日間に、教会に出席した人数 2. 1965年データ 3. ME, NH, RI, NY, CT, VT, MA, NJ, PA, WV, DE, MD, DC 4. OH, IN, MI, MN, WI, IA, ND, SD, KS, NE, MO 5. KY, TN, VA, NC, SC, GA, FL, AL, MS, TX, AR, LA 6. AZ, NM, CO, NV, MT, ID, WY, UT, CA, WA, OR, AK, HI

資料：Princeton Religion Research Center, Princeton, NJ "Emerging Trends", (定期刊行)；Gallup Organization Inc. による調査に基づく

## No.84. 宗教団体——主要データ

[信者20万人以上の宗教団体提供の、入手可能な最新情報による。情報を得られなかった少数の団体を除く。年度・信者の算定方法は団体により一律ではない。一部の団体では、数値は概数のみ。斜体の数値は1990年以前の統計その他は、「現在」の統計で、1991、1992年のもの]

宗教団体	報告年	届出教会数	報告年 (1,000)	聖職者 <sup>1</sup>
アフリカメソジスト基督教教会 <sup>1</sup>	1991	8,000	3,500	(NA)
アフリカメソジスト福音シオン教会	1991	3,000	1,200	2,500
米国バプテスト教会	1986	1,705	250	1,740
アメリカ合衆国バプテスト教会	1992	5,845	1,534	4,506
北アメリカアンディオキアン正教大司教管区	1992	160	250	200
神の軍	1992	11,589	2,258	17,280
アメリカバプテスト宣教師教会	1992	1,362	237	1,260
クリスチャン・宣教師連合	1992	1,923	289	1,609
クリスチャン・チャーチ (デヴィシルバ教会)	1992	3,996	1,012	3,883
クリスチャン・チャーチ・アンド・チャーチ・オブ・キリスト	1988	5,579	1,071	5,525
メソジスト基督教教会	1983	2,340	719	2,340
北アメリカ・クリスチャン改革派教会	1992	736	224	868
チャーチ・オブ・ゴッド (アンダーソン, IN)	1992	2,330	215	2,153
チャーチ・オブ・ゴッド (クリフランド, TN)	1992	5,776	672	2,301
チャーチ・オブ・ゴッド・イン・キリスト	1991	15,300	5,500	28,988
チャーチ・オブ・ゴッド・イン・キリスト・インターナショナル	1982	300	200	700
末日聖徒イエス・キリスト教会	1992	9,854	4,430	28,982
ナザレ派教会	1991	5,172	574	4,416
キリストの教会	1992	13,174	1,685	(NA)
コミュニティ教会、国際会議	1992	410	500	583
米国保守派バプテスト教会	1992	1,084	200	(NA)
コプト正教会	1991	7,367	2,472	8,040
福音派教会	1992	1,173	214	1,434
福音ルター派教会	1992	11,055	5,235	9,893
自由意志バプテスト、国際教会	1991	2,495	209	2,800
絶対福音国際教会	1992	1,558	207	(NA)
工ホバの組人	1992	9,890	914	(NA)
ユダヤ教会	1990	3,416	5,981	(NA)
ルター派ユニオン教会会議	1992	5,369	2,610	5,674
米国バプテスト協議会	1987	2,500	3,500	8,000
合衆国バプテスト協議会、Inc.	1992	33,000	8,200	32,832
全国原始バプテスト協議会	1992	(NA)	2,500	(NA)
米国東方正教会	1992	700	600	700
国際ペンテコスタ派神聖教会 <sup>1</sup>	1989	1,005	500	(NA)
米国長老派教会	1992	1,212	240	1,364
長老派教会 (米国)	1992	11,456	3,758	10,008
進歩的ナショナルバプテスト教会	1991	1,400	2,500	1,400
末日聖徒再編教会	1992	927	275	940
ローマカトリック教会	1992	19,863	59,221	(NA)
新世帯	1991	1,151	446	2,710
ペンテコスタ派バプテスト教会	1992	4,261	749	2,370
南部バプテスト教会	1992	38,401	15,359	38,417
キリスト連合教会	1992	6,264	1,555	4,512
連合メソジスト教会	1991	37,100	8,789	20,369
連合ペンテコスタ教会、国際	1992	3,728	550	(NA)
ウイスコンシン福音ルター派	1990	1,211	420	1,167

NA データなし 1. その他の教区任務にある牧師を含む 2. Directory of African Religious Bodies. 1991より引用 3. ユダヤ教会はアメリカン・ユダヤ年鑑による。ユダヤ教会の4派の教会員数の推計は4,750,000人  
資料：Ecumenical Programs in Information and Communications, Inc., Dayton, OH, Yearbook of American and Canadian Churches (年刊) (copyright)

参考資料 (『現代アメリカデータ総覧一九九二』より)

確立が重要である。

最後にキリスト教全体について「米国の宗教選択」をみると、中心的な位置を占めてきたプロテスタント人口は一九六七年の六七%から一九九三年の五六%まで一〇%強減少し、カトリック人口はメキシコ・南米・中米からの移民により、二六%を維持している。(参考資料 No.83 「宗教選択」を参照) また伝統教会は、教会数・聖職者数とも安定化しているが、a・bの福音伝道教会 (evangelical, fundamental churches等) では教会数・聖職者数とも増加している。(参考資料 No.84 「宗教団体」を参照)

(戸松義晴)

## 〈第二部〉 教団別調査報告

### (仏教系)

- ① パロロ観音寺
- ② ブウネネ日蓮宗教会
- ③ 高岩寺
- ④ 本派本願寺別院
- ⑤ モイリリ本願寺
- ⑥ ミリラニ本願寺
- ⑦ ハレイワ真言宗弘昭寺

### (神道系)

- ⑧ ハワイ大神宮

### (キリスト教系)

- ⑨ ホノルルキリスト教会日本語部
- ⑩ マキキ聖城教会
- ⑪ オリベッティ・バプテイスト教会
- ⑫ チャーチ・オブ・クロスロード

(新宗教系)

- ⑬ 天理教ハワイ伝道庁
- ⑭ 金光教ハワイ教務所
- ⑮ 真如苑ハワイ
- ⑯ 立正佼成会ハワイ教会

(教団別報告の調査項目)

- 1. 教団名
- 2. 歴史
- 3. 教団の組織構造と聖職者養成法
- 4. 教団の規模と最近の趨勢
- 5. 宗教活動の特徴と問題点
- 6. 今後の展望
- 7. その他言及すべき事項
- 8. 分析

1. 教団名

① パロク観音寺 Palolo Kwannon Temple

2. 歴史

開祖である松本妙清は、一八八三年熊本県に生まれた。一九一七年に夫とともにハワイに移住する。一九三二年、大病にみまわれた妙清に観音が現れ、この宗教体験により、妙清は靈能者として生きることを決意する。一九三五年パロクの現在地に、住宅を買い求め、東京浅草寺より観音像を迎えて本尊とし、「東京浅草寺観音霊場パロク観音寺」の看板を掲げ、本格的な活動が始まる。この年に、松本晃観(千歳)は、妙清が幼少のころよく参詣していた、熊本県の相良寺(天台宗)にて受戒得度を受け、帰布して住職となり、一九九四年に他界するまで任を務めた。妙清も、一九三六年に訪日し、同じ相良寺で得度授戒を受けて、帰布し五九年の他界まで住職を務めた。妙清亡き後は息子の知晃が跡を継ぎ、現在に至る。一九七四年に、天台宗ハワイ別院開創を機に、高岩寺と

共に、天台宗と親密な関係結び、以来宗教活動において密接なつながりをもつようになった。

### 3・教団の組織構造と聖職者養成法

人事面、経済面では独立した組織であるが、現住職の知晃師は天台宗から開教師としての任命を受けている。

聖職者の数は、妙清の息子である現住職の松本知晃師と、松本恵心師（知晃師の妻、俗名恵美子、群馬県長寿院にて得度）の二名のみである。

聖職者養成に関しては、現在行われていないが、現地任命はなく、またその方法も日本の資格に基づいたものである。現住職の知晃師は、駒沢大学で仏教学を学ぶかたわら、相良寺で修行の後、得度授戒をうけて僧侶の資格を得た。

### 4・教団の規模と最近の趨勢

メンバーは千八百人で、その内観音講に所属するものが三十人、婦人会に属するものが百四十九人となっている。

る。メンバー全員が七十歳以上という高齢の日系二世である。また、そのほとんどが妙清の時代からの古いメンバーである。最近入信するものは少ない。

### 5・宗教活動の特徴と問題点

祈禱寺院であり、寺の収入は、病氣平癒などの祈禱料や、御札やお守りによっている。本来が、開祖である妙清の個人的な能力（観音の靈力による病治しや子知等）によって信者を獲得した寺院であったゆえ、以前から外部への積極的な働きかけ、という意味での布教とは縁遠い活動形態であった。現在、若い世代の参詣や祈禱の依頼も見られるが、それらの参詣者がメンバーとして定着することはない。そのため、現在、メンバーの高齢化という現象は、この寺院の将来の展望における深刻な問題となっている。

### 6・今後の展望

現在の財政は赤字である。メンバーの高齢化も進んで

おり、大変厳しい状況をこの寺院は迎えている。現住職の知見師の子息に後継の意志はなく、また、そのような苦しい現状に対し、何の打開策も講じられていない。布教云々より、寺の存続そのものが危ぶまれている状態といえる。

#### 7. その他

ハワイの日系人社会は、かつては出身地区による郷土意識の強い連帯感のもとに成立していた。この教団も、熊本県人会を基盤として出来上がった組織であり、元々特定の人々をケアするために成立していたので、外の社会への積極的な開教が行われなかった、という組織的特質がある。したがって、この教団は、県人会そのものの衰退にも大きく影響を受け勢力を弱めていったものと思われる。これは、日本からの海外移民を主な布教対象としていた他の日系宗教にも見られる特徴である。

加えて、開祖の個人的資質を核として出来上がった教団であること、そして、開祖の死後、そのカリスマ性の

継承が行われず、教団に組織的運営への転換がなかったことも、衰退のひとつの要因としてあげられる。

また、病治しをされた人々が信者として定着しなかったことは、現世利益的な活動を布教活動の中心とする教団が、信者を制度的に取り込むことができず、人々との一時的な関係を永続的なものへと転化できなかつた一例として考えられよう。

(細谷光至)

#### 1. 教団名

#### ②プウネネ日蓮宗教会

#### 3. 教団の組織構造と聖職者養成法

プウネネ日蓮宗教会は日蓮宗ハワイ開教区傘下の一寺院である。

日蓮宗の場合、日本の宗務院に国際開教室があり、そこから開教師としてハワイに派遣されてくる。日蓮宗の教師資格をもっていれば、誰でも自薦で応募できるが、

最初から正式な開教師としては派遣せず、はじめに研修生として採用し、その後開教区現地ので半年間ほどの試用期間を経て、正式に開教師として任命されることになっている。

一九九〇年には、ハワイ以外の開教区と連合して、開教布教センターを開設し、開教手法の研究や様々な情報交換を行っている。また、このセンターは現役開教師のリカレント（再教育）プログラム実施のための役割も果たしており、若手開教師を中心に活発な研修が行われている。この研修は、その内容を見ると自己開発セミナーとも言うべき存在で、「何故、開教師になったのか」といった本質的な問いかけに始まり、厳しい肉体的な修練なども取り入れられている。

## 5・宗教活動の特徴と問題点

開教師が、カイロプラクティクスと呼ばれる整体師の医療技術資格を取得しており、教団の関係者でなくともボランティアで治療している。来訪するものは単に身体

的な苦痛の除去を求めてくるのではなく、その開教師に對して聖職者としての精神的な癒しを期待している場合が多いという。

現在、実験的に祈禱・靈断なども取り入れた悩み相談の機会をもうけているが、悩みの七割程度は病気に關するものなので、整体師としての職能が生かされている。聖職者としての宗教的なアプローチと医学的な手法を両立させることによって、相談者に救済の手をさしのべ、やがて信仰の目覚めへと導きたいというのが、この開教師の理想とのことである。

（水谷浩志）

### 1・教団名

#### ③高岩寺 Koganji Temple

### 2・歴史

ホノルルのハワイ大学付近にある高岩寺は、住職である慈久ローズ師によって設立された。慈久師は一九二八



(昭和三)年東京生まれで、幼少のころから心靈現象を感じる資質があったという。一九五三(昭和二十八)年、二十五歳のときに米空軍パイロットと結婚し、渡米した。一九六四(昭和三十九)年、ホノルルに移り、結婚衣装のブティックを開いて結婚相談を始めた。一九七五(昭和五十)年、ハワイ進出中であつた天台宗の布教活動に接し、そこでの羽場慈温師との出会いを契機として、尼になることを決意、比叡山で得度・受戒し、ホノルルに戻つて地藏の靈感による個人的悩みの解決を中心とする宗教活動を行う。一九七九(昭和五十四)年に独立を決意し、二年後に現在地に高岩寺が完成、法人登録する。天台宗ハワイ教区とは独立して活動を行っている。

### 3・教団の組織構造と聖職者養成法

独立した法人である。聖職者は住職のほかに、弟子として岩永慈法師がいる。得度式は比叡山で行っており、一九八二(昭和五十七)年に三百五十名が得度を受けた。聖職者養成については、一定の定まったコースはない。

4・教団の規模と最近の趨勢  
一九八一(昭和五十六)年設立時の信者は十五人であつたのが、現在の信者数は約五百人、三百世帯で、四時代の日系人が中心である。

### 5・宗教活動の特徴と問題点

慈久師の地藏の靈感による、病気や人間関係に関するカウンセリングが活動の中心である。定期的な行事としては、六月の地藏流し、四の日の地藏縁日といった地藏信仰にかかわる諸行事があり、そのほか、月一回の仏教クラスや、和太鼓・写経・御詠歌・声明などの活動にも着手しはじめているが、セクト化・グループ化を避け、平等な人間のつながりが求められている。実際には慈久師と各信者との間の個人的な信頼関係が基盤となっている。

### 6・今後の展望

慈久師の地藏の靈感という個人的な資質が宗教活動の

原点にあるため、いかにして寺の後継者を育て、組織的運営を図るかということが今後の最大の課題である。

## 7. その他

(アンケート以外の調査結果) 信者はどのようなことからの解決を求めて慈久師のもとへやって来るのだろうか。その中心は人間関係の悩みと病気である。サンデー・サービスに参加する信者数名にインタビューしたところ、具体的な人間関係の悩みとしては就職への不満(日系四十代女性)、親・夫の両親との不仲(中国系三代女性)、娘の自閉気味(日系五十代女性)、息子の非行(日系三世六十代女性)が挙げられ、病気としては髄鞘炎・静脈瘤(同)、出産後の体調不順(日系三世二十代女性)、パーキンソン氏病(日系七十代男性)が挙げられた。慈久師はこうした悩みを抱えて訪れる人々の話を聞き、地蔵の靈感(身体的変化などを兆候とする)によって信者に対して具体的なアドバイスを与えていく。また、一回の相談で慈久師との関係が終わるのではなく、その

後もサンデー・サービスをはじめとする寺院の宗教行事に参加し、信者として活動することになるが、行事においても対面での関係が維持されている。サンデー・サービスでは、勤行・説教の後、一人ずつ慈久師のもとへ来て相談をし、背中を向いて数珠による呪法を受ける。

## 8. 分析

慈久師と四十代を中心とする信者との間で人格的まじわりが積極的に追求されており、これが寺院の宗教的活動の支柱になっている。その反面、設立から十数年を経て、今後寺院をいかに組織的に維持運営していくかが課題となっているという。個人的な布教活動がのちに所属教団の組織的開教へと引き継がれた例が他の教団にもみられる。しかし、高岩寺は当初から天台宗による組織的布教と一線を画してきた。そのため、独自に後継者を育成する方向へ進んでいくと思われる。さらに、慈久師は、ホノルル近郊に在住する個人が抱えている宗教的悩みに自らの個人的な宗教的資質によって応えてきたが、こう

した資質がいかにして継承されるのかという問題もある。

(黒崎浩行)

## 1. 教団名

④本派本願寺ハワイ別院 Honpa-Hongwanji Mission of Hawaii

## 2. 歴史

明治前期にハワイに移住した広島・山口・熊本出身の移民が真宗の布教を懇願し、一八八九(明治二十二)年、西本願寺二十一世明如は、曜日蒼竜かがひそうりゆうをハワイへ派遣した。一八九八(明治三十一)年にはハワイに布教監督の職制を設け、里見法爾が監督として派遣される。翌年、今村恵猛が監督に就任するが、今村は当時ハワイ諸島各地で起こった市民啓発問題などの日系人移民の問題解決に献身し、本願寺ハワイ教団の形成を飛躍的に推進した。一九〇〇(明治三十三年)年には現在地に本堂を建立、ま

た、日本語教育のための付属学園やハワイ女中学校、仏教青年会、仏教日曜学校を創設し、各種教化組織を展開させていった。これらの活動の中心であるホノルル布教場は、一九〇六(明治三十九)年に別院に昇格し、今村が初代輪番に就任している。太平洋戦争中にはハワイ全島の開教師の抑留などに遭う。戦後、大谷光照門主夫妻がハワイ開教区を巡教する。本山および現地教団人の積極的な支援のもと現在に至っている。

## 3. 教団の組織構造と聖職者養成法

本派本願寺ハワイ教団は、各島の「教区」がつくる五つの連合会(ホノルル本願寺連合会、オアフ島本願寺連合会、カウアイ島本願寺連合会、マウイ島本願寺連合会、ハワイ島本願寺連合会)からなる。ハワイ別院には本派本願寺ハワイ教団本部が付設されている。開教師養成は日本の本山を中心に行われているが、近年はブレ得度プログラムという現地開教師養成のためのプログラムが導入されている。

#### 4. 教団の規模と最近の趨勢

メンバーは二千五百世帯で、全米の本派本願寺教団で最大規模の別院である。六十五から七十代の日系二、三世が中心であり、白人が約百人。若い層の信者数は減少傾向にある。

#### 5. 宗教活動の特徴と問題点

バリハイウェイをはさんでハワイ別院の向い側にあるフォート学園をはじめとする学校運営、日曜学校、仏教青年会、婦人会など、さまざまな組織的教化活動を展開している。他島から移住してきたメンバーや他島へ移住するメンバーは電話連絡によって引き継がれるなど、ハワイ教団内の連繫も密になされている。しかし、若い層の信者数の減少にみられるように、家庭の宗教としての世代を経た継承が弱まっている。そのかわりに、聖典重視の姿勢や、非日系人による日本文化としての仏教受容といった新しい傾向がみられる。

(水谷浩志)

#### 1. 教団名

⑤モイリリ本願寺 *Molili Hongwanji Mission*

#### 2. 歴史

一九〇六(明治三十九)年、本派本願寺布哇別院の布教場として創立された。モイリリ地域の人口増加にとまなう信者の増加によって、一九二〇(大正九)年に初代駐在開教使として小越教章師が着任した。一九二一(大正十)年に教団組織として独立、初代理事長には松平安平氏が就任した。幾度かの移転・増築を経て一九六〇(昭和三十五)年には現在の大本堂、庫裡が完成した。その間、日曜学校や婦人会によるバザー、保育園の設立などが進められ、一九六四(昭和三十九)年に着任した岡野亮震師によって寺への奉仕・維持を目的とするカルナ倶楽部の結成や教団機関誌『白道』の拡充、ラジオ番組の新設などが行われた。一九八〇(昭和五十五)年に牧野繁徳師が第十一代開教使に着任し、おもに若い世代への伝道に力を注いで、現在に至っている(参考…)モ

イリリ本願寺沿革史」『創立七十五周年慶讃法要』。

### 3・教団の組織構造と聖職者養成法

完全独立制である。本山である浄土真宗本願寺派は開教使の任命のみを行い、本山からの財政的援助は教団への寄付のみである。開教使一名のほかに事務員数名がいる。開教使は本山での養成を経ているが、現在、現地の信者が本山での得度を受けるさいの準備プログラム (pre-tokudo program) を作成したところであり、将来は現地での開教使養成を目標としている。

### 4・教団の規模と最近の趨勢

護持会会員は三百七十七名であるが、そのほかに名誉会員、婦人会会員、寺院併設の保育園 (pre school) の親からなるPTA会員、カルナ倶楽部会員、旧護持会会員などがあり、教団行事に参加するが帰属していない人なども含めると千名になる。世代構成としては五十から七十歳代が中心だが、最近若い世代に移行しつつある

ことが教団内の調査によって判っている。日系人がほとんどである。

### 5・宗教活動の特徴と問題点

御正忌報恩講、親鸞聖人降誕会、彼岸、盆おどり、永代経をはじめとする年中行事や葬式、結婚式などの人生儀礼のほかに、伝道を目的とする社会事業を活発に行っている。一九九〇(平成二)年に開始されたプロジェクト・ダーナ (project dana) は、一九九三(平成五)年にロザリン・カーター養護賞を受賞した。これは身体障害者や高齢者を在宅介護するボランティアを養成するプログラムで、モイリリ本願寺教団理事会は有識者からなる顧問委員会を組織してこれを管理し、施設・備品等を提供している。当初はボランティアはモイリリ本願寺信徒から募られたが、その後オアフの他の寺院からも参加者があり、現在まで四十名以上のボランティアが養成されている。こうした活動は社会的評価よりも、実践者自身の宗教的自覚がめざされている。また、特徴的な布教

活動としてはラジオ放送「ホワイト・ウェイ(白道)」と  
タルマ・スタディ・クラス、および T. I. P. (Temple  
Improvement Program) がある。タルマ・スタディ・  
クラスは一九八二(昭和五十七)年から開始され、日本  
語クラスと英語クラスに分かれて仏教の学習を行っている。  
T. I. P. は信者が寺の運営改善に対して発言・討論  
する場で、一九八二(昭和五十七)年、一九九〇(平成  
二)年、一九九二(平成四)年の三回行っている。これ  
らを通じて、異文化のなかで信者と共に生き、信仰する  
布教姿勢が強く求められているが、それは一方的に教義  
を押し付けがちな開教使の姿勢の克服をねらったものと  
いう。

## 6. 今後の展望

今後も日本とハワイとの文化的な相違を踏まえながら、  
現地で仏教が受け入れられる方法を見いだすことをめざ  
しており、とりわけ現地開教使の養成を必要としている。

## 7. その他

近年の若い世代へのアピールは、英語力とバイタリテ  
ィをあわせもつ牧野師の力量によるところが大きい。

## 8. 分析

社会事業や布教活動は、現地の人々の宗教的要請を理  
解し尊重しつつ、より深い信仰の自覚を促すものとして  
位置づけられている。こうした努力が信者層の若い世代  
へのゆるやかな移行をもたらしっていると見えるだろう。

(水谷浩志)

## 1. 教団名

⑥ ミリラニ本願寺 Milliani Hongwanji Mission

## 2. 歴史

一九六四(昭和三十九)年に新興住宅地 Milliani  
Town ができると、他地域から移住してきた住民の求め  
に応じ、本派本願寺の全額出資によって一九七七(昭和

五十二)年に設立された。一九九三(平成五)年に藤谷慈明師が第四代開教師に就任し、現在に至る。

藤谷師は開教師を父にもつ日系二世アメリカ人で、ハワイ大学で心理学のカウンセラーを勤め、退職後カリフォルニア州バークレーの Institute of Buddhist Studies で一年、京都の中央仏教学院で二年半学び、本願寺で開教師資格を取得した。

### 3. 教団の組織構造と聖職者養成法

本派本願寺ハワイ教区の教会である。開教師は本山で資格を取得するが、現在、pre-tokudo program (モイリリ本願寺の項参照)が進行中であり、ミリラニ本願寺からは五十代の女性が一名加わっている。このプログラムによる資格取得者は lay minister (「在家開教師」として限られた仕事に携わることになる。

### 4. 教団の規模と最近の趨勢

信者数は百七十世帯で、ほとんどが日系人であり、九

十五パーセントが日本語を話さない。四十代前半のビジネスマン、銀行員、公務員が中心である。昨年十二人入会しており、増加中といえる。また、メンバーのほかに、百二十名の児童が B-A-S-S program (後述)に参加している。

### 5. 宗教活動の特徴と問題点

年中行事や人生儀礼などは真宗に共通のものを行っているが、これに加えて、joint memorial thanks という十前後の家族を単位とする合同の祥月命日法要を寺で行っている。また、藤谷師赴任後、成道会や花まつりでは独自の装飾を施すようになっている。社会事業も盛んに行っており、B-A-S-S program という始業前・放課後および夏休み中の児童の教育環境をサポートする活動や、年四回の Honolulu Highway の清掃などを行っている。このほか藤谷師の個人的な交流によってコミュニティにアピールする広報活動も行っている。しかし、中心的な信者層である若い家族は子育てに忙しく、参加が難しい

という問題を抱えている。また、財政的には、本山から開教師個人への援助はないため、若い開教師が赴任することが困難である。

#### 6・今後の展望

葬式宗教から、生きた宗教への脱皮を図っている。そのためには、若い家族の信者が参加しやすい活動を模索しなければならない。

#### 7・その他

信者の入信動機は、新興住宅地への移住者の横のつながりを求めてということが中心である。

#### 8・分析

創立当初から新興地のコミュニティ形成と深くかかわっており、その後もB-A-S-S programのよりにコミュニティの維持に貢献する活動を通じた布教がなされている。しかし本来なら、ほぼ英語化した日系人の宗教的

な要請にいかにして応えるかという点と財政面で、難しい問題を抱えているところである。藤谷師の場合、開教師を親にもつ日系二世アメリカ人という立場も助かってこの点を克服しており、今後の日系宗教の一つのあり方を示唆するものといえるだろう。

(黒崎浩行)

#### 1・教団名

#### ⑦ハレイワ真言宗弘昭寺

#### 3・教団の組織構造と聖職者養成法

真言宗ハワイ教区傘下の一寺院として活動。開教使は日本の高野山真言宗から任命派遣されている。なお、各開教使には、日本から助成金(年額百八十万円 一九九四年度実績)が支給されている。

理事会組織を持つ非営利法人格を取得して活動しているが、開教使が理事長職を兼任しているのが特徴的。また、開教使と教団との間に浄土宗寺院にみられるような



雇用契約がないため、開教使は給料も支給されていない。その代わり、葬儀・法事・加持祈禱などの布施収入を個人収入として受け取り、生計を立てている。

#### 4. 教団の規模と最近の趨勢

檀家を特化するようなメンバー制をとらず、よって護持会費などの定めもない。

寺院行事に際しての常連信者は数十名ほどで、厄除法要などの特別行事にはその十倍ほどの参拝者がある。

加持祈禱に対するニーズをもって信者はのべ二百名ほど。

寺院側の記録によれば一九五三年当時に名簿として把握していたものが約五百名であったのが、現在（一九九四年）では約三倍の千五百名ほどになっているとのことであり、この四十年間にかなりすそ野が広がっていることがうかがえる。但し、その九九％が日系人である。

#### 5. 宗教活動の特徴と問題点

加持祈禱による現世利益追求の方法は、ここハワイでは絶対的な魅力であるとの信念を開教使がもっている。但し、加持祈禱は単なる祈りではなく、依頼者の話をよく聞くことよって、対機説法的な教化のアプローチが可能であるという認識も持っている。

「ハレイワ年長者住宅センター (HAWAII CIVIC SERVICE)」という施設を連邦政府の補助のもと、一九八二年に設立し、以来、持ち家のない高齢者に対して、住居提供という社会福祉活動を展開している。政府の補助対象事業であるので、施設内での宗教活動は見合わせているが、寺有地に建設したことよって、賃貸料などの経済的メリットが教団にも与えられている。

#### 6. 今後の展望

当寺の開教使の個人的見解としては、将来は、日本の宗門から完全に独立したアメリカ真言宗の設立をめざすべきであって、そのためには、教師の現地養成も必須という考えをもっている。自分の立場はそれまでのつなぎ

であつて、現在はその種まきをしているという自覚があるとのこと。

(水谷浩志)

## 1. 教団名

### ⑧ 布哇大神宮

## 2. 歴史

一九〇三―五年、神明教支部長である千屋松恵が伊勢神宮の大麻を頒布することから始まるといわれるが、この頃のことは不明な点が多い。一九〇七年に川崎利太郎初代宮司が高知の神社をひき払ってハワイにやってくる。一九一八年にリリハ街に遷座し、一九二〇年には布哇大神宮教団が結成されている。初代が死去した後、息子嘉添が跡を継ぐが、太平洋戦争で宮司が拘留。神社が没収解体される。戦前は大祭に一万人来たというが、こうした事情から活動は停滞。さらに戦後まもなくは嘉添が日本に戻っていたということもあつて、一時期氏子世話人

が神社の運営をし、一九五四年に嘉添が再び宮司となり、一九五八年に現在地に遷座。この後、現宮司の岡田章宏がやってくるが、六ヵ月で川崎嘉添が死去し、岡田が跡を継いで現在に至る。

## 3. 教団の組織構造と聖職者養成法

宮司一人。理事会がある。大神宮といっているが、伊勢神宮との直接の関係はない。聖職者養成は行っていない。

## 4. 教団の規模と最近の趨勢

氏子(神宮大麻のDM頒布先)は四千から五千世帯。日系人が中心である。すべてのハワイ諸島とカリフォルニアに氏子がいる。活動している信者は百人という。しかし社殿の再建の奉加帳に名前を連ねているのは十人にも満たない。主な収入は会費で、家族は年額二十五ドル、個人は男性十五ドル、女性十ドルである。また貸ホール(クラス会や踊りの稽古に貸出)をもっている。

## 5. 宗教活動の特徴と問題点

主な活動は神宮大麻の頒布、そして例祭として九月  
二日曜日に大祭を行う。その他、月次祭や正月のお祭り  
などを行う。先代宮司や世話人が英語でお祭りをし  
た時期もあり、また先代はカウンセリングもしていた。  
精神的な換り所は伊勢神宮であり、神宮への団体参拝も  
考えている。その他、結婚式、神葬祭、地鎮祭、車・ボ  
ートのお祓いなどを行い、新たなメンバーは信者が他の  
人種と結婚してその人を連れてくるなどして獲得してい  
る。

## 6. 今後の展望

宮司は神観を論理的に展開しなくてはいけないという。  
また英語の使用も重要であるとの認識ももっている。そ  
して若い人の育成、そして伝統の形を具体的に示し続け  
るといふ意味も込めて、新しい神殿の再建も重要である  
という。

## 7. その他

一九〇〇年代初頭、ハワイ諸島には五つの大神宮（伊  
勢の神宮を奉ずる神社）があったが、現存するのはヒロ  
大神宮と布哇大神宮だけである（あとの三大神宮は太平  
洋戦争を境に消滅）。一九九二年にハワイ金刀比羅神  
社・ハワイ出雲大社・ハワイ石鐘神社とともにホノルル  
神道連盟を非公式に結成し（この連盟自身は戦前からあ  
ったが、活動はしていなかった）、交流を深めている。  
これら四社から三名ずつが出席して会合をもち、  
MEMORIAL DAY の時に巡拝（いずれは慰霊祭にした  
いとのこと）、出雲大社主催のゴルフコンペ、例祭の互  
いの手伝いなどを行っている。

## 8. 分析

現宮司は家が神宮の神領にあった関係で国学院大学で  
学び資格を取得し、思うところあって、沖縄で神職活動  
をした。英語が好きで先代宮司に手紙を書いて、ハワイ  
にやってきたという。こうした海外での神社活動への強

い動機があるにもかかわらず、日本に母教団をもたず、人的・経済的な支援なしに独力で運営せざるをえない苦境にたたされてきているのが布哇大神宮の現状である。なお、実際の活動している信者は数十人とみられ、氏子をやめて、改宗する場合はキリスト教が多いという。

(弓山達也)

## 1. 教団名

⑨ ホノルル・キリスト教会 The Honolulu Christian Church

## 2. 歴史

教会は一九三二年、ヒロノ・トシオ牧師が Kakaako Mission Church より初代のホノルル・ホーリーネス教会の牧師として就任し設立された。同年五月二十五日、両教会は合併されキング・ストリート沿い、モイリニにおいて五十人程収容の小さな教会としてスタートした。一九五〇年代にマキキ地区に移住し、一九五九年にマノア

地区の現在地を購入した。教会は牧師の努力により、信徒数も増加して一九八二年新ホール建立とともにホノルル・キリスト教会と改名され、教会は発展をとげ今日に至る。

## 3. 教団の組織構造と聖職者養成法

北米ホーリーネス教会連盟（カリフォルニアとハワイの独立系の日系教会の連盟）に所属する福音伝道主義に基づく独立系教会。牧師の選定は、信仰、学歴（保守的な神学校卒業）、教会での活動、倫理性等が考慮され、教会が独自に任命する。運営、経済的にも独立している。

## 4. 教団の規模と最近の趨勢

現在組織は英語部、日本語部、保育部（プレスクリル）があり、二人の牧師（英語、日本語部）と平信徒牧師 lay minister 五人とパートタイマーによって運営されている。信徒数は英語部・約三百人、日本語部・約二百人。その構成は日本人・日系人が九〇%、残りは白人、

アジア系である。世代は四十歳代が中心で、核になって活動しているのは若い一世日本からきたビジネスマン、ハワイの人と結婚した人、留学生等）であり、活発な活動にささえられ信徒数は増加している。教会の財政状態に関しては、収入支出とも公開されており、施設は教会、メインビルディング（保育所——宗教教育に基づく、会議室、事務室等）にわかれています、三十台前後の駐車場があり、立地条件にも恵まれている。

#### 5・宗教活動の特徴と問題点

日曜礼拝、キリスト教の年中行事、人生儀礼、保育等の活動に加え、ケア・グループ、青年部、熟年部、インターナショナル・スチューデント・グループ（留学生グループ）、シングル・グループ、キャリア・グループ等があり、少人数によるきめこまかい対応をして信仰を基礎とした相互信頼関係を礎くことに努力している。また活動の特徴として毎週水曜日に行われる聖書の勉強会があげられる。これは教会の中心的な布教伝道活動でもあ

り、一日数回少人数にて信者同士が学びあうもので、勉強会という性格だけでなく、悩みの打ち明け、苦しみの分かち合いの場にもなっている。教会だけでなく信者の自宅でも行われ、牧師は必ず出席するように努力して、信者との強い信頼関係を築くことで成功しており、これがこの教会の活発な活動と発展を支えている。またワイキキ・ビーチプレス等にカウンセリングや結婚式等の宣伝、五つの教会と共同でラジオ番組「心に光を」を送して、積極的に信者獲得に努力している。

問題点としては、これらの積極的な活動が牧師の個人的な信仰と力量に基づいており、牧師の人間性に強く左右される傾向があり、また個人の内面的な救いと伝道に力点を置き、社会の諸問題とは距離を置き、教会の社会性が弱い。

#### 6・今後の展望

米国において教勢をのばしている福音伝道教会のひとつとして、さらに個人の内面的な救い、精神性をもとめ

る若者の傾向と相成り、信者数を増やしてゆく傾向にある。

## 8. 分析

教会は、牧師の強い個性に基づいて運営されているので、現在の活動を組織化してゆくことが重要である。

(戸松義晴)

## 1. 教団名

⑩ マキキ聖城キリスト教会 The Makiki Christian Church

## 2. 歴史

一九〇四年、初代奥村多喜衛牧師、前田亀太郎副牧師によりホノルル、キナウ街に日本人の為の教会として創立された。一九三二年に高知城を模した会堂を建立した。

「神はわが城、わが避所」という聖書のメッセージに従って日本人としての心を思い起こさせるためであり、日本語部が英語部を育成し、また社会事業にも尽力し多く

の信者を集めた。時代とともに日本語部会員の数は減少したが、一九七五年、土屋一臣牧師の努力により、家庭集会を中心に伝道し、三年間で祈禱会の出席者は三倍になった。英語部においても信者数は増加し、教育会館教会付属学校等を建設し発展を遂げ現在に至る。

## 3. 教団の組織構造と聖職者養成法

United Church of Christ of Hawaii Conference に所属。チェスター・タペストラ牧師（一九六三から一九六九）は教団議長となる。運営、経済的にも独立。日英両委員会から、執事、管財、会計の三部門へ代表をおくり、主任牧師が理事長を兼任。人事権も教会にあり、牧師は教会が独自に任命する。牧会のスタッフは大学卒業後、フラー神学校にて神学修士取得。

## 4. 教団の規模と最近の趨勢

日本語部、英語部にわかれていて、三人の牧師（主任、日本語部、英語部）、五人の牧会スタッフ、Elderly

Ministry (老人ケア組織) の代表、Music Director (音楽担当牧師) によって運営されている。信徒数は日本語部・約二百人、英語部・約八百人。英語部は年齢層が高くなってきているが、日本語部の信者の平均年齢は、一九八三年・七十五歳、現在は五十八歳である。英語部は日系一世から四世が中心に構成されているが、日本語部は短期の駐在員家族、留学生、国際結婚した人々等、日本人一世によって構成されている。教会には、お城型の教会、教育会館、保育部、日曜学校、Elderly Care の各施設がある。

#### 5. 宗教活動の特徴と問題点

日曜礼拝 (英語の同時通訳、ランチ)、聖書研究会、日曜学校、婦人会、日本語子供会、布教伝道活動として Preschool・Elderly School (老人学級)、英会話クラス (月から金、無料)、にじの集い (生活に役立つタウン情報)、のぞみの会 (聖書の話や心のふれあいを通じて老人の生活に望みをみいだす)、JOY BIRDS (留

学生会)、希望のダイアル、ラジオ番組「心に光を」(月から金) では説教ではなく生活に密着した聖書の話、またテレビでは、日曜日の「連盟アワー」、多数の日本語での出版物等、きめこまかい対応をして布教伝道活動に勤め、たすけあい・安らぎ・解決の場としての教会の発展に努力している。活動の特徴としては、月曜日を除き毎日様々な活動があり、伝道活動だけでなく人々のニーズの多様性に対応してコミュニティづくりに勤め、特に日本人一世の信者獲得に成功し、平均年齢の若年化をもたらし、問題点としては、これらの活動は現在の黒田牧師の積極的な努力の成果であり、牧師の人間性に左右される傾向がある。また日系人信者の高齢化、日本人信者の非定着化が考えられる。

#### 6. 今後の展望

教会の日本語部の様々な活動、例えば、英会話、JOY BIRDS、にじの集い等に人は集まるが洗礼を受け人は多くはなく、信者のハワイ定住化の問題、若年層

の既成宗教、教会離れがみられる。福音伝道教会のひとつとして、個人の内面的な救い、精神性を強調して特に英語部における日系人若年層信者の獲得が教会の安定化にとって重要である。

## 8・分析

福音伝道教会ではあるが、創始者の奥村牧師が社会事業にも尽力したという歴史性をふまえ、福音主義と社会性のバランスはとれていて、門戸は広く開かれている。しかし、社会性と信者獲得とは必ずしも比例しないといえよう。

(戸松義晴)

## 1・教団名

①オリヴェット・バプティスト教会 The Olivet Baptist Church

## 2・歴史

一九四一年創立。サザンバプティスト・コンベンションが諸民族をカバーする教会として、英語部・日本語部を併設。以後、東洋系移民の増加によりフィリピン語のサービスが追加され、日本語部が縮小され、現在では主に英語で行われている。聖書伝道を中心とした、伝統的なサザンバプティストの教会として設立されたが、当初より日曜学校、語学研修(英語・日本語)、カウンセリング、社会活動に力をいれ、教会のほかに教育会館・コンサルティング会館を建設し、また社会奉仕活動を維持するためにアパート経営もしており、安定した発展を遂げている。

## 3・教団の組織構造と聖職者養成法

米国サザンバプティスト・コンベンションに所属する教会。ハワイは五つの教区にわかれていて、その下に百の教会がある。組織的には独立し、人事権、経済的基盤は教会にあり、教会から本部に要望は上げていくが、本部からの支配・命令はない。共通の大きな問題があると



きのみ本部と協力する。教会が牧師の独立した任命権を持ち、教会が信者を推薦して神学校での学位取得 (Master of Divinity) を支援する。

#### 4. 教団の規模と最近の趨勢

現在組織は主任牧師、教育・音楽・プレス・日語担当、ほか一人の六人の牧師により構成され、教会運営の専門家であるコンサルタント数人 (信者) が企画・運営に携わっている。信徒数は約千人、アクティブな信徒は四百人であり、東洋系が六〇%、平均年齢は四十五歳で、三世、四世が中心。日本語部は、信者の高齢化とともに縮小傾向にあり、語学としての日本語科に移行中。教会の財政状態は、献金・不動産収入により、安定しており、これらの資金に基づいて日曜学校の他、カウンセリング、ホームレス救済など社会活動を行っている。信者数は活発な社会活動に支えられ急増はしないが、若年化の傾向にあり、安定化している。

#### 5. 宗教活動の特徴と問題点

Sunday Service (朝・夜)・Midweek Service (水)・日曜学校 (single, young, middle, high, adult) の五部門)、語学学校 (日本語・フィリピン語) があり、特に日曜学校には四百人が参加しており、信者伝道の方法として若年層に有効である。社会活動を「神の愛」の実践としてとらえ、カウンセリング、ホームレス救済、ターミナルケア、ドラッグやエイズの問題解決に、組織的にコミュニティ・ベースで活動している。問題点としては、宗教儀礼や社会活動に人は参加するが、その数に比例した信者数の増加には至らない。

#### 6. 今後の展望

ベビーブーマー (団塊の世代) の台頭によるせだい交替を意識して、新しい説教・音楽の確立に向けて組織的に研究中。専門的なコンサルタント (信者) の参加による危機意識に基づいた企画・運営により、社会の変化に対応した教会の社会的役割・将来像を模索しており、将

来性は高いと思われる。

(戸松義晴)

## 1. 教団名

⑫ チャーチ・オブ・ザ・クロスローズ Church of the Crossroads

## 2. 歴史

チャーチ・オブ・ザ・クロスローズは一九二三年にミッドパシフィック・インステイテュート (Mid-Pacific Institute) とマッキンレイ・ハイスクール (McKinley High School) の東洋系学生を中心にハワイで最初のインターナショナルなメンバーをもとに創立された。学生中心のメンバー構成により、初代牧師 Galen R. Weaver は "Christian Idealism and the Student Today" などの若い人々に向けた説教を行い、また、学生の勉強会を組織し、キリスト教の教義と現実との接点を見いだす努力をし、東洋系学生を中心にリベラルな教

会として急成長をとげた。しかし、一九五〇年代には初代メンバーの老年化に伴い、東洋系だけでなく、ハワイ大学を中心とした白人系の信者が増加し、現在の中心信者層になっている。社会活動を中心に活動と展開し、高学歴な信者は多いが全体数は減少している。

## 3. 教団の組織構造と聖職者養成法

米国のユナイテッド・チャーチ・オブ・クライスト (United Church of Christ) に所属しているハワイの五つの教会のひとつ。二人の牧師と一人の秘書により構成されている。

組織的には独立しており、人事権、経済的基盤は教会にあり、共通の大きなプロジェクトや問題があるときに連盟と協力する。牧師は教会のメンバーや関係者の推薦により、選定され、大学修了後、リベラルな神学校の Master of Divinity が必要とされる。

## 4. 教団の規模と最近の趨勢

現在の信者数は約三百五十名でインターナショナルな人種の構成であるが、白人のインテリ層が中心となり、高学歴・高齢化の傾向にある。教会の他にアクティビティ・ビルディング、プレスクール、駐車場等の収入が二十七万五千ドル程あり、活動の大きな支えとなっている。会場はエルタリー・スクール、ゲイコミュニティ、メモリアルプログラム等、社会的な活動の場として提供されている。

#### 5・宗教活動の特徴と問題点

創立当初より名の示すように「開かれた教会」を目指し、通常の日曜礼拝や説教、儀礼の他に社会活動に力をいれている。ベトナム戦争当時には脱走兵を支援したり、反戦、平和活動を行い、またハワイで最初のゲイの人々を受け入れ、同性同士の結婚の合法化に尽力した。現在でも、ゲイコミュニティ、アジアからの留学生支援、環境保護活動、また、他宗教との交流にも力を入れ、エクステンジブプログラムを確立し、相互理解を深める努力

もしている。

しかしながら、布教活動には力を入れておらず、それぞれの社会活動には多数の参加者があり、社会的評価の高い教会ではあるが、信者数増加にはならず、減少傾向にある。

#### 6・今後の展望

社会的評価も高く、教会の社会活動には若者も多数参加している。四世代にわたるアプローチの方法を現在研究中とのことで、効果的な布教方法を見だし、社会活動を信仰の中に位置づけ、宗教活動として位置づけしていくことにより、今後の展開は開けよう。

(戸松義晴)

#### 1・教団名

⑬天理教ハワイ伝道庁

#### 2・歴史

天理教は明治三十年代の国内布教の行き詰まり（取締り当局の干渉・圧迫の激化）により、その打開策のひとつとして海外布教を積極的に推進してきた。ハワイにおいても明治四十年前後に本席飯降伊蔵の「おさしづ」（神の言葉の取次）により、日本の本島大教会の信者が

仕事のかたわら、布教に従事していた。本格的なハワイにおける伝道は昭和四年で、やはり本島大教会長の命を受け、上野作次郎夫妻がホノルル教会を設置したことに始まる。そして数年間で開設された教会は十を超えていたという。しかしその活動も、第二次世界大戦で、教長が本土に抑留されるなどの打撃を受けた。

戦後のハワイでの活動のメルクマールは一九五一年から始まる中山正善二代真柱の世界巡教である。これを受けて一九五四年にハワイ伝道庁が設置された。当時、ハワイ全島には二十四の教会があった。そして、教祖七十年祭にあたる一九五六年を境に、戦後復興で多数の布教師が来て、教会を開設。また、教祖九十年祭に向けて、一九七四年から翌年にも第二の波があった。この人たち

が今の活動の中堅となり、現在、教会数三十七、布教所三十一となっている。ただし、国内の天理教同様、信者の個人宅を教会または布教所と呼んでいる場合も多数ある。

### 3. 教団の組織構造と聖職者養成法

ハワイ伝道庁の専従職員は本部から任命されている。現伝道庁長自身、ハワイに来たのは突然の本部からの任命だという。聖職者養成としては、本部で行っている三カ月間の修養科と同じカリキュラムを行っている。期間 は本部で三カ月で行うところを、一カ月に圧縮したもので、正式には修養会と呼んでいる。これはアメリカ伝道庁とのタイアップで、英語・日本語両クラスで行われている。ただし、布教師になるための講習のうち、九回にわたる特別な講義「別席」と、神の恵みを信者に取次ぐ力を授与する「おさづけの理拝戴」は本部に行かなければならない。

#### 4・教団の規模と最近の趨勢

現在の教団の規模は「ようぼく」と呼ばれる、教団で正式に認められたある種の靈能をもって布教をすることが許されている信者が千百人前後、その周辺を入れると信者は千二百人程度である。伝道庁内は庁長夫妻、書記二人、勤務者が六人である。伝道庁の専従職員は本部より給与をもらっている。パートタイム職員は現地採用である。土地は本部からの資金及び現地信者の寄進にて取得した。現在、ホノルル教会と伝道庁が一緒になった建物と、少し離れたところに木造の文化センターがある。一方、ハワイにある教会は国内にある伝統的な大教会の系統別に組織されている。なお、一九七四年から八五年にかけて、プレスクールを経営していた時期もある。

#### 5・宗教活動の特徴と問題点

基本的には国内とあまり変わりが無い。信者の入信動機も、身上（病気）と事情（人間関係をはじめとする生活上、全般の諸問題）の解決であり、教会での日常的な

布教活動も、信者個人による戸別訪問、奉仕活動などである。また、天理教で重視している聖地（おやさと）への団体参拝（おちばがえり）は地理的条件もあって盛んに行われているわけではなく（なかには熱心な信者で、教祖殿での結婚式を希望する人もいる）、個人的、小グループでの参拝が中心である。それでも「子供おちばがえり」と高校生を対象とした親里セミナーは最大規模の時は百五十人から百六十人が参加した。（普段は五十から六十人）。これらの団体参拝には、信者が経営する学習塾に来る子供や、信者の友達など、非信者を連れていくばあいもある。なお、婦人部も団体参拝を行っている。ハワイでの天理教の特徴的な活動としては、結婚式でのリング交換など、冠婚葬祭をハワイアンスタイルとの折衷で行うことがあげられる。また地域の要請で車や事務所のお祓いが求められることも多い。ただ、天理教にはお祓いはないので、地鎮祭の形式をとり、その後の講話に重きをおく。また、教会によってはホスピスや精神病のお助けを行っているところもある。伝道庁内には図

書館が開設されており、日本語の図書が置かれ、ハワイに仕事で赴任してきたビジネスマンやその家族（必ずしも信者とは限らない）に好評を博しているという。こうした文化事業は、さらに天理文化センターが主体となつて柔道、雅楽、鼓笛、華道・茶道、ジャズバンドなどを通して日本文化の保存・普及に努めている。また、バザーも盛んに行われ、開催すると常時数百人の参加者（未信者や近所の人を多数含む）がある。

以上のような活動は、従来の教会スタイルだと、神道的雰囲気が強くて若者が拒否反応を示してしまうが、文化活動を通して馴染んでもらいたいという意図によつて行われている。そして、教への根幹に触れるようなものでなければ、庁長の判断でハワイのスタイルを取り入れるように心掛けているともいう。しかし、祭典などは、基本は翻訳できないものだから、たとえ各国語でやるとしても、一体感が失われてしまう問題が懸念されている。また、言葉の壁やジェネレーションギャップが存在するのも事実だ。例えば新たに教師が日本から来ても英語力

不十分の場合は、若い信者の内面に踏み込めないという。そして日本から来た教師と二、三世との間の意識の齟齬もみられる。英語使用者を表にたてようとしても、英語のできない一世たちのプライドが高く、隠居しないことが、こうした軋轢の原因のひとつでもある。祭典での祭文と講話を日英同時通訳で行うなど、軋轢の解消に努力しているが、現在は英語力不十分な一世たちから、二、三世たちへの世代交代の過渡期であるという。またこうしたことは天理教特有の問題というよりも、ハワイの日系宗教が等しく抱える問題であるという認識を庁長は持っている。

#### 6・今後の展望

天理教では、図書館活動、そして柔道、雅楽、お茶やお華などの文化事業を積極的に行っている。これは二代真柱が海外布教に熱心だったことに由来する。しかし、これでうまくいっているという考え方自体再考の必要はあるだろうとのことである。今後は若い人を中心に動い

てもらいたいと庁長はいう。現に「ようほく」のなかで非日系は一割程度だが、教会にくる人は三分の一が三世以降で、若い世代には可能性があるという。「布教の家」で日本からの一世、現地二、三世の若い布教者を養成し、常時二、三人の入寮者がある。これからはできるだけ、若い世代が伸び伸びと活動できる環境をつくることが課題であるようだ。

## 8・分析

インタビューにに応じていただいた永尾一夫庁長が指摘する通り、ハワイの天理教が抱える問題は、ひとり天理教ハワイ伝道庁だけの問題ではない。言葉や世代間の断絶は他の教団にもみられることであろう。また、ハワイ伝道庁の諸問題は国内の天理教でも確認できることでもある。大教会の系統でつながっているために縦（布教の親子関係）のつながりは強いが、横（地域）のつながりが稀薄な組織体制。官僚制が高度に貫徹したために生じるやる気の欠如や個人の能力が十分に発揮できない、発

揮させないような雰囲気。さらには伝統を固守するあまり、教外者とのコミュニケーション不全に陥りがちな体質。これらは天理教全体が直面している、しかもここ十数年来の解決すべき課題でもある。

（弓山達也）

### 1. 教団名

#### ⑭金光教ハワイ教務所

### 2. 歴史

一九二六年、ハワイに金光教本部青年会幹事長が視察し、これを布教元年とする。組織は真道会まみちという名で発足するが、本格的な布教は一九二八年に小倉教会の児玉政行の赴任による。一九二九年にホノルル教会、翌年にはヒロ教会が設立された。一九三九年にホノルル教会はリリハ街の現在地に移転。教勢はオアフ島以外にも伸びたが、太平洋戦争で教師が米本土に拘留され、布教活動は禁じられた。布教の再開は一九五〇年代にずれ込んだ

といい、現在でも戦前の教勢が回復したとはいえない状況である。

### 3・教団の組織構造と聖職者養成法

教会数六（オハフ島三、カワイ・マウイ・ハワイ各島一）を、ホノルル教会の建物の中にある教務所が統括している。芳野正彦教務所長は日本における自分の教会の親教会にあたる甘木教会長に要請されて赴任した。金光教では布教の際の導きの親子関係を重視し、教会を設立したばあいも、それまで通っていた教会を親教会と呼んで尊重する伝統がある。なお、ハワイの六つの教会のうち五つはこの甘木教会の系統である（手続き上は教師はすべて本部で任命しており、現地任命者はいない）。教師になるには国内同様、本部の金光教学院で一年の研究をうける。

### 4・教団の規模と最近の趨勢

教師数十九（一人だけ二世で、あとは日本から来た

人）。信者数（教徒・信徒・求信者）七百。教徒はすべての冠婚葬祭を金光教で行う。信徒は参拝するだけ。求信徒は年に何回かくるだけという区別がある。戦前は信者数が数千単位だったが、戦後、特に一九七三年に児玉政行ホノルル教会長が死去したことが教勢ダウンの契機となった。児玉夫人が取次をしていたが、彼女の死去、取次をする人がいなくなった時期もある。財政状態も良くないので、年二、三ドルを会費として集めているが、この寄付制度導入（一九七九年）で信者減に拍車がかかったともいう。

### 5・宗教活動の特徴と問題点

国内とあまり変わりはなく、教師が信者を教会で座って待ち、カウンセリング形式で神と人との「取次」を行なうことが布教の基本形態である。これは金光教の伝統的な形態である。教会活動の中心は日系一世であり、教会との関わりも家庭の問題や病気といったように日本国内の事情と共通している。日本の親教会や本部とのつな



がりも強く、一、二年に一度は本部への団体参拝が三十人規模で行われる。

ハワイ独自の活動にサンデーサーブスがある。これは日英通訳で行う。取次も日時を決めて通訳を用意している。この他、社会活動として病院への慰問、ハワイ州のクリーンアップ・キャンプに参加している。また船・車・事務所のお祓いやJTBのバスのお祓いもする。そして宅祭という、主に教会（ときには信者宅）で行う家族単位のお礼のお祭は日本より盛んだという。一九九四年に初めて YATSUNAMI FESTIVAL を開催 (YAT-SUNAMI とは八つの波のことで、金光教のシンボルマーク)。

現在抱えている問題としては日系一世の死去にともなう、教勢の自然減少がまずあげられる。聖職者養成に關しては、教師になるのに本部に長期間（一年）行かなければならないことが義務づけられているのが問題視されている。これに關しては人材不足という点からハワイと北米より本部に異議申し立をしている。

## 6. 今後の展望

教務所長自身は特にないと前置きしながらも、問題は子供であり、高校に入る前にどのように子供に信仰心をもたせるかが重要だと語った。

## 7. その他

金光教は他教団との連合は国内では教派神道連合会だけであるが、ハワイにおいてはPL、解脱会、立正佼成会の人とは家族ぐるみの「和気あいあいのお付き合い」であるという。世界宗教者平和会議(WCRP)にも加盟しており、これはWCRPに教会独自に加盟している金光教泉尾教会の三宅氏がハワイに教師として来ていることによる。

## 8. 分析

金光教は国内においても戦後一貫して教勢がダウンしている教団である。戦前百万ともいわれた信者数は現在四十万台にまで減った。ハワイにおいてもこの傾向は同

じである。原因は戦中の教師拘留だけでなく、むしろこの教団の布教方法・布教理念にあるようだ。本来、金光教の信仰は個人の内面の「心のおかけ」を重んじるなど、個人主義的傾向が強いことが指摘されてきた。また取次というカウンセリングにも似た手法は欧米人で受け入れられるはずであるという希望的観測も教団内にはあったという。

教務所長は「特定の人を選んで布教するのは差別であると思う。座って待つのは誰でも引き受けるということである」と取次による布教の理念を語る。が、彼のホノルル教会は日中もカーテンを締め切って、開店休業状態である。また「ハワイの教会は明治のときの信仰を引きずっている反面、個人主義的である。病気が治ったら来なくなる。プライバシーを重んじるため、取次がうまくゆかない。日系人はもはや日本人ではないと思う」ともいう。日本と異なる精神風土（個人主義的傾向）を認識していながら、それに対応できる布教を見いだせないというのが現状である。個人的な教団の性格も、カウンセ

リング的手法も、人々が「金光教」に何を求めているかを適確に把握できなければ、有効な武器にはなりえない。これについては教務所長のハワイ赴任の動機づけの弱さも指摘できるが、問題は国内と同様、社会変化への教団の不適応にあるといえよう。

（弓山達也）

## 1. 教団名

### ⑮ 真如苑ハワイ Shimyo-en Hawaii

## 2. 歴史

米軍人 Jimmy Raynor と結婚した弘子が日本で入信し、朝鮮戦争終結後夫婦で渡米。各地の基地を歴任した後来布し、教化まもつけお助けを行っていた。一九七〇年教主（当時）伊藤真乗、北米巡教の際に来布し、ミリラニの同夫妻の家を布教所として、栗山乗心を布教師として布教所を開設した。一九七三年ベレタニアに精舎が落慶し、現在の基礎が確立する。一九七七年青年会結成。一九八

三年精舎にアネックス部分増設。同年、ミリラニ・メモリアル・パークに教徒用墓地、一エーカー（千二百坪、夫婦単位墓地）購入。一九九三年大祭を執行する。

### 3. 教団の組織構造と聖職者養成方法

〔組織構造〕 布教師一名（高田尚弘、たかだ なおひろ、靈能者）、事務局員七名で構成される。事務局員のうち、事相面と事務面を取り扱う靈能者は一名（ギブン・徳永）、翻訳者二名。布教師は一九七〇年以来八〇年まで、栗山師が務めた後、数ヵ月単位で総本部職員が赴任。現在まで総数二十名以上を数える。あくまで本部職員の兼務である。たとえば現高田師は本部人事課職員である。日本と同様、各地教会の独自性は出さない。法律上の制度とは別に、立川総本部国際部に所属し、日本支部（教化課地方部所属）と同等の扱いを受けている。

〔聖職者養成〕 教師の有資格者は、七十二名。教師はハワイ独自の智流学院（pre-school 一年十三年、月二回、土曜日二時間）で、本部の授業のビデオテープ、翻

訳教科書で学び、最終試験合格を経て卒業することによって資格を獲得する。本部の智流学院とは別個の組織である。在籍者は六十名。

### 4. 教団の規模と最近の趨勢

信者数は約二千名。そのうち積極的信者である一如教徒（積極的参加者、英名 follower）は約千五百名。靈能者は、八名。信者は会費を納めて入信手続きを行うが、重複帰属もある。特に真如苑に絞ることは強調しない。信者組織は、任意で少年部（十一歳以下）、青年部（十二から三十五歳）、壮年部（三十六歳以上）に所属するが、壮年部は不活発。

最近の信者構成に見られる特徴は、(1) 日本国籍者が二割弱を占め、非日系人が四割を超えている。(2) 五十歳以下が、六五%を占め、五十一歳以上は二五%に過ぎない。(3) 重要法要である大祭の出席者は、少年部と青年部で三五%を超える。以上のように日系宗教の中では、極めて特殊な傾向を示し、グローバル化の傾向が明らかである。

## 5. 宗教活動の特徴と問題点

〔定期儀礼〕法要などの行事は、日本と同じ行事を同じ日に行い、平日に当たっていても日曜日への移行は行わない。頑に日本式を固守している。日本と同様、毎週土曜日早朝奉仕として、精舎の周囲四ブロックの清掃奉仕を行っている。七十から八十人が参加する。

〔法要形式の特徴〕日常勤行では、英訳『教書』をもとにした勤行をギブン師か高田師が導師となつて行う。

法幢（説教）は同時通訳で行う。本部からの布教師は英語をほとんど話せないが、何ら問題としていない。大法要の最初と最後は、ハワイの導師と信徒で行い、護摩・表白は一年前の総本部で撮影されたビデオテープをささみこむ形で流して行う（月例行事の場合は、一カ月前のビデオ）。

〔不定期活動〕ハワイ独自の活動としては、他教団と同じくプレッシングを行う。葬儀は年六から十回行っている。依頼信者の重複帰属の有無を確認して、納得させて行う。葬儀を行う信者の霊位は大乘以上の者のみとい

う基準が日本では定められていて、それに準じている。

基本的には菩提寺を優先させている。結婚式は年二から五回行う。正式と略式に分けられ、略式は、一般の式を挙げた後で二人だけで宗教的な意味から教団で行うもの。初参りも行われている。最近始められた活動に、ロータスクラブ（壮年部）がバザー出品作品を制作したり、帰死（教会へ参集）する人へコーヒーを出し歓談する。青年部は古着を集め、医療施設、ホームレス、台風被害者への援助を行っている。キープ・アメリカ・ビュティフル・ムーブメント（全米清掃運動）に参加している。真如大鼓は、大祭後のパーティーで披露されたり、民間の催しの依頼にも参加している。地域学校のペンキ塗りや、修理を行ったり、子供コーラス隊の senior citizen hospital の慰問も年一回行っている。最近ではこうした対社会的な活動にも関心が向けられているのが特徴である。

〔最重要儀礼〕接心は向上接心（法要後）、相談接心（子約制、霊能者と一対一、平日夜が中心）に別れる。

〔特徴的な布教伝道方式〕接心による経すけと導きの親子関係という布教伝道ならびに日常活動の信者同志の人と人の結びつきを重視している。

〔布教伝道の問題点〕(1)導きの親子関係がアメリカの個人主義になじみにくく、うまく機能しない。一緒に活動したりとかへ心の手助けといった親子の日常の活動が十分に機能せず、自分中心の点が見受けられ、個人主義への対応の難しさを感じている。(2)日本と同じ読経時間は、法要を短くしてほしいという要望があり、ハワイでは長すぎるので、読経を短縮する「ハワイ流」を行っている。しかし、これでいいか疑問視されてきている。(3)総本部帰苑の要望が多いが、本部の規模の問題もあり、制限している。(4)葬儀の要望。日本の基準(大乘以上)に沿った形で行えるか検討中。葬儀執行できる布教師が二名しかないないので、制限している。実際には二重帰属がある場合など、菩提寺優先をお願いしている。(5)年中行事である平日執行の法要を日曜日に移行してほしいというアメリカ流の要望が出されている。(6)仏陀をキリス

トより低く見るキリスト教文化の影響が信者に見られる。

## 6・今後の展望

信者構成からも分るように、日本人コミュニティへの浸透が盛んであり、若い世代と非日系人に受入れられているので、将来性を確信している。布教活動も、人種や世代による差異を一切行っていない。二年前に正式な英語版『朝夕のおつとめ』が出来、これによって読経のスタイルが確立した。機関誌『内外時報』の英訳版『The Nirvana』が始まったが、内容が短すぎて理解が難しく、『歓喜世界』などの英訳が望まれている。また、最も将来に自信をもっている理由は接心という教団独自の儀礼にある。霊能者による普遍的な救いは、いわゆる自己啓発の意味もあるが、それ以上に霊能力の絶対性、継続性があり、人の弱い面の指摘だけでなく、ステップ・バイ・ステップで自己を改善して行けるし、自己の修行によって自分も霊能者になれる。この接心が将来に対する希望の源となっている。英訳『教書』がもたらす信心の

変化が楽しみとされてもいる。

## 7. その他

病氣や事故、また人間関係（家庭の和合―夫婦、親子、職場）の悩みの解決、人格の向上、幸せを求めてといった入信動機からも分るように、日本のように先祖供養、水子供養の求めはあまりない。真如苑は、現代社会に特有の人間関係の絆の崩壊や孤独、不安や不信などさまざまな苦悩を背負った個人に霊能者という宗教的人格による接心を通して、直接触れ合い人間的向上を霊位の向上に重ね合わせ、人間的な信頼と生きる喜びと自信を取り戻させている。こうした悩みや救いは現代社会の特徴であり、まさにグローバルな問題なのである。接心が懇切丁寧に信者の心の内にまで手を差し伸べるいわば宗教的カウンセリング法として教義上確立されている点と霊能者になることと義務達成の宗教的目標が大きな特徴であり、ここに彼らの将来に対する自信を見ることができ

（武田道生）

## 1. 教団名

⑬ 立正佼成会ハワイ教会 Rissno Kosei-kai Hawaii Kyokai

## 2. 歴史

一九五一年ハワイ・マウイ生まれの二世尾崎知子、ハワイ生まれで、やはり日系二世の男性と結婚。戦争花嫁として来布し、ハワイ島コナ、マウイ島ワイルク、ホノルルで布教活動を開始する。日本の第十二支部に所属する。一九五八年庭野日敬会長、尾崎宅を訪問。一九五九年コナの尾崎宅に立正佼成会ハワイ支部を結成。新潟支部長だった湯川和重ゆかわかずえがハワイ支部長に就任する（五九年三月二十二日―六五年六月五日）。一九六五年湯川師の後継支部長に尾崎師が就任（一七六年十月三十日）。一九六六年ハワイ支部はハワイ教会となり、尾崎は教会長に就任。一九七二年本部援助とハワイ信徒の寄付によってパール・シティにハワイ教会修養道場開設。ホノルル、マウイ、コナの三支部が発足。一九七六年もと学林講師だった増田修一ますだのぶかずが教会長として派遣される（一八四年十

二月十日)。一九八四年山本芳久、教会長赴任(十二月十日)。

### 3. 教団の組織構造と聖職者養成法

ハワイ教会は、本部教務部海外布教課に所属していて、教区になっていない。教会長一人、*associate minister* 三人(うち白人男性一名・ホノルル在住、三ヶ月日本のセミナリア・スクールで研修し教会で実習を受けた。中国系女性一名・マウイ在住。日本人女性一名・コナ在住、戦争花嫁)。理事(二年に一度、メンバーの互選選挙で選ばれる。理事長、副理事長、秘書、会計、会計補佐、マウイ代表、コナ代表——ハワイ教会長の推薦で東京本部会長が承認。)

現在の信者組織は九一年に成立した。それまでの日本型のタテ割りの「支部長—主任—組長—班長」制度をやめ、横一列のフレンズ組織とした。「フレンズのグループ」と呼ばれるものは、英語十八、日本語三十グループ。(フレンズと呼ばれるまとめ役が組を持つ。フレンズは

代表として責任をもつことはない。手取りも導きもする場合もあるが、連絡だけする場合もある)

〔聖職者・教師の養成・任命方法〕現地での任命権はない。*associate minister* は教会長の推薦で会長が任命する。基本は、日本の学林が専科で資格を取らなければならぬ。しかし専科の三年間の寮生活になじまず帰郷した例がある。ハワイ現地の布教研究所の設立を熱烈に希望している。

### 4. 教団の規模と最近の趨勢

信者数は、公称六百世帯であるが、実質は三百五十世帯で、登録信者数は五百八人である。信者は世帯ごとに月二ドルの会費を払う。信者の特徴は、(1)日本語中心信者と英語中心信者の比率が、三対七であること。(2)日本語信者は七十二%が五十一歳以上であり、これに対して英語信者は、零歳から八十歳台まではすべての階層にわたって平均しているが、五十一歳以上は五三%に下がる。

## 5. 宗教活動の特徴と問題点

本来は、海外在住信者の世話を行う組織として開始したが、最近になってやっと海外布教として本腰を入れ始めたところである。

〔定期儀礼〕 基本的には、日本と同じ法要を行っている。日曜日の法要は、日本語式典と英語式典を別々の会場で行っている。本部中心主義にも限界があり、ハワイ独自の立正佼成会であるべきとの立場から、式典にもハワイの独自性を導入している。たとえば基本的には日程の決まっている大法要は正当式典日に一番近い日曜に行われるし、五月最終日曜には、Memorial Day 戦没者供養式を行い、八月十五日にはホノルル灯籠流し委員会主催の終戦記念日に、高さ三メートルの万灯を持って練り歩くお会式パレードで参加する。十二月第一日曜の真珠湾戦没者慰霊祭にも参加するし、法要の内容についても英語サンデーサービスでは、ハワイでの土着化をめざして、三年前から内容を変容させ、日本における法華経の守護神信仰にそって、ハワイの神々を守護神として取入

れ、第一日曜にハワイアン・デイティズ・メモリアル・デイとしている。法華経によって顕現される久遠の本仏を重視した姿勢。

〔不定期儀礼〕 (1) 葬儀は年間、五から六回行っている。

(2) 結婚式は年間数件だが、多い時は十数件行う。初参りも行われている。(3) 年回法要については、四十九日法要は自宅で行う。教会では頼まれた時のみ。信者の職業がサービスマン業観光業者が多いので、平日に行う事も多い。

日曜の参拝や法要は少ない。退職した老人は子守り、若夫婦は休みが無く日曜は忙しい。学校児童は地域活動やスポーツに忙しく親も参加するし休養したい。一カ所の教会に人を集めるのは無理。小さい集会所をたくさん作る方が良く考えている。(4) 方位を見る。(5) 姓名判断。

(6) 法座(月に三から五回、メンバー宅で行い、教会長は立合わない)。(7) お清め。

〔現在行われていない活動〕 (1) 悪因縁の強調をやめた。

アメリカ的思考から自己の否定と捕らえてしまうから。

(2) 日常の式典や御命日の供物には、野菜、果物、魚をあ



げていたが、英語文化圏のメンバーから苦情が出て変更した。(3)二十四時間体制での救い宿直制度を行っていたが、治安上の問題からやめた。現在の教会開場時間は朝八時から午後三時まで。

宗教活動の特徴は、以上のように積極的にハワイ化を進めている点にある。また社会的活動事業として、(1)アルツハイマー・デイケア・センターの会場提供。毎週火曜日は二名、土曜日は五から六名の患者を預かる。八〇〇―一三〇〇(2)ファンド・レイジング・コミティの集めたチャリティ基金を各社会団体へ寄付を行っている。宗教法人として社会還元は義務であり、年間予算の四%が目標。

〔問題点〕家族親戚は他宗教で布教の余地があまりないので職場での人から人への伝道が中心となってきた。僧伽内での人間関係の争いが絶えない。日本と異なり、アメリカ人の個人主義の本音社会だから、はっきり物を言いつつ自立性が強く、逆に組織内のまとまりが弱くなった。受動的な体質とあいまって混乱が未だに見

られる。異文化を背景とした人へ、久遠本仏と自分という信心の確立の真の信仰を植え付けて、生活の中で表すことは難しい。儀礼の土着化では解決できない。信者からブレ・スクールの開設を求める声があるが、現状ではできない。

世代間や文化間の宗教意識に相違があつて、三、四世はアメリカ人であり、思考や文化的差異がある。また言語的にも、日本語を話せない世代に対する対処が重要。英語を話せる associate minister を育成中である。

#### 6. 今後の展望

家庭や職場での人間関係の悩み・トラブルや少数だが仏教への関心といった入信動機からは、職場でのいじめ、あざさがし、弱点をつかれるなどの人間不信が根底にある社会の悩みを感じる。家庭での夫婦や子供の問題も大きい。こうした問題の解決に、高い信心をメンバーに育てあげ、生活で実践させるへ自灯明・法灯明の確立が希望だが、今の段階ではまだできていない。日本型の信

仰形態をハワイで展開することについて、特に人間関係の結びつきを重視する方法が、うまく見いだせていないように見受けられる。

(武田道生)

「開教(海外布教)研究」班スタッフ(平成十二年三月)

鷲見定信(研究代表、主任研究員)

水谷浩志(研究主務、非常勤研究員)

武田道生(専任研究員)

戸松義晴(専任研究員)

弓山達也(嘱託研究員)

黒崎浩行(調査助手)

細谷光至(調査助手)

# 布教・情報研究成果報告

パーソナルコンピュータ

## PCの普及化と「阿弥陀仏の表現」について

布教・情報研究班

### 目次

#### I. はじめに

##### 1 本研究の目的

(1) PCの普及化

(2) 「阿弥陀仏の表現」

##### 2 研究の方法

(1) PCの普及化

(2) 「阿弥陀仏の表現」

#### II. 研究成果報告

##### 1 PCの普及化

(1) 現状認識

(2) 情報化と布教

① 一般檀信徒に対する情報メディアの変化

② 教師の使用する布教テキストの変化

(3) デジタル化の利点

##### 2 「阿弥陀仏の表現」

(1) 浄土宗内出版書籍上の各種表現事例

① 法蔵説話によって阿弥陀仏を説く

② 無量寿・無量光から阿弥陀仏を説く

③ 大宇宙・生命の根源であると阿弥陀仏を説く

④ 私たちの親様、大親様として阿弥陀仏を説く

⑤ お陰様で生かされている、そのお陰様こそ阿

弥陀仏であると説く

⑥ 私たちは阿弥陀仏から命を授かり、阿弥陀仏

のもとに帰ると説く

⑦ 私の心の中に阿弥陀仏が在すと説く

(2) 浄土宗布教師対象「阿弥陀仏の表現」について

のアンケート調査報告

① 概要

② 調査結果

### III・研究会経過報告

1 平成十年度報告

2 平成十一年度報告

### IV・おわりに

## I. はじめに

情報機器、特にPC（パーソナル・コンピュータ）に関しては、年と共にハードとソフトの両面にわたって飛躍的な発展を続け、寺院活動を能率的に行うには必須の備品となってきたが、利用者にとっては、その発展に技術と理解が追いついていけない現状である。こういった状況を打破するためにこれらの機器の取り扱いに関する疑問に答え、機器の活用ができるように情報を提供してその対応策を考えてゆく必要がある。

また、宗内教師の布教活動を活発にするためには、使いやすい布教資料を提供することが大切である。たまたま第六十八次定期宗議会において、阿弥陀仏の表現に関する質問があったことを契機として、本宗における教義上の根本命題を明確にして、布教活動に資する目的をもって「阿弥陀仏の表現」についての研究を取り上げた。

過去に知恩院浄土宗学研究所から発行された『阿弥陀

仏の理解と表現』においても、当時の一宗を代表される方々の理解や表現はまちまちであったが、それから三十年近い時間が過ぎた今日、伝統列祖の解釈を根本義としつつも、更に時代即応の表現を模索することを考えて研究に取り組んだものである。

## 1 本研究の目的

### (1) PCの普及化

本研究班は、平成十年四月十三日、研究代表・八木季生客員教授より主旨説明があり、スタートした。社会機構が発達すればするほど、多機能な社会活動が可能になるが、複雑多量の情報処理をしなければならなくなる。現代社会に宗教が大衆の生活に溶け込んで存在するためには、布教教化活動を情報活動として時代の流れに即応させる必要がある。

布教は寺院を中心に檀信徒を集めて行われてきたが、生活様式が多様化するにつれて、従来通りの布教方法では十分な活動ができなくなってきた。各種情報機器、特

にPC（パーソナル・コンピュータ）が各家庭に普及し、インターネット等、電話回線を通じて居ながらに情報入手することが可能になった現代では、布教活動は情報活動を強化することで活性化が可能である。

### (2) 「阿弥陀仏の表現」

前述の如く、第六十八次定期宗議会において、五重勸誡を含む浄土宗布教の現場で、阿弥陀仏を聖道門的な解釈で説かれる方が多いと言うことが問題になった。

確かに阿弥陀仏に関して、学術的な立場と実際の布教のうえとでは、視点が異なることが感じられる。

過去に知恩院浄土宗学研究所より発行された『阿弥陀仏の理解と表現』においても、宗内の各先達方の説かれる阿弥陀仏身観は様々であるが、ここでもう一度、布教情報としての阿弥陀仏身論を再確認、整理検討する必要があるのではないか。

① 以上の見地から本研究班では次の二点の研究を進めた。

いての普及化（一般化）

## ② 布教情報、特に阿弥陀仏に関する徹底研究

## 2 研究の方法

### (1) PCの普及化

このことに関しては、「バーチャル寺院・善照寺」ホームページを開設・運営している今岡達雄研究員より、「情報とは何か」という内容で講義を頂いた。

また、研究員相互の連絡及び意見の記入、保管を目的として、インターネット上に「情報研究班分室」という掲示板を設置し、頻繁に意見交換を行ってきた。

さらに、浄土宗総合学術大会（平成十年九月十日、於佛敎大学）において、故大室照道（平成十一年六月突然遷化）研究員から「マイクロソフトフロントページ98を使用したホームページ発行の一例」、今岡達雄研究員から「インターネットによる宗教意識調査」のタイトルで、それぞれ発表をした。

### (2) 「阿弥陀仏の表現」

この課題に関しては、各研究員が分担して經典、祖師方の書物から阿弥陀仏身論の洗い出しを行うこととした。一応、研究員共通のテキストが必要であろうということで、初年度（平成十年度）は基礎的な勉強をすることとし、『浄土敎文化論―阿弥陀仏篇―』（山喜房）及び『浄土仏敎の思想』（講談社、全十五巻中既刊本のみ）を使用することにした。

そして、二年度（平成十一年度）は、その基礎をふまえて、具体的な表現について研究をすることにした。

## II. 研究成果報告

### 1 PCの普及化

#### (1) 現状認識

現代は、情報化社会と言われるが、情報化とは情報メディアが発展するという事であり、具体的にはWWW

(World Wide Web) におけるホームページ開設、電子メール、電子ニュース等の利用等が代表的である。あるいはCD-ROMとして販売、提供される電子書籍、電子辞書など、デジタル化(電子化)された情報は、一般家庭のパソコン普及に伴って、今後も益々増えていくものと思われる。

## (2) 情報化と布教

布教活動も基本的には情報の伝達であるため、デジタル化に伴う様々な変化が考えられるが、便宜上二つに分類する。

### ① 一般檀信徒に対する情報メディアの変化

………寺院によるホームページの開設。電子メールによる質問、相談等の例。

音声デジタル化の進歩によって、従来のテレホン法話のようなことを自分のホームページ上で行うことも今後増えてくるものと思われる。

### ② 教師の使用する布教テキストの変化

………我が宗でも一九九九年に教学院の制作した

『選択本願念仏集』及び教書篇など、電子化された布教テキストは数点販売されている。またスキャナ一機器及びOCR (Optical Character Recogni-  
tion 文字認識) ソフトの普及に伴い既存の書籍、資料のデジタル化が容易となった。

### (3) デジタル化の利点

デジタル化された情報はインタラクティブメディアと呼ばれるが、インタラクティブ(双方向)とは、与えられた情報を、ただ見たり聞いたりするだけではなく、利用者の要求に伴い情報を加工することができる”という意味である。書籍など既存の情報をデジタル化することによって得られる利点として、

① 活字のみでなく、多様な情報を自由に加えていける。

② 内容を利用者の必要に応じて複製、加工することが出来る。

⑤ 膨大な情報の中から検索、抽出することが出来る。

(サーチ機能)

④ 関連情報の場所に、すぐにページを変えていくことが出来る（リンク機能）  
等があげられる。

今回我々は布教テキストの例として、既存の法話集を電子化したものを試作、その利便性を追求することとなった。またサンプルとしては、昭和五十九年浄土宗布教研究所編集による『法話の手引』を使用した。この本は当時の布教研究所研究員を中心に全国各ブロックから推薦された布教師により、(1)年中行事、(2)通夜・年回法要、(3)特殊行事の構成で法話のポイント、参考資料、法話例を掲載したものである。すでに発行部数は終了しており、今回出版権を有する浄土宗の許可を得て、電子復刻化が可能となった。

ファイル形式はハイパーテキストで作成し、その際 Adobe 社の『ページミール 3.0』を利用した。現時点では、まだ試作の域を出ておらず、さらに見栄えを良くしたり、使い勝手を検討する必要があると思われる。現在、総合研究所のホームページ上にアップロードされ、今後

引き続き改良を加えて行く。

## 2 「阿弥陀仏の表現」

### (1) 浄土宗内出版書籍上の各種表現事例

浄土宗内の出版書籍上、特に布教界において、その表現は如何なるものであるか。実際に表現されている事例を今試みに七分類に分けて、紙数の限界もあり、各二事例ずつであるが掲載する。

但し、分類は、その内容におけるキーワードをもつて分けたが、一書中に幾度となく表現されていることもあるし、また、数度にとどまるものもあるので、掲載頻度に公平を欠く点等を考え、あえて、頻度数順に整理するという点には至らなかった。従って、類型化されるにとどまった。「」内がその具体的表現であり、その後には(年号)は、出版の年を表す。

### ① 法蔵説話によって阿弥陀仏を説く

1. 「阿弥陀仏は、修行中の名前を法蔵菩薩といい



ました。そのときに師の教えにしたがい、四十八の誓願をおこして修行されました。その四十八のすべての願を完成されて、阿弥陀仏となられたのです。」(平成九年)

2. 「これは理屈じゃない。で、その辺のことがありますので、この話は、どうぞ素直にお聞き下さい。素直にというのは、釈尊が私どもに分かる様に、最高の世界の境地を分かる様にお説きになる仏の慈悲が、この様な説法、お話になったということ、一つ、素直に「はい」と、こう聞けば宜しい。それによりますと、阿弥陀仏という仏のまま……。これ、大悲の仏様、そのまします事、素直に信じることです。この仏様について説かれたのが『無量寿経』のお教えでございますが、そのみ仏は修行時代に……。」(平成十一年)

② 無量寿・無量光から阿弥陀仏を説く

1. 「この不思議な生命。不思議とはことばをかえ

て申しますと、無量ということ。不思議のとは、否定語で無ということばであり、思議とはおもい量ることで、量と言うことです。したがって不思議は無量ということになります。すすなわち、不思議は無量＝阿弥陀ということなのです。よって皆さま方の生命は決して自分だけのものではなく、阿弥陀さまの生命をいただいて、阿弥陀さまのおかげで今日こうして人間として生かされているのです。」(平成四年)

2. 「ご本尊阿弥陀さまは、凡夫の私たちに人間に生まれた喜びと、生きる安心と満足を与えてくださいます仏さまです。ご本尊を呼ぶ南無阿弥陀仏とは、インドのことばを漢字に音写しておりますので、漢字には意味はございません。そのお名号の意味は、『南無』とは『帰依』または『帰命』と訳し、『阿弥陀仏』とは、『無量寿』・『無量光』と訳します。『無量寿』とは、目には見えませんが、宇宙に遍満する形のあるものすべてを生

み出し、育て生かしめる働きであります。また、『無量光』とは、『無量寿』より生み出された私たち凡夫を照し、導き救おうとする働きであります。(平成八年)

③ 大宇宙・生命の根源であると阿弥陀仏を説く

1. 「それじゃ、その単細胞の生命、たった一つの細胞で命があるというその生命は、親は一体誰だったんだろうか。そうすると、科学的な目をもって見るならば、石ころの集まりでしかないこの大宇宙というものは、宗教的な目を開いて見るといふと、実に大きな一つの生命現象体である。この大きな生命現象体、無限の広がり無限の繋がりを持つているこの生命現象体に対して、宗教的な目をもってするならば、これを阿弥陀様と、こういうふうに行うことができるんですね。」(平成七年)

2. 「仏教では、今日のわれわれを生み出してくれ

たこの大宇宙、地球や自然の恵み、これらの動きのなかで、われわれを人間として生み出した、縁としての幾多の生命活動、また、これらを貫く原理、原則など、われわれをとり巻くすべての自然をも、仏さまと、(浄土宗ではすべて阿弥陀として捉える)その恵みとしてありがたく捉えたい、くことを、教えているのです。目に見えない、大宇宙を貫く大きな力、その恩恵に感謝し、明るく正しくみずからの行動のなかに、これを生かせる人生を歩むこと、この決意が南無阿弥陀仏という声となって堂内に満ち満ちるのではないでしょうが。」(平成八年)

④ 私たちの親様、大親様として阿弥陀仏を説く

1. 「私たちは寿(いのち)の親さま(阿弥陀さま)より、父母を縁として此の世に「生」を受けました。それから母に大変苦勞をかけ育てていただいたのです。みなさまには、ご自身の母を思い出し

て下さい。……「子を持って親の恩を知る」とは、よく言われたものです。母の恩を知るとは、子供のために子供のためにと働いてくださる母の愛の背後に、阿弥陀さまの慈しみの心に気づくことであります。悲しいかな私たち凡夫は、わが母の心（阿弥陀さまの慈しみの心）に気づいても、あたりまえと思ひ感謝することがなかなかできません。

「母の日」を迎え、いつか本当に心の底から、「お母さん、ありがとう」と、言える日を阿弥陀さまは待っておられます。ポイント 天地の中の働きは、目には見えないが全ての生きとし生けるものを、生かして慈しみ育てている。その働きが、我が母を通して感じる事ができれば、「いのちの親さま」である阿弥陀さまが感じられる。」（平成八年）

2. 「私たちの生活は、いまでも現に阿弥陀仏の祈りによってささえられているということ。中略）この仏さまと私たちがお念仏で結ばれてい

るといふ関係を「親縁」といいます。まさに私たちの称える念仏の声は子ども泣き声のように、いつどこでなにをしていようが親は子どもを心配して見守っていてくださると教えているのです。ですから、私たちは成人して大人になっても、いま現在も仏さまから祈られて生活をさせていたでているのです。なんと念仏の教えのありがたく心強いことでしょう。」（平成八年）

⑤ お陰様で生かされている、そのお陰様こそ阿弥陀仏であると説く

1. 「私たち一人の力では生きて行けません。必ず誰かの世話になり、何かの世話になっているのです。目に見えない大きな力によって生かされているのですね。その大きな力が阿弥陀さまの本願力なのです。その大いなる力に感謝して「おかげさま」ということが「ナムアマミダブツ」とお称えることなのです。」（昭和五十九年）

2. 「その親の、もっと大きなおかげとご恩は、私の中に流れておる。空気ひとつがそうである。水ひとつがそうである。酸素ひとつがそうであると思うたら、おのれというものは、ほんとうにちっぽけなものである。空気が水が酸素が満ち満ちて、この中に生かされて、生きるのであって、おのれが生きるのではないということに、気づいていただけることがですね、阿弥陀様を頂戴するということでございます。」(平成十一年)

⑥ 私たちは阿弥陀仏から命を授かり、阿弥陀仏のもとに帰ると説く

1. 「仏教では、仏の子ということをいいます。私たちは、仏さまより出でて仏さまにかえる。親子である、仏さま永遠の寿をもてるアミダさまより出でた仏の子が私たちです。」(昭和五十九年)

2. 「私たちはご先祖の生命をいただいて生まれてきたのでございます。そのご先祖をさらにさかの

ぼつていけばどうなるか、それこそきりがありません。そのきりが無い生命のことを、お釈迦さまはインドのことばでアミダとおっしゃいました。阿弥陀如来さまでございます。阿弥陀さまは私たちの一番の生命の親さま、生命の根源と申しあげることができのです。その阿弥陀さまの世界を、お経には極楽と説かれております。だから極楽は私たちの生命の出处、生まれふるさと、なつかしのわが家でございます。このたび亡くなられました○○さんも、もともと極楽からこの世に生まれ来られたのでございます。」(平成四年)

⑦ 私の心の中に阿弥陀仏が在すと説く

1. 「過日一生徒が極楽はどこにあるのでしようかと質問したのに対し、私は次のように詳説した。支那の載益の詩に「盡日尋春春不得、芒鞋踏遍龍頭雲、歸來閑嗅梅花立、春在枝頭已十分」とある通り、方々を探し廻って得なかつた春が極めて手

近の自分の庭前に来ていたとは面白い意味深いことである。又源信僧都の歌に「よもすがら仏の道を尋ねれば我が心にぞ入りぬる」とあるように、極楽遠からず西方十萬億の西にあり、弥陀は己心にあつて一座蓮華の形をなすという理を懇説したのである。」(昭和五年)

2. 「……それは皆さまが一字一句写経なさる毎に、南無阿弥陀仏とお口で称名なさるその身口意の三業に、阿弥陀仏が光明を照らし給い、応声即現を賜り、この遣場が阿弥陀仏の光明によって満ち溢れるからであります。

『月かげのいたらぬさとはなければもながむる人の心にぞすむ』宗歌・法然上人作。念仏の声を因として光明をいただくという縁をいただき、里として皆さまの心に阿弥陀仏がお住み下さる。そして仏さまが我が心に住み続けて下さることは、私の心の中で我が天下の如く振るまっている、貪り、腹立ち、おろかさ、即ち三毒煩惱を、少しは

おとなしくせよと押し止めてくださることにて、私の心は阿弥陀仏の御意に近い心へと澄んでいくのであります。」(平成八年)

(2) 浄土宗布教師対象「阿弥陀仏の表現」についてのアンケート調査報告

実施 平成十二年一月～二月

対象 浄土宗常任布教師

総本山知恩院布教師会会員

大本山増上寺布教師会会員

大本山善導寺布教師会会員

総計 七一九名

回答期限 平成十二年二月二十日

集計 日 平成十二年三月八日

調査対象数 二六六票 (三七%)

## 「阿弥陀仏の表現」についてのアンケート調査結果

浄土宗総合研究所情報研究班では平成十二年一月～二月にかけて「阿弥陀仏の表現」についてのアンケート調査を実施した。アンケート調査の対象は宗内の布教師の方々で、浄土宗常任布教師、総本山知恩院布教師会会員、大本山増上寺布教師会会員、大本山善導寺布教師会会員の方々七一九名を対象に行なった。回答期限は平成十二年二月二十日で、同年三月八日までに到着した二六六票について調査集計を行った。

### 1. 概要

#### (1) 回答数

回答数は平成十二年三月八日現在で二六六票であった。本調査では無記名も可としたが二六六票中、無記名は二一票であった。

#### (2) 回答者の特徴

##### ① 年齢構成

回答者のうち年齢の記入があった二五二票について一〇歳毎の年齢階層に分けて集計を行った。その結果、六〇歳代が最も多く、次いで五〇歳代、七〇歳代となっており、この三階層で七〇%弱を占めている。

年齢別	三〇歳代	四〇歳代	五〇歳代	六〇歳代	七〇歳代	八〇歳代	九〇歳代	計
	二〇 (七・九%)	三一 (一二・三%)	五八 (二三・〇%)	五九 (二三・四%)	五七 (二二・六%)	二三 (九・一%)	四 (一・六%)	二五二

##### ② 地域ブロック別

回答者のうち年齢の記入があったものおよび消印から回答者の地域が推定できた二六三票について、所属寺院

がある地域ブロック毎に集計した。その結果、関東ブロックが七五名（二二・八・五％）と最も多く、次いで近畿ブロック六〇名（二二・八％）であった。アンケート調査票の発送数の地域ブロック比とも近い値となっている。

地域ブロック別	北海道ブロック	一一（四・二％）
	東北ブロック	二八（一〇・六％）
	関東ブロック	七五（二八・五％）
	東海ブロック	三〇（一一・四％）
	北陸ブロック	九（三・四％）
	近畿ブロック	六〇（二二・八％）
	中・四国ブロック	三二（一二・二％）
	九州ブロック	一八（六・八％）
計	二六三	

図1 回答者の年齢階層別分布

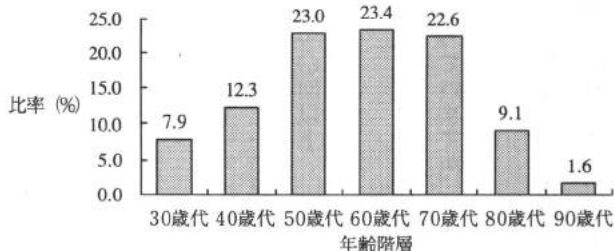
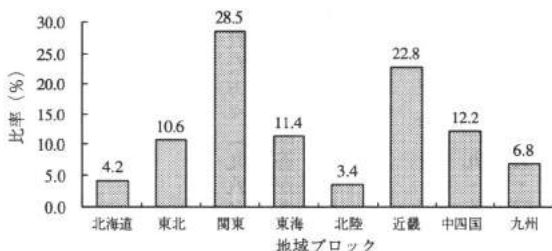


図2 回答者所属寺院のブロック別分布



## 2. 調査結果

【質問1】 年間にどのくらい布教出座していますか。

ご自坊での法話・説教等を除いた布教出座の日数について二六一票の回答があった。布教の出座は一〇日未満が約五割、一〇〜三〇日が三割、三〇日以上が二割となっている。

- |               |             |
|---------------|-------------|
| 1. 一〇日未満      | 一二七 (四八・七%) |
| 2. 一〇日以上三〇日未満 | 八六 (三三・〇%)  |
| 3. 三〇日以上      | 四八 (一八・四%)  |

【質問2】 授戒会、五重相伝会、帰敬式での勸誡のご経験がありますか。

勸誡経験についての有効回答数は二六二票であった。

回答された布教師の約四割の方々が勸誡経験があると回答された。

- |       |             |
|-------|-------------|
| 1. ある | 九八 (三七・四%)  |
| 2. ない | 一六四 (六一・六%) |

【質問3】 これまでの勸誡のご経験は何回くらいですか。

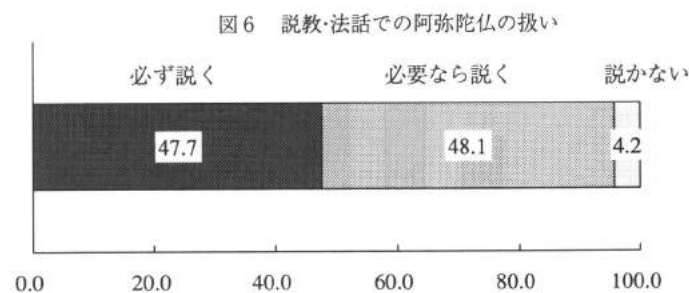
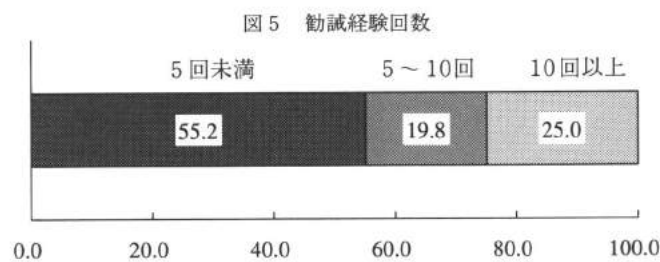
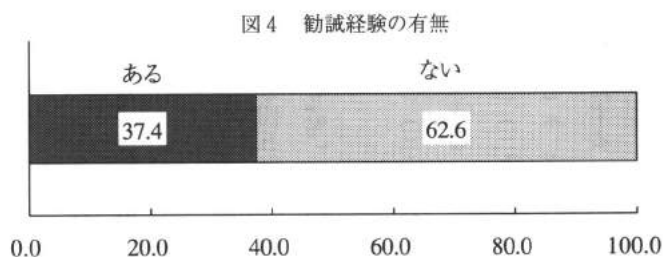
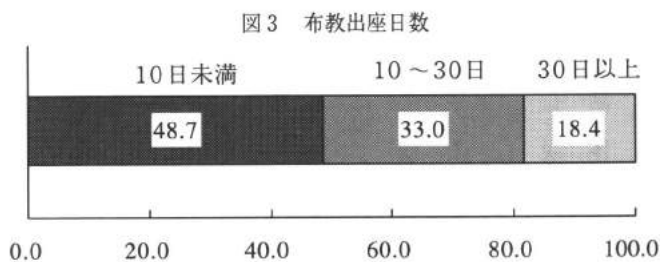
前問で勸誡経験があると回答された方々(九八名)に経験回数をたずねた。うち、九六名からの回答があり、五回未満が過半であるが、一〇回以上とする方々も二四名おられた。

- |              |            |
|--------------|------------|
| 1. 五回未満      | 五三 (五五・二%) |
| 2. 五回以上一〇回未満 | 一九 (一九・八%) |
| 3. 一〇回以上     | 二四 (二五・〇%) |

【質問4】 あなたは、説教・法話の中で阿弥陀仏をお説きになつていますか。

説教・法話の中で阿弥陀仏を説くか否かに関しては一六〇票の回答があった。あまり説かないという回答者は





1. 必ず説く  
 少なく、必ず説く、必要な場合は説くが半々であった。

2. 必要な場合は説く  
 3. あまり説かない

一四 (四七・七%)  
 一五 (四八・一%)  
 一一 (四・二%)

【質問5】説教・法話を行なうとき、何を重視していますか。

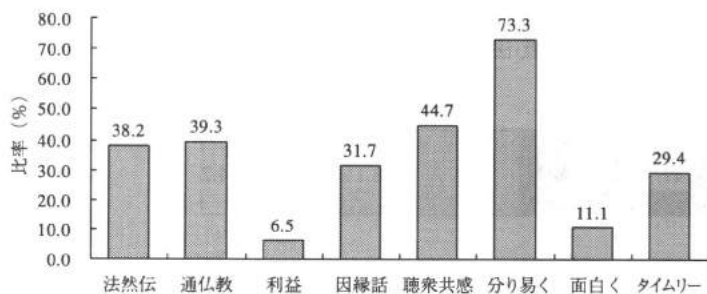
説教・法話を行うとき重視する事柄について八項目の選択肢を提示し、三つ以内で選択してもらった。一項目以上三項目以内の選択を行った回答者二六二名であった。重視しているのは「わかり易く説く」で七三%となっている、次いで「聴衆との共感を重視する四五%」、「浄土宗にこだわらず広く仏教の話をする三九%」、「法然上人伝を中心に説く三八%」となっている。

1. 法然上人伝を中心に説く 一〇〇(三八・二%)
2. 浄土宗にこだわらず広く仏教の話をする 一〇三(三九・三%)
3. 利益を説く 一七(六・五%)
4. 因縁話(体験談・事実談)を豊富にする 八三(三一・七%)
5. 聴衆との共感を重視する 一一七(四四・七%)
6. わかり易く説く 一九二(七三・三%)
7. 面白く(興味を引くように)説く

8. タイムリーな話題を取り入れる

二九(一〇・一%)  
七七(二九・四%)

図7 説教・法話で重視すること



【質問6】阿弥陀仏を説かれる場合、どのような表現をなさっていますか。

記述式の質問6に対して二四六票の回答があった。回答された記述の中から阿弥陀仏の表現として特徴的なキーワードを付与した。一票の記述の中には複数のキーワードを含んでおり、抽出したキーワード総数は回答数よりも多くなっている。

阿弥陀仏の表現（キーワード）

- 1 無量寿、無量光について説く 六六（二六・八％）
- 2 報身、修因感果身、法蔵説話から説く 六一（二五・二％）
- 3 大宇宙の生命体、全生命の根源などの表現をする 四七（一九・一％）
- 4 おかげ様、大自然の恵み、生かされていること、気付きを説く 四五（一八・三％）
- 5 三身即一（法・報・応）をふまえて説く 四一（二六・七％）
- 6 大親様、大みおやという表現をする 四〇（二六・三％）
- 7 仏心とは大慈悲、慈悲と智恵の象徴（三尊含む）と説く 三八（二五・四％）
- 8 今現在説法、人格ある仏、生身の仏を説く 三三（一三・〇％）
- 9 三身礼（本願成就身・光明摂取身・来迎引接身）を説く 三〇（一二・二％）
- 10 本願より説く 二九（一一・八％）
- 11 念仏申す中に頂ける仏（信仰体験より）と説く 二六（二〇・六％）
- 12 凡夫救済の仏と説く 二四（九・八％）
- 13 三縁（親縁・身口意の彼此三業、近縁・現在される仏）をふまえて説く 二二（八・五％）
- 14 臨終のご来迎を説く 二一（八・五％）
- 15 西方極楽浄土に在す仏（指方立相の強調）と説く

- 16 アミダの原語から説く 一四 (五・七%)  
 17 御法語、選択集から説く 一三 (五・三%)  
 18 不離仏・値遇仏(徹選擇より嬰兒と母の譬え)を説く 一二 (四・九%)  
 19 光明摂取、光明護念を説く(月かげ、摂益文など含む) 一一 (四・五%)  
 20 現当二世の安樂から説く 一一 (四・五%)  
 21 十二光仏(特に清淨光仏、歡喜光仏、智恵光仏より三垢消滅)を説く 九 (三・七%)  
 22 釈尊の悟りの結果として説く 九 (三・七%)  
 23 三垢消滅などの現世利益を説く 九 (三・七%)  
 24 阿弥陀様のもとに帰ると言う表現をする 八 (三・三%)  
 25 人間の理解を超えた存在として説く 八 (三・三%)  
 26 大宇宙の救済意志と説く 七 (二・八%)  
 27 仏像や、觀經曼陀羅より説く 六 (二・四%)

- 28 大宇宙の創造者と説く 六 (二・四%)  
 29 三十二相八十随形好を説く 四 (一・六%)  
 30 私の心の中に在す仏を説く 三 (一・二%)  
 31 阿弥陀経を説く 三 (一・二%)  
 32 日想觀から説く 一 (〇・四%)

表1 阿弥陀仏の表現類型

経験に基づく表現	阿弥陀仏を表現する		
	成因から説く	相好から説く	性質から説く
出典論拠とした表現	働きから説く	語源から説く	經典から説く
	法語から説く	論釈から説く	信仰体験から説く

前掲に示される三二のキーワードは、更に、阿弥陀仏の何を表現するか、あるいは何を論拠として表現を行うかといった枠組みの中で整理が出来ると思われる。そこで、三二のキーワードを整理統合した結果が「表1」である。

これらの枠組みに三二のキーワードを当てはめると以下のようになる。キーワードの当てはめにおいて問題になるのは、一つのキーワードが一つの表現類型に当てはまらないものがあるということである。例えば、キーワード9「三身礼（本願成就身・光明摂取身・来迎引接身）」を説く」では、本願成就身とは「成因」を表し、光明摂取身・来迎引接身は阿弥陀仏の「働き」を述べたものである。このような場合にはそれぞれの分類に当てはめている。

(1) 阿弥陀仏を表現する

①成因の説き方

成因に関しては以下の四つのキーワードが相当する。

これらを加えると回答記述中一三五件に阿弥陀仏の成因に関する表現を行うとの回答があったことになる。阿弥陀仏を「成因」から表現する場合には、法蔵説話から本願の成就、修因感果身としての報身の阿弥陀仏、そして指方立相の強調と原則に沿った表現が行われている。

2 報身、修因感果身、法蔵説話から説く（六一二）

9 三身礼（本願成就身・光明摂取身・来迎引接身）

を説く（三〇）

10 本願より説く（二一九）

15 西方極楽浄土に在す仏（指方立相の強調）と説く

（二四）

②相好の説き方

阿弥陀仏を相好から表現する場合は、仏像や曼陀羅を使ったり、三十二相八十随形好を述べたり、無量の光、無量の寿命について述べている。三つのキーワード合計で回答記述中七六件であった。

- 1 無量寿、無量光について説く（六六）
- 27 仏像や、觀經曼陀羅より説く（六）
- 29 三十二相八十随形好を説く（四）

### ③性質の説き方

阿弥陀仏の性質や性格を表現する場合には、多様な表現が用いられている。大宇宙の創造者、救済意志、生命体、全生命の根源など、現代的な宇宙論を引き合いに出して説明する方法。人間を超えた存在であると説明する方法。法身・報身・応身をふまえて説明する方法。十二光仏から十二の性質を説明する方法。今現在説法の人格身であるとの説明まである。阿弥陀仏の性質に関する記述は合計すると一八八件あり、数の上で第二位であった。

この、阿弥陀仏の性質の表現に関しては具象化が困難であり、その説明も最も困難なものかも知れない。それを反映して多様な表現が行われていると考えることも出来るよう。

- 3 大宇宙の生命体、全生命の根源などの表現をする（四七）

- 5 三身即一（法・報・応）をふまえて説く（四一）
- 7 仏心とは大慈悲、慈悲と智恵の象徴（三尊含む）と説く（三八）

- 8 今現在説法、人格ある仏、生身の仏を説く（三二）

- 21 十二光仏（特に清浄光仏、歡喜光仏、智恵光仏より三垢消滅）を説く（九）

- 25 人間の理解を超えた存在として説く（八）

- 26 大宇宙の救済意志と説く（七）

- 28 大宇宙の創造者と説く（六）

### ④働きの説き方

阿弥陀仏をその「働き」から表現する場合には、表現の幅が極めて広い。「凡夫救済」「光明撰取」「臨終来迎」から「現当二世の安楽」「三垢消滅などの現世利益」のような現世での利益を強調するものまで、「阿弥陀仏」

から「大親様」「おかげ様」を強調するものまでの幅が見られる。阿弥陀仏の働きに関する記述は合計すると二〇二件あり、数の上で第一位であった。

ここに、阿弥陀仏による救済を如何にわかり易く説明するか、という布教師に与えられた命題に対する工夫の努力の跡が見られる。臨終来迎による往生ばかりでなく、現世の利益を説明できないか、阿弥陀仏の救済という觀念的な表現から、身近な親様、お陰様に例えることによって聴取者に阿弥陀仏のイメージをわかり易く伝えることが出来るのではないか、といった工夫である。

4 おかげ様、大自然の恵み、生かされていることこの  
気付きを説く(四五)

6 大親様、大みおやという表現をする(四〇)

9 三身礼(本願成就身・光明摂取身・来迎引接身)  
を説く(三〇)

12 凡夫救済の仏と説く(二四)

14 臨終のご来迎を説く(一一)

18 不離仏・値遇仏(徹選擇より嬰兒と母の譬え)を

説く(一一)

19 光明摂取、光明護念を説く(月かけ、摂益文など  
含む)(一一)

20 現当二世の安樂から説く(一一)

23 三垢消滅などの現世利益を説く(九)

#### ⑤語源からの表現

阿弥陀仏をアミダ、アミターバ、アミターユスなどの語源から表現するもので七九件あった。しかし、無量寿・無量光について説くという中には語源ばかりでなく、阿弥陀仏の相好、阿弥陀仏の性質の表現も含まれていると考えられ、語源のみの表現は比較的少ないと思われる。

1 無量寿、無量光について説く(六六)

16 アミダの原語から説く(一一)

#### ⑥經典からの表現

阿弥陀仏を觀無量壽經、阿弥陀經などの經典に拠って

表現する方法である。観経曼陀羅もこの中に含めた。回答者の記述の中では一〇件と比較的少ない。

- 27 仏像や、観経曼陀羅より説く(一六)
- 31 阿弥陀経を説く(二三)
- 32 日想観から説く(一一)

⑦法語からの表現

法然上人の御法語の中から阿弥陀仏に関連するお言葉を選び、これによって阿弥陀仏を表現する方法である。ご法語の選び方によって表現の幅が広い。

- 13 三縁(親縁・身口意の彼此三業、近縁・現在仏)をふまえて説く(一一)
- 17 御法語、選択集から説く(一二)
- 21 十二光仏(特に清浄光仏、歡喜光仏、智恵光仏より三垢消滅)を説く(九)
- 24 阿弥陀様のもとに帰ると言う表現をする(八)

⑧論釈からの表現

日本、中国における祖師による論や釈から阿弥陀仏の表現を行う。特に三身即一をふまえて説くという記述が四四件と多かった。

- 5 三身即一(法・報・応)をふまえて説く(四一)
- 18 不離仏・値遇仏(徹選擇より嬰兒と母の譬え)を説く(一一)

⑨体験からの表現

布教を行うもの自身の信仰体験に基づいて阿弥陀仏を表現する方法。

- 11 念仏申す中に頂ける仏(信仰体験より)と説く(二六)
- 30 私の心の中に在す仏を説く(三)



【質問7】阿弥陀仏の表現について、ご意見がありましたら回答用紙にご記入ください。

質問7については一〇五票からの回答があった。ご意見の内容から特徴的なキーワードを付与した。一票の記述の中には複数のキーワードを含んでおり、抽出したキーワード総数は回答数よりも多くなっている。(表2)

諸師のご意見で特徴的なのは、賛否両論が等しく示されていることである。例えば現代化については、必要であるとするもの八票、現代化を批判するもの六票があった。

また、阿弥陀仏の表現についても、現状を批判する意見として法身的表現、御親・大宇宙の生命という表現を批判する意見が二二票。推奨する説き方として、大いなる生命、宇宙の根本原理等法身的に説くのが良いとする意見も一五票あった。

また、言葉による表現は出来ない七票、言葉による表現よりも念仏の信仰を勧める一三票と、言葉による阿弥

表2 阿弥陀仏の表現についての意見

その他	調査について	現状を批判する意見										現代化に関する見解		
		その他	調査への不満	調査への要望	布教の方法論	大自然の営み、宇宙の根本原理、法身的に説く	大いなる命、命の大切さから説く	報身仏を説く	凡夫観を説く	御親、大宇宙の生命という表現への批判	阿弥陀仏は大日如来のような法身ではない	阿弥陀仏は表現できない	言葉での説明より念仏、信仰を勧める	経典、御法語のような原点に還る
五	四	七	八	九	六	五	二	七	二五	七	三	五	六	八
四・八%	三・八%	六・七%	七・六%	八・六%	五・七%	四・八%	一・九%	六・七%	二四・三%	六・七%	二二・四%	四・八%	五・七%	七・六%

陀仏の表現を否定する意見も多く見られた。

調査については、調査結果に期待する、あるいは、調査結果に基づいてガイドライン的なものが必要とする意見と、このテーマに関しては調査自体あるべきものではないとする意見もあった。

### III. 研究会経過報告

#### 1 平成十年度報告 (平成十年四月～平成十一年三月)

平成十年四月十三日 (月) 午後三時より	於研究所
四月二十七日 (月) 午後二時より	於研究所
五月八日 (金) 午後三時より	於研究所
六月八日 (月) 午後二時より	於研究所
七月二十三日 (木) 午後三時より	於研究所

所内公開講座「仏身論について」

講師・水谷幸正総合研究所長

七月二十八日 (火)

テキスト・『無量寿経 阿弥陀経「浄土思想の源泉」』

「無量寿経、阿弥陀経に見る仏身観」後藤真法研究員

九月七日 (月) 午後二時三十分より

於研究所

九月十日 (木) ～十一日 (金)

浄土宗総合学術大会

於佛敎大学

研究発表 「インターネットによる宗敎意識調査」

今岡達雄研究員

研究発表 「マイクロソフトフロントページ98を使う

たホームページ発行の一例」

大室照道研究員

九月十四日 (月)

テキスト・『観無量寿経 般舟三昧経「観想と救済」』

「龍樹、世親における阿弥陀仏身観」齊藤隆尚研究員

十月十二日 (月)

テキスト・『龍樹・世親 チベットの浄土敎慧遠

「浄土思想源流の祖師」』

「曇鸞における阿弥陀仏身観」大室照道研究員

「道綽における阿弥陀仏身観」佐藤晴輝研究員

十一月二日(月)

テキスト…『善導』「中国浄土教の確立」

「善導における阿弥陀仏身観」 正村瑛明研究員

十二月七日(月) 於…総合研究所

所内公開講座「中国浄土教における阿弥陀仏身観」

講師…大本山増上寺御法主・藤堂恭俊台下

平成十一年一月二十五日(月)

テキスト…『新羅の浄土教 空也・良源 源信・良

忍』「叡山の浄土教」

「往生要集における阿弥陀仏身観」 古庄良源研究員

二月二十二日(月)

テキスト…『法然』「日本浄土教の確立」

「法然浄土教の阿弥陀仏身観」 八木季生客員教授

2 平成十一年度報告(平成十一年四月～十二年三月)

平成十一年四月十二日(月) 午後三時より 於研究所

四月十六日(金) 午後二時より 於研究所

五月十八日(火) 午前九時三十分より 於研究所

五月三十一日(月) 午後二時より 於研究所・メルパル

ク合宿↓六月一日(火) 研究所午後零時終了

六月十四日(月) 午後三時より 於研究所

七月二日(金) 午後一時より 於研究所

八月二十七日(金) 午後二時より 於研究所

九月二日(木) 一三日(金) 浄土宗総合学術大会

於大正大学

研究発表 「阿弥陀仏の表現について」

佐藤晴輝研究員

研究発表 『『法話の手引き』の電子復刻』

後藤真法研究員

九月十三日(金) 午後三時より 於研究所

十月十二日(火) 午前十時三十分より 於研究所

十月十八日(月) 午後三時より 於研究所

十月二十五日(月) 午後二時より 於研究所

十二月二十日(月) 午前十時より 於研究所

平成十二年一月十二日(水) 午前十時三十分より

一月二十四日(月) 午前十時より	於研究所
二月十四日(月) 午後二時三十分より	於研究所
二月二十八日(月) 午後一時より	於研究所
三月七日(火) 午前十時三十分より	於研究所
三月十三日(月) 午前十時三十分より	於研究所
三月二十八日(月) 午前十時三十分より	於研究所

#### IV. おわりに

本研究班の入室照道師が、研究をスタートして日もまだ浅い平成十一年六月三十日に突如西化された。この研究班が目指していた二つの研究のうち、情報機器の取り扱いとその活用は、大幅に研究を縮小せざるを得なくなり、不十分のまま研究終了を迎えた。ここに師の莊嚴浄土を心から祈念するものである。

もう一つの研究目標は、現在第一線で活躍されている

布教師の諸師に、アンケートにお答をいただくという方法で本宗の「阿弥陀仏の表現」における現状を調査した。結果の集計まではできたが、それから先に踏み込むまでには至っていない。研究所が結論を出す範囲を超えているからである。アンケート調査には、突然の依頼にもかかわらず、大変多くの布教師各位から、真剣なご回答と励ましのお言葉をお寄せいただいたことを、心から厚く御礼申し上げ、報告とさせていただきます。

(正村瑛明)

「布教・情報研究」班スタッフ（平成十二年三月）

八木季生（研究代表、客員教授）

正村瑛明（研究主務、専任研究員）

斉藤隆尚（非常勤研究員）

佐藤晴輝（非常勤研究員）

今岡達雄（嘱託研究員）

大室照道（嘱託研究員、遷化）

後藤真法（嘱託研究員）

古庄良源（嘱託研究員）



平成十一年度 研究活動報告（概要）

# 僧侶(宗教的指導者)養成の総合的研究

熊井康雄

平成七年度の研究班発足以来、足掛け五カ年にわたった本研究は、平成十二年度早々に一応の研究報告書を作成しプロジェクトを終了することになった。現在報告書を作成中のため、研究発足以来の研究経過及び報告書の概要(案)を記して研究報告とする。

## 〈一〉研究経過

### (1)平成七年度

この年度は、主に僧侶養成問題の概念的研究を行った。

浄土宗(中世→近世)、インド、タイにおける僧侶(聖職者)養成について講師を招聘して研究会を開催、年度末にはシンポジウムを開催し現行制度の問題点を考えた。

### ①浄土宗檀林制度とその実態 講師 宇高良哲教授

江戸時代以前の僧侶養成、関東十八檀林の僧侶養成制度の成立、徳川幕府との関係、教学内容等について講義を受けた。

### ②ヒンドゥー教を理解するために 講師 佐藤良純教授

インドにおけるヒンドゥー教の全体像、聖職者の養成問題等について講義を受けたが、聖職者養成についてヒンドゥーでは研究対象とされていないことが明らかにされた。

### ③タイにおける聖職者養成について 講師 サンテイカ ルロ師(タイ)

タイでの僧侶のあり方、僧侶になる際の手続き、仏



教が現代のタイ社会に対して果たしうる可能性等について講義を受けた。また僧侶養成は小人数で行うのが効果的であるとの示唆を受けた。

④シンポジウム「僧侶養成を考える」会場 大本山増上寺三縁ホール

牧達雄研究代表の提言、吉田昭炳（前浄土宗教学局長）、土屋光道（大本山増上寺布教師会会長）福西賢兆（法儀司）、柏木正博（大正大学教務部長）各師のコメントの後、青年教師との質疑応答を行った。ここで洗い出されたいくつかの問題点が現在作成中の報告書の原点となった。

(2)平成八年度

この年度は、近代の浄土宗僧侶養成制度に関する資料収集整理、「新宗教研究班」の協力による新宗教における聖職者研究等の基礎的研究作業が中心となった。

①近代浄土宗僧侶養成制度の資料整理

佛教大学図書館所蔵の『浄土教報』をマイクロフイ

ルムに収め、『大正大学五十年史』『東山学園史』等を参考にして、資料整理を行った。

②新宗教における聖職者の研究

新宗教における聖職者、宗教指導者の位置付け、教祖の敬称に関する問題等を明かにするため、新宗教研究班の協力を得て研究を進めた。

(3)平成九年度

この年度は、前年度に引き続いての資料整理、捨世派・興律派における生活と修行に関する調査を中心とする研究を行った。

①近代浄土宗僧侶養成制度の資料整理

プリントした『浄土教報』の資料から、関係事項をカード化してコンピューターに入力し、記事の検索を可能にする作業を進めた。資料が膨大で完成には相当の時間を必要とするため、とりあえず明治末までを目安としている。

②捨世派・興律派資料調査

近世における浄土宗僧侶養成の中心は檀林であるが、それに反発して本来の専修念仏の興隆に励み、官位を捨て修行生活を重視するものも各地に現れた。これらは捨世派・浄土律派（興律派）と呼ばれるが、その一流である三河貞照院において当時の生活や修行に関する資料調査を行った。この資料は野村恒道囑託研究員により整理が進められている。またこの調査に併せ牧達雄研究代表から「興律派における生活と修行」また田中祥雄師（東海学園）から「捨世派における生活と修行」についての講義を受けた。

#### (4) 平成十年度

この年度は、総本山知恩院および鹿ヶ谷法然院における僧侶養成の歴史に関する調査研究、前年度に調査した貞照院資料の解説、『浄土教報』の資料整理等を進めた。

① 総本山知恩院および鹿ヶ谷法然院における僧侶養成の歴史

森田孝隆師（知恩院法務部長） 梶田真章師（法然院

住職）から、それぞれの僧侶養成の歴史に関する講義を受けた。

#### ② 貞照院資料解説

野村恒道囑託研究員が資料目録を作成、引き続き同資料の解説を進めた。

#### ③ ライフサイクルとしての僧侶教育論

牧達雄研究代表から僧侶養成を生涯教育として考える必要性について講義を受けた。本論は研究報告書に一項目を設けて論及する予定である。

#### (5) 平成十一年度

この年度は、本研究取りまとめの年度と位置付け、年度末までに一応の結論を得るべく、所内研究会を中心とした活動を行った。また浄土宗が本年度の開催を担当した「各宗研究機関交流会」のテーマに「僧侶と僧侶養成」を取り上げ、各宗派の僧侶養成の現状を把握、同交流会に参加できなかった宗派については、担当研究員が訪問調査を行い参考資料を作成した。

①各宗研究機関交流会

既成仏教各宗派における僧侶養成に関する現状を知ることができ、本研究の貴重な参考資料を得た。各宗で抱える問題点と対応が明らかになり、いくつかの参考とすべき対応策も得た。この記録と参考点については研究報告書に収載の予定である。

②研究成果報告案の検討

牧達雄研究代表との意見交換、数度の所内研究会により研究成果報告の方法について検討し、研究報告書の原案を決定した。

〈Ⅱ〉研究報告書（案）の概要

研究報告書の原案は次のとおりである。

◎緒言

研究代表 牧 達雄

◎聖職者（宗教的指導者）としての僧侶像を考える

①仏祖に学ぶ（釈尊に学ぶ宗教的指導者像）小澤憲珠

②宗祖に学ぶ（法然上人に学ぶ宗教的指導者像）

林田康順

③宗教的指導者の理念（宗教的指導者としての僧侶像）

鷲見定信

◎僧侶養成の歴史と現状

①浄土宗の僧侶養成の歴史と現状

□ 浄土宗の僧侶養成制度について 宇高良哲

□ 拾世派・興律派における生活と修行 田中祥雄

□ 檀林教育について（増上寺を中心に） 野村恒道

□ 近代教育機関の変遷（資料収集Ⅱ明治期）

新井俊定・佐藤良文

□ 現行の教師養成制度 熊井康雄

②伝統仏教教団の僧侶養成の現状

□ 天台宗 □ 真言宗智山派 □ 真言宗豊山派

□ 高野山真言宗 □ 日蓮宗 □ 曹洞宗 □ 臨

濟宗妙心寺派 □ 浄土真宗大谷派 □ 真宗本願

寺派 □ 西山浄土宗 □ 時宗

③アジア仏教圏／諸宗教における聖職者（教祖）養成

□ タイにおける聖職者養成について

戸松義晴

□ 新宗教における聖職者（教祖）像

武田道生

◎ 提言 — これからの僧侶養成 —

① 生涯教育としての僧侶養成

牧 達雄

□ 教師補任後研修制度の充実

② 長期的視野に立って

（研究班）

□ 僧侶（宗教指導者）の理念

□ 師僧／寺庭婦人の意識改革

□ 寺院経営者としての資質の向上

③ 現状改善のために

（研究班）

□ 寺庭教育の問題点と対応

□ 宗門大学における僧侶養成教育の限界

□ 教師養成講座の問題点と対応

# 浄土宗義と現代

## ① 浄土教比較論研究

村田洋一

法然上人の教えが、なぜいくつにも分かれたのか。これを命題として平成十年度から発足した当プロジェクトは今年度、講師に出席いただいた会議を八回、そして二回の公開講座（シンポジウム）を中心に展開してきた。

なお、今年度から、田代俊孝先生に講師として参加していただいた。これは真宗の講師としてお二方の先生に参加していただいていたが、ともに西本願寺派の先生だったことを鑑み、東本願寺である大谷派の先生もプロジェクトに参加していただくべきという見地からである。

《プロジェクト研究員》

- 梶村 昇（研究代表・客員教授、亜細亜大学名誉教授）  
廣川堯敏（研究副代表・嘱託研究員、大正大学助教授）  
鷺見定信（主任研究員）  
細田芳光（専任研究員）  
戸松義晴（専任研究員）  
林田康順（専任研究員）  
村田洋一（研究員）

《講師》

◎ 浄土宗西山派

中西随功（西山浄土宗、西山短期大学図書館長）

大塚靈雲（浄土宗西山禅林寺派、西山短期大学専任講師）

◎浄土真宗

浅井成海（本願寺派、龍谷大学教授）

五十嵐大策（本願寺派、東京仏教学院講師）

田代俊孝（大谷派、同明大学教授）

◎時宗

長島尚道（時宗宗学林学頭）

岡本貞雄（広島経済大学教授）

◎浄土宗

宇高良哲（大正大学教授）

【会議】（シンポジウムの事前会議を含む。なお、驚見以下

の研究員のみでの打ち合わせは除く。開催場所

は明記なきもの研究所会議室）

平成十年十二月十四日（梶村）

平成十一年二月八日

（梶村、中西、大塚、五十嵐、岡本）

平成十一年三月十一日

（梶村、宇高、中西、大塚、五十嵐、岡本）

平成十一年九月二十日（梶村、宇高、五十嵐、岡本）

平成十一年十一月三十日 京都・禅林寺永観堂にて

（梶村、宇高、中西、大塚、浅井）

平成十二年一月二十一日

（梶村、廣川、宇高、中西、浅井、岡本）

平成十二年二月二十二日

（梶村、宇高、中西、五十嵐、田代、中島）

平成十二年三月二十五日

（梶村、廣川、宇高、中西、浅井、田代、長島）

【公開講座】

第三回公開講座

テーマ 「念仏の教えはどう展開したか——法然の念

仏を聖光・證空・親鸞・一遍門流はこう広めた」

日時 平成十一年三月十一日

場所 増上寺三縁ホール

参加人数 二百五十人

総合同会 村田洋一

第一部 講演

「法然の念仏」 梶村 昇

「浄土宗の展開」 宇高良哲

「浄土宗西山派の展開」 大塚靈雲

「浄土真宗の展開」 五十嵐大策

「時宗の展開」 岡本貞雄

第二部 シンポジウム

「念仏の教えはどう展開したか」

パネリスト 梶村 昇、宇高良哲、大塚靈雲、五十嵐

大策、岡本貞雄

司会 戸松義晴、林田康順

第四回公開講座

テーマ 「現代人にとって極楽とは——極楽浄土とは

何か。いま極楽浄土の意味を問う」

日時 平成十二年三月二十五日

場所 増上寺三縁ホール

参加人数 二百十人

総合同会 村田洋一

第一部 プロローグ

「民俗における他界観」 鷲見定信

「仏教の受容から法然上人まで」 梶村 昇

「極楽浄土とは」 廣川堯敏

第二部 浄土教各宗派の極楽浄土とは

「西山浄土宗の極楽浄土」 中西随功

「浄土真宗本願寺派の極楽浄土」 浅井成海

「真宗大谷派の極楽浄土」 田代俊孝

「時宗の極楽浄土」 長島尚道

「私にとっての極楽浄土」 宇高良哲

第三部 シンポジウム

「現代人にとって極楽とは」

パネリスト 梶村 昇、廣川堯敏、宇高良哲、中西随

功、浅井成海、田代俊孝、長島尚道

司会 戸松義晴、林田康順

## ②『法然上人のご法語(第三集)』対話編』の編集

林田康順

平成九年三月二十五日、『法然上人のご法語・第一集

『消息編』(以下、消息編) (A5判、二八八頁、定価

三、〇〇〇円、浄土宗出版室刊) を刊行、続く平成十一

年三月二十五日、『法然上人のご法語・第二集』法語類

編(以下、法語類編) (同、四一六頁、定価三、五〇〇

円) を刊行した。両書とも宗門内諸大徳はもとより各方

面からお求めをいただき、特に布教の場でご好評を頂戴

していることは、編訳者としてこの上のない喜びである。

法然上人の全遺文を網羅、テーマごとに法語を抽出し、

それぞれの法語に簡明な現代語訳を施し、『法然上人のご

法語』全集を刊行するという大任を負った当研究班では、

現在『法然上人のご法語・第三集』対話編(以下、対

話編)の平成十二年度末の刊行を目指し、鋭意編集作

業に取り組んでいる。以下、『対話編』の概要を記す。

『対話編』は『昭和重修法然上人全集』『第四輯・對話篇』所収の左記の五〇の遺文から、それぞれ次に示す数の要文を抽出し(七種の遺文からは抽出法語がなかった)、総計一九三の法語について検討を加え、現代語訳を施している。

法語名

抽出数

一、要義問答

三四

二、十二問答(禪勝房との問答)

二一

三、東大寺十問答

九

四、百四十五箇條問答

一〇〇

五、信空上人伝説の詞(其一)其二

一〇



六、十二箇條の問答	一六	二三、聖護院宮無品親王に仰せられける御詞	一
七、念仏往生要義抄	一四	二四、悪僧に示す御詞	〇
八、念仏往生義	一三	二五、御流罪の時西阿弥陀仏との問答	一
九、明遍僧都との問答(其一〜其三)	四	二六、顕真法印との問答(其一〜其二)	二
一〇、勢観上人との問答	一	二七、甘糟太郎忠綱に示す御詞	一
一一、禪勝房に示されける御詞(其一〜四)	一四	二八、熊谷次郎直実に示す御詞(其一〜其二)	二
一二、四箇條問答	二	二九、室の津の遊女に示されける御詞	一
一三、大和入道親盛に示す御詞	〇	三〇、讃岐在国の間、門弟に示されける御詞	一
一四、選択集執筆時、安樂真観証空との問答	二	三一、天台宗の人との問答	一
一五、女人往生の旨を尼女房に示されける御詞	一	三二、信寂房に示されける御詞	一
一六、高階入道西忍に示されける御詞並に御歌	五	三三、或人の間に示しける御詞	三
	(其一〜其四)	三四、信心未発の人に三宝祈請をすすむる御詞	一
一七、沙弥随蓮に示されける御詞(其一〜其二)	二	三五、御遺跡の事につき法蓮房に示されける御詞	一
一八、御流罪の時、信空上人との問答	一	三六、御臨終の時門弟等に示されける御詞	七
一九、配流の途次修行者に示されける御詞	一		(其一〜其八)
二〇、常州敬仏房との問答	一	三七、叡空上人との問答(其一〜其三)	三
二一、大和入道親盛に示す御詞	〇	三八、慶雅法橋との問答(其一〜其二)	〇
二二、鎮西修行者との問答(其一〜其二)	二	三九、聖光法力安樂三上人との問答	三

四〇、成覚房幸西との円頓戒体の問答

四一、尼女房達に示す御詞

四二、慈鎮和尚との対話

四三、竹林房静巖法印との対話

四四、聖覚法印に示されける御詞（其一―其六）

四五、法華読誦の尼に専修念仏を示されける御詞

四六、或時尼女房に示しける御詞

四七、聖光聖覚両上人との問答

四八、隆寛律師聴聞の御詞

四九、聖光房との問答

五〇、平重衡の問に念仏往生を示す御詞

〇

一

一

二

三

一

〇

一

一

〇

一

人々に対し、法然上人が実に柔軟にお答えになられたご

法語まで、実に幅広い遺文が含まれている。

現代社会に生きる私たち浄土宗僧侶は、さまざまな布

教の場において、念仏信仰の核心に触れる問いから、お

よそ仏教とはかけはなれているかのごとき思いもよらぬ

問いに至るまで、実に多くの問いに応答しなければなら

ない。そんな時、本篇にみられる法然上人の適切なお答

えは、私たちにとって何よりのより所となろう。なるほ

ど、時代背景こそ法然上人当時と異なるとはいえ、凡入

報土といういかなる時代をも貫く法然上人の普遍の教え

を伝えていくために、法然上人の実に多様で奥深い応答

は私たちに実に大きな示唆を与えてくれるものだからで

ある。そうした意味でも『対話編』の刊行は、まさに布

教の場で大きな働きを果たしてくれることと確信してい

る。

本書の体裁は、『消息編』『法語類編』と同一であり、

漢文は書き下し、適宜にルビを配した。さらに、檀信徒

の方々にもご理解いただけるよう分かりやすく明朗な現

『対話編』の名称が示す通り、本篇には「要義問答」

「十二問答」「禪勝房に示されける御詞」など、弟子から

発せられた浄土宗の念仏信仰の種々なる疑問に対し、法

然上人がその真髓を簡潔明瞭にお答えになられた一連の

ご法語から、「百四十五箇條問答」に代表される当時の

民間信仰と浄土宗の念仏信仰との狭間でその葛藤に悩む

代語訳を付している。その一方、校訂註や出典・典拠の所在を下段に記し、学術的にも耐えられる装丁となっている。末尾には消息別・成句・語句の三種の索引を配し、法語検索にも容易に答えられるよう配慮した。さらに、法語の内容に即した分かりやすい用語解説を施した。

現時点で、すべての法語の抽出作業と二〇〇程度の現代語訳を終えているが、『消息編』『法語類編』に比べ『対話編』は法語数で一〇〇程度の増加となり、それに応じて種々の作業も増加しており、ページ数も大幅に増加するのではないかと想定している。

なお紙面の都合上、『法然上人のご法語』の編纂目的や編集経過についての詳細は、『消息編』『法語類編』の「あとがき」を参照されたい。

『消息編』『法語類編』に引き続き、この『対話編』が一人でも多くの方々に親しまれ、お念仏の声の広がるよすがとなることを祈念する。

「浄土宗義と現代」法語研究班 袖山栄輝

林田康順

浄土宗出版室編集担当

小村正孝

# 浄土宗典籍・版木の研究

——浄土宗寺院所蔵文献類調査整理研究——

竹内真道

## 〔目的〕

浄土宗寺院において、その寺の住職さえ自坊に何が所蔵されているのか知らないまま、また、什物帳で所蔵していることは知っていても蔵の中にあつて一度も見たとがないまま、黴や虫食いによつて損傷していく文献類がある。また中には、本堂や庫裏の新築・改築などで、その寺院所蔵の文献類が廃品として処分されたりする例もある。しかしこれらの中には貴重な文献類が存在するのである。

よつて、これらの文献類を調査整理し、各所蔵寺院にその存在価値を認識してもらい、保存し後世に伝えてい

くことがこのプロジェクト研究の目的である。

## 〔これまでの経過〕

本プロジェクトは、佛教大学に部屋を借用している浄土宗総合研究所分室所属の研究員が中心となり、平成五年十月より計画され、平成六年四月より調査研究活動に入った。

まず、既存の情報を調査整理するため、浄土宗宗務庁の許可を得、『浄土宗寺院名鑑』掲載の全浄土宗寺院のデータ及び昭和四十三年の浄土宗宗勢調査記載の寺院什物（掛け軸・古文書・記録等）を、浄土宗総合研究所分

室のパソコンにすべて入力した。これによりどの寺院にどのような文献があるかが前もって把握できることになった(データ漏れを防ぐためこれらは厳重に分室で保管している)。

次に平成六年九月と平成八年六月に『宗報』にアンケート(「浄土宗典籍・版木の研究」へのご協力をお願い)をお寺の古文書古書籍の保存状況をお知らせ下さい」を載せ、回答のあった寺院及び研究所への依頼のあった寺院より十箇寺を調査、また、この『教化研究』に報告を掲載したことから新たに一箇寺の調査依頼があり、平成十一年度末までに計十三箇寺を調査、うち、二箇寺は終了した。

またこれと平行して、『全国寺院名鑑』『増上寺史料集』『浄土宗全書』等に掲載の浄土宗寺院所蔵文献類のパソコン入力、毎月研究会を開いて調査対象寺院所蔵の古文書・掛け軸等の解説を現在も続行中である。

#### 〔調査方法〕

調査依頼のあった寺院での調査は以下の手順をとる。

- ・ 保管現状の記録(写真などで記録する)。
- ・ 全文献類の大まかな分類。
- ・ 並べかえ。
- ・ 上記分類に基づき、通番(仮番号)を付した付箋を全文献類に挟む。
- ・ 番号順にパソコンに入力(データベース化)。但し、場合によってはカードでとることもある。この時、書名・著者・編者・奥付等を記録。必要あれば順番の並べかえも行う。
- ・ 再度の並べかえ。
- ・ 通番(正式なもの・目録番号)をパソコン入力。
- ・ 所蔵者の許可が得られれば、通番ラベルを添付。
- ・ 保管場所に目録番号順に收藏。
- ・ 防虫剤を置く。

○所蔵寺院の許可を得て、重要文献は写真・マイクロフィルムに撮り、調査研究する。

○調査対象寺院の文献類は悉皆調査を原則とし、簡易目録を作成し所蔵寺院に渡すことでその寺院の調査を一応の終了とする。

### 〔平成十二年三月現在までの調査状況〕

現在までに調査した寺院、また現在調査中の寺院の調査状況は以下の通りである（寺院名などは所蔵者の管理上のこともありここでは伏せておく）。

京都教区 古書籍五六七点 調査終了 簡易目録作成完了

新潟教区 古書籍六六八点 大蔵経 古文書 調査終了  
簡易目録作成完了

埼玉教区 版木約三〇点 古文書 調査中

長野教区 古書籍約六〇〇点 調査中

富山教区 古書籍約二〇〇〇点 調査中

静岡教区 古書籍約五〇〇点 大蔵経一部 調査ほぼ終了

了 簡易目録作成中

岐阜教区 古書籍約二七五点 古文書 調査中

大阪教区 古書籍一八一五点 大蔵経 卷子本 古軸類

古文書 調査中

鳥取教区 古書籍約一〇〇〇点 調査ほぼ終了 簡易目録作成中

録作成中

京都教区 古書籍約四二〇点 古軸類十點 調査中

京都教区 古書籍約一〇八二点 調査中

滋賀教区 鎌倉期刷り仏紙背文書一点 調査中

和歌山教区 古書籍約三〇〇点 調査中

### 〔今後の実施計画〕

このプロジェクトは長期にわたる継続・人員・費用が必要であり、一応平成十四年三月終了の予定である。

調査資料の中で、注目されるものは所蔵寺院の許可を得て発表、平成十年年度には、大垣市天清院所蔵文献の一部を『教化研究』（第十号）に紹介した。次年度は、富山教区寺院からの新発見の資料を発表する。また、一般寺院向けに、掛け軸や卷子本の取り扱い説明を浄土宗発行の機関紙に掲載する予定である。これらは今後も順次

続行していく。

古書籍の整理だけでなく、依頼があれば古文書・掛け軸等のくずし字の解読もしているため、時間がかかり調査対象寺院をあまり増やすわけにもいかず、しかし浄土宗より費用を頂いているのであるから、できるだけ各浄土宗寺院の要請に答えていくことも大切であり、この両

方を考えながら調査を進めていくつもりである。

またこのプロジェクトは往々学者が行う学問的関心のある一部調査とならないよう、一寺院文献類全調査を基本とし、対象寺院に調査した文献の簡易目録を渡して、喜ばれる結果となるよう努力していきたい。

# 教化儀礼研究

## ——比較浄土儀礼の研究——

田中勝道・坂上典翁

はじめに

平成十一年度の教化儀礼研究班の研究課題は、前年度の方針を受け伝承と現代の両儀礼について福西主任研究員の指導のもとに開始した。

このうち現代教化儀礼は、前年度からの継続研究となつている「結婚式」であり、浄土宗出版室に編集協力をしたものである。これについては、平成十一年九月に同出版室より『結婚式』並びに結婚式別巻『結婚式の手引き』が出版されたのを機に、研究終了とした。

さて伝承儀礼研究は、「比較浄土儀礼の研究」として今回は時宗を取り上げ、現行日常勤行式制度に至る成立

過程と浄土宗との違いについて比較研究を試みた。

研究手順として、まず時宗の常用音声の概要を調査することにし、当研究所「浄土教比較論」の研究会に出講中の時宗宗学林学頭・大正大学講師の長島尚道師より推薦をいただいた時宗声明法式研究所所長の高木貞歆師の指導を受けることとした。

研究班では、平成十一年六月二十五日、調査のため、福西主任以下、熊井、廣本、坂上、田中の所員が総本山遊行寺内の時宗声明法式研究所に高木所長を尋ねた。総本山遊行寺丈内の案内に続き、教学部長・本間光雄師他、同所の研究員数名を交え、高木所長を中心に、時宗日常



勤行式の成立過程、常用音声の博士<sup>ハカセ</sup>が示す旋律型の実唱、本堂での勤行時における坐次、衣体、僧侶養成の実態について講義を受けた。

高木所長によると、時宗勤行式の成立については、宝暦年中（一七五一—一七六三）に増上寺と交渉があったものと窺われるものの（『藤沢山日鑑』）、周辺を補う良質の史料での確認がとれていないという。

当時の浄土宗は、江戸時代中期の学僧として忍淑（京都獅子谷・法然院中興、一六四五—一七一）があり、法式関係の著述に『浄業課誦』などがある。後の宝洲（一七三八、元文三）は『日用念誦』一卷、『浄業課誦付録』一卷などを著わした。さらに必夢（元禄十一、一六九八）は『諸廻向宝鑑』五巻と著わし、宗門初学の僧侶のために必修なものを集めたものである。

以上の様子から概観すると、藤沢の遊行寺（清浄光寺）の発展と共に遊行が盛んになり、念仏札や血脈の施与の盛行は、増上寺との交渉、勤行式の制定などが、時衆に対する宗教政策や宗門確立の要請と相俟って、行わ

れたのではないかと思うのである。

## 研究経過

時宗の日常勤行の概要を知り、次に浄土宗日常勤行との比較に当たり、以下の点について研究した。

- 1・比較に当たっては、時宗—浄土宗とも、同じ次第で勤めることで、坐次、維那座（時宗は調声場<sup>ちやうじやうば</sup>）、衣体などに、交流の成果がみられるのではないか。
- 2・時宗の宗祖一遍は遊行聖といわれたが、現行念仏の中に、それらの痕跡がみられるのかという期待感がある。
- 3・博士による音声の記憶法の研究と浄土宗音声への応用。

## 1—① 次第構成について

時宗では通常、勤行型式が定まっており、勤行や法要の目的により、各偈頌は決められたものを用いる。したがって応用可能な範囲には制約があり、目的に応

じた勤行立、法要立をしなければならぬ。

つまり一座立の中で、種々なる偈頌の展開はできないことになっている。浄土宗では日常勤行式を晨朝、日中、日没の三座立の構成を指示している。したがって、三座の中の序分、正宗分、流通分中の各偈頌を要略随意に扱うことで、目的への対応が、かなり可能になるといふ点がある。

## ② 坐次、維那座（調声場）

時宗では僧階によって堂内の坐次がきめられている。僧正以上が内陣に近く内面して坐り、中藺の教師が外側に坐り、平僧は、さらに外側に坐るものという。

維那座（調声場）は中藺席の下陣寄り（正面に向つて右座）に設け、内外陣が見渡せる場所を選んでいる。時宗では調声の役は重要で、法式堪能な師が当たることは、浄土宗の影響を受けたものとみてよいであろう。

## ③ 衣体

法主と平僧は鼠色を着し、中藺、老僧（僧正以上）は色衣を用いる。法主が鼠色を被着する意味は、遊行

上人（一遍）に還ることを、最高の宗教的法悦の極致とするからである。

2. 一遍は「唱ふれば仏も我もなかりけり、南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」と詠んだ程で、念仏に徹した人である。現行の念仏一会は浄土宗と同じ「合間打ち」となっている。浄土宗の影響が念仏の唱法にも及んでいる点に、交流の深さが思われる。なお韃稚は鉦を用いる。

## 3. 記譜の研究

時宗の博士の特色は、偈頌の音節の長短により、博士の長さを表す記譜が異なる点にある。浄土宗と同系統の目安博士であるが、表現する意味は音高と長さ（拍節）が知られる。しかし、解説は難しく、理解するには、記譜法と実際の音声に取り組まなければ、今回は準備不足のため研究を断念し、浄土宗音声への応用も不可能となった。

## 成果報告と今後の課題

以上のような経過を踏まえ時宗と浄土宗日常勤行式の比較研究の成果として、平成十二年三月一日に大本山増上寺大殿において発表した。発表は以下の点に留意して行った。

- ① 時宗と浄土宗はほぼ同じ次第で勤めたが、一部は宗派独自のものを用いた。
- ② 研究発表という主旨を重視しながら、細部の関心を全体を通して、荘厳感の中に満たすよう演出の中で工夫した。発表に際しては、「両宗の演出者が解説し、聴衆の理解に役立つよう配慮した。」
- ③ 当日の発表は、企画、演唱、演出に亘り、両案を代表する規準を維持するものであり、研究成果報告として録画、写真撮影を行い、保存している。

今後の検討課題としては、「念仏の唱法と効用」について、音声、雑音、威儀の三方向からの一層の研究成果が求められよう。

念仏は独唱や斉唱という様々な形をとりながら唱えられる。念仏は、身体と心の安定を促すものであるが、声に出すことで、本来の人間性の回帰をも導き、ために念仏者による暖かい社会の育成が待たれている所以でもあり、この分野での研究にも期待したい。

なお、以下に大本山増上寺での公開講座の研究成果を記す。

(田中)

## 浄土宗・時宗の日常勤行式

比較浄土儀礼研究の一環として、総合研究所伝承儀礼班は、昨年度、西山浄土宗と日中礼讃と日没礼讃の比較を試みた。今年度は、時宗との「日常勤行式」の比較を課題とし、時宗総本山遊行寺式衆の出仕をいただき、去る三月一日、大本山増上寺大殿に於いて、浄土宗・時宗の勤行を勤めた。

〈差定〉

浄土宗日常勤行式

- 先、法鼓
- 次、喚鐘
- 〃、奏樂
- 〃、入堂
- 〃、香偈（節付）
- 〃、三宝礼（節付）
- 〃、三奉請（散華樂・法事讃）
- 〃、懺悔偈
- 〃、十念
- 〃、礼讃（一尊哀愍）
- 〃、開經偈
- 〃、誦經（四誓偈）
- 〃、称讃偈（四念仏）
- 〃、念仏一会

- 〃、唱礼
- 〃、讃歎
- 〃、十念
- 〃、奏樂
- 〃、退堂

今回の差定では、通常の勤行式の中に、称讃偈の四念仏と唱礼を組み入れた。この二つの声明は、通常の法要（差定にも取り入れることも可能であり、公開講座という観点から組み入れることにした。また、三奉請では「法事讃」で唱われる奉請を用い、散華を行った。四念仏・三奉請については目安博士を後述する。

時宗日常勤行式

- 先、喚鐘
- 次、奏樂
- 〃、入堂

- 〃、焼香讚（節付）
- 〃、三宝礼（節付）
- 〃、四奉請（節付）
- 〃、懺悔偈
- 〃、十念
- 〃、礼讚（弥陀一尊と乙）
- 〃、開経偈
- 〃、誦経（四誓偈）
- 〃、三念仏
- 〃、回向
- 〃、自信教人信の文
  - ・讚仏諸功特の文
  - ・其仏本願力の文
- 次、十念
- 〃、撰益文
- 〃、念仏一会
- 〃、総回向
- 〃、十念

- 〃、四弘誓願
- 〃、送仏偈
- 〃、十念
- 〃、奏樂
- 〃、退堂

それぞれの勤行式の前には、浄土宗は福西賢兆主任研究員が、時宗は高木貞欽師が解説を行った。二座の差定の内容をなるべく近いものにするため、時宗の礼讚では「弥陀一尊と乙」という唱い方をしたが、これは今回の講座に限っての特殊な唱い方であった。

〈目安博士〉

浄土宗（大本山増上寺御忌法要集より）

四念仏・三奉請（散華樂）

稱讚偈

四念仏



南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

三奉請

奉請	彌陀	世尊	入道場
奉請	釋迦	如來	入道場
奉請	十方	如來	入道場
	散華樂	散華樂	散華樂

時宗

願我身淨如香爐  
 念念焚燒戒定香

願我心如智慧火  
 供養十方三世佛

三寶禮  
 一心敬禮  
 十方方法界常住僧

〈出仕者〉

増上寺式衆

渡辺 俊雄・倉 昭順・小島 伸方・羽田 芳隆・  
西城 宗隆・田中 勝道・廣本 栄康・坂上 典翁

(田中・廣本・坂上は研究員)

遊行寺式衆

高木 貞欽・桑原 弘善・大野木 喜行・飯田 彰  
・内田 光寿・新堀 俊尚・大拙 心山・高谷 大悟

雅楽衆(大本山増上寺雅楽会)

鞆鼓 熊井 康雄  
太鼓 伊藤 広喜  
鉦鈸 福西 賢雄  
鳳笙 斉藤 隆尚  
リキ 荒川 明英  
龍笛 山本 晴雄

(熊井・斉藤は研究員)

今回の公開講座では、浄土宗教師、一般檀信徒のみならず、時宗からも多数の来場を数え、比較浄土儀礼の研究として、実際の威儀・音声をじかに体験していただき、大いなる成果を得ることができた。このような実際の比較研究と並行し、総合研究所では「浄土宗日常勤行式の総合的研究」を出版し、理論面での研究成果を報告している。また、昨年と今回の公開講座では、ビデオ録画を行い、貴重な資料として保存している。いずれの場合も、各宗大本山の全面的な協力・増上寺雅楽会の出仕等々、関係各位からの多大なご支援により、貴重な成果を得ることができた。結びにあたり、心より感謝の意を表したい。

(坂上)

## 葬祭仏教研究（第二次）

—— 戒名・その歴史と現代における諸問題 ——

細田芳光

平成五年十月にスタートしたプロジェクト研究「葬祭仏教の総合的研究」が一応の成果を納め、その成果報告書として『葬祭仏教・その歴史と現代的課題』（ノンブル社）を刊行したのが平成九年六月であった。そこではいくつかの点について深入りできず、次の研究に委ねるべく課題を残した。その一つが「戒名」もしくはいわゆる「戒名問題」であった。

戒名（あるいは法名）が日本仏教において重要な要素の一つであることは、紛れもない事実である。しかし近年、特に社会的な問題として戒名にともなう批判的な意

見がクローズアップされてきた。授ける側（僧侶）には宗教的論拠があったにしても、受ける側（信徒）は戒名に象徴される葬祭のあり方、特に戒名に伴う布施の問題の不透明さに関心が集まり、マスコミ等が取り上げるに至って、社会的な問題となってきたのである。

こうした状況の中で、葬祭仏教研究の第二次研究としてこの「戒名問題」を取り上げていこうと、昨年度から本研究がスタートし、本年度はその二年目である。研究方法については、

（一）戒名とは仏教、宗教の上からいかに位置づけられ



ているのか、また日本仏教の枠組みの中でどのよう  
に展開してきたか、を明らかにする。

(二) 社会的にどのような意見、問題があるのかを、前  
研究での葬祭に関するアンケートを拡大した形で  
の資料を収集するとともに、新聞記事や各種のデ  
ータを整理して明らかにする。つまり戒名に対す  
る実態調査を主題としつつ、日本仏教の伝統の中  
で戒名の意味を探る。

(三) 座談会等により、戒名授与に伴う僧侶側の姿勢・  
態度や、寺院経営における戒名の位置づけ等の実  
体的な様相も明らかにしていく。

の三点であるが、本年度は特に(二)に沿って宗内寺院  
向けアンケート調査の実施と集計・分析に力点を置き、  
研究を行った。

その集計・分析結果については、「戒名に関する調  
査」調査集計結果」(平成十二年三月三十一日発行、「宗  
報」第九六五号別冊付録)として別途発表するのでこ  
こでは割愛するが、任意の調査にもかかわらず約二千とい

う多数の回答(うち有効回答数は千八百九十)が得られ、  
また積極的な意見、要望等も多く寄せられ、この問題に  
対する宗内寺院(住職)の関心の高さがうかがわれた。  
なお、最終的な成果報告は平成十二年度中に取りまと  
めることになっている。

以下に研究会のあらましと研究班スタッフを記して、  
十一年度の報告とする。

#### 《研究会》

・定例研究会 平成十一年四月二十二日

於・総合研究所

「一般人の戒名認識について」

・定例研究会 四月三十日 於・総合研究所

「戒名問題の背景について」

・定例研究会 五月六日 於・総合研究所

「宗内寺院向けアンケート調査について」(一)

・定例研究会 五月十七日 於・総合研究所

「宗内寺院向けアンケート調査について」(二)

・定例研究会 五月二十八日 於・総合研究所

「宗内寺院向けアンケート調査について」(三)

・定例研究会 六月十七日 於・総合研究所

「宗内寺院向けアンケート調査について」(四)

・定例研究会 七月一日 於・総合研究所

「宗内寺院向けアンケート調査について」(五)

・定例研究会 七月二十四日 於・総合研究所

「宗内寺院向けアンケート調査について」(六)

・定例研究会 七月二十九日 於・宗務庁

「宗内寺院向けアンケート調査について」(七)

・定例研究会 十二月九日 於・総合研究所

「アンケート調査の集計結果について」(一)

・定例研究会 十二月十六日 於・総合研究所

「アンケート調査の集計結果について」(二)

・定例研究会 平成十二年一月二十七日

於・総合研究所

「アンケート調査の集計結果について」(三)

・定例研究会 二月二十四日 於・宗務庁

「アンケート調査の集計結果について」(四)

「成果報告書について」

#### 《研究班スタッフ》

伊藤唯真（研究代表、客員教授）

鷺見定信（主任研究員）

熊井康雄（専任研究員）

武田道生（専任研究員）

細田芳光（専任研究員）

今岡達雄（嘱託研究員）

大蔵健司（非常勤研究員）

佐藤良文（非常勤研究員）

# 浄土宗総合研究所所員・嘱託名簿

(平成12年7月1日現在)

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-5472-6571 (代表)

FAX 03-3438-4033

〈分室〉〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96 佛教大学内

電話 075-495-8143

FAX 075-495-8193

ホームページアドレス URL = <http://www.jodo.or.jp/jsri/>

所長	石上善應	〒272-0823 千葉県市川市東菅野2-7-1	0473-24-0330
主任 研究員 (副所長)	福西賢兆	〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-11-7	栄立院 03-3431-0257
専任 研究員 (分室主事)	竹内真道	〒522-0064 滋賀県彦根市本町2-3-7	宗安寺 0749-22-0801
専任 研究員	今岡達雄	〒272-0131 千葉県市川市湊18-20	善照寺 047-357-2232
	熊井康雄	〒135-0022 東京都江東区三好2-7-5	龍光院 03-3642-3437
	武田道生	〒193-0824 東京都八王子市長房町16	龍泉寺 0426-64-0865
	戸松義晴	〒152-0003 東京都目黒区碑文谷3-6-9-301 〒106-0044 東京都港区東麻布1-1-5	03-3723-7707 心光院 03-3583-4766
	林田康順	〒230-0052 神奈川県横浜市鶴見区生麦5-13-61	慶岸寺 045-501-2816
	細田芳光	〒135-0022 東京都江東区三好1-4-5	勢至院 03-3641-5780
	正村瑛明	〒114-0023 東京都北区滝野川2-49-5	正受院 03-3910-1778

研究員	伊藤茂樹	〒637-0042 奈良県五条市五条1-1-6	称念寺	07472-2-3885
	上田千年	〒617-0827 京都府長岡京市竹の台2 D1-502		075-955-7323
	大蔵健司	〒193-0822 東京都八王子市式分方町179	不断院	0426-52-2524
	斉藤舜健	〒615-8017 京都市西京区桂河田町12-2セジュール87 202号 〒692-0011 島根県安来市安来町1927	西方寺	075-394-6173 0854-22-3572
	斉藤隆尚	〒130-0003 東京都墨田区横川1-3-20	靈性院 自宅	03-3622-7829 03-3622-5492
	坂上典翁	〒111-0024 東京都台東区今戸2-23-6	勝運寺	03-3872-7242
	佐藤晴輝	〒292-0008 千葉県木更津市中島2209	正行寺	0438-41-0041
	佐藤良文	〒112-0002 東京都文京区小石川4-12-8	光圓寺 自宅	03-3811-1306 03-5689-5634
	善裕昭	〒605-0062 京都市東山区林下町400 知恩院浄土宗学研究所内 〒847-0017 佐賀県唐津市東唐津2-8-23	安養寺	075-531-2111 0955-72-5327
	曾田俊弘	〒528-0057 滋賀県甲賀郡水口町大字北脇557	浄福寺	0748-62-1932
	袖山榮輝	〒380-0845 長野県長野市西後町1568	十念寺	0262-33-2449
	水谷浩志	〒471-0842 愛知県豊田市土橋町8-6	法雲寺	0565-28-3965
	村田洋一	〒105-0011 東京都港区芝公園2-11-25	最勝院	03-3434-6611

客員教授	<b>伊藤唯眞</b>	〒520-3101 滋賀県甲賀郡石部町石部中央 2-5-46	善隆寺	0748-77-2347
	<b>梶村昇</b>	〒157-0066 東京都世田谷区成城 4-21-2		03-3483-1025
	<b>長谷川匡俊</b>	〒260-0812 千葉県千葉市中央区大巖寺町 180	大巖寺	043-261-2917
	<b>八木季生</b>	〒112-0011 東京都文京区千石 1-14-11	一行院	03-3941-2035
嘱託 研究員	<b>後藤真法</b>	〒135-0022 東京都江東区三好 1-3-3	圓通寺	03-3641-7518
	<b>西城宗隆</b>	〒132-0015 東京都江戸川区西瑞江 2-38-7	大雲寺	03-3679-5748
	<b>坂上雅翁</b>	〒179-0076 東京都練馬区土支田 4-21-20		03-5905-5012
	<b>柴田泰山</b>	〒173-0022 東京都板橋区仲町 22-14-204 〒806-0049 福岡県北九州市八幡西区穴生 2-5-1		03-3959-2746 弘善寺 093-621-5953
	<b>清水秀浩</b>	〒573-0132 大阪府枚方市野村元町 21-26	法楽寺	0720-58-8542
	<b>田中勝道</b>	〒306-0023 茨城県古河市本町 1-4-7	宝輪寺	0280-32-3467
	<b>廣本榮康</b>	〒135-0022 東京都江東区三好 1-2-8	法性寺	03-3641-1356
	<b>鷲見定信</b>	〒253-0087 神奈川県茅ヶ崎市下町屋 2-14-15	梅雲寺	0467-82-6060

# 平成12年度 研究課題・担当者

平成12年7月1日現在

研究課題		研究代表	研究主務	研究員	講師・外部スタッフ
一、浄土宗義と現代	① 浄土教比較論研究	梶村 昇	戸松義晴	林田康順 細田芳光 鷲見定信	浅井成海 宇高良哲 岡本貞雄 長島尚道 廣川堯敏
	② 「法然上人のご法語」第三集			村田洋一	五十嵐大策 大塚雲雲 田代俊孝 中西随功
二、現代宗教問題研究	① 開教の基礎的研究 — 国内開教、海外開教 —			柴田泰山	
	② 生命倫理等の緊急課題	武田道生	戸松義晴 水谷浩志 鷲見定信	齊藤舜健 曾田俊弘	橋本初子 松永知海
三、浄土宗典籍・版木の研究 — 浄土宗寺院所蔵文献類調査整理研究 —	① 浄土儀礼の比較研究 — 浄土真宗本願寺派との比較研究 —	竹内真道	伊藤茂樹 善 裕昭	齊藤舜健	
	② 生前法号授与の研究	熊井康雄	清水秀浩 西城宗隆	坂上典翁	
四、教化儀礼の研究	③ 「礼讃声明音譜」の研究	福西賢兆	坂上典翁 廣本榮康	田中勝道	
	① 日本語によるホームページ		戸松義晴	齊藤隆尚	
五、ホームページによる 教化情報に関する研究	② 英語によるホームページ	今岡達雄	佐藤良文	大蔵健司	ジョナサン・ワッツ
	① 日本語によるホームページ	伊藤唯真	今岡達雄 能井康雄 武田道生	大蔵健司 佐藤良文 細田芳光	
六、葬祭仏教研究(第二次) — 戒名・その歴史と現代における諸問題		八木季生	今岡達雄	齊藤隆尚	
		正村瑛明	佐藤晴輝	後藤真法	
七、現代布教研究—教化活動における人材と情報の収集—		長谷川匡俊	上田千年	安藤和彦 梅原基雄	石川到寛 落合崇志
		坂上雅翁	大蔵健司	村田洋一	
八、仏教福祉の総合的研究—「仏教福祉」編集—		細田芳光	大蔵健司	村田洋一	
		大蔵健司	村田洋一		
九、編集	「教化研究」				
	「総研叢書」				
「成果報告書」その他					

## 平成十一年度 行事報告

平成十一年四月一日

・「布教資料」編集会議 (於…研究所)

・研究所研修員入所式 (於…研究所)

四月二日

・浄土宗総合学術大会代表者会議 (於…大正大学)

四月五日

・第一回所内連絡会 (於…研究所)

・分室会議 (於…京都分室)

四月七日

・「典籍版本の研究」文献調査 (於…京都教区常念寺)

四月八日

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

四月十二日

・第二回所内連絡会 (於…研究所)

・「布教資料」編集会議 (於…研究所)

・「布教・情報」研究会 (於…東京事務所)

四月十五日

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

四月十六日

・「布教・情報」研究会 (於…研究所)

四月十九日

・第三回所内連絡会 (於…研究所)

四月二十二日

・「典籍版本の研究」くずし字研究会 (於…京都分室)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「葬祭仏教」戒名」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・第五回所内連絡会 (於…研究所)

・浄土宗総合学術大会事務局会議 (於…巢鴨)

四月二十一日

・大正大学研修員研修日

講師 林田康順研究員

・「典籍版本の研究」くずし字研究会 (於…東京事務所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「葬祭仏教」戒名」研究会 (於…研究所)

四月二十四日

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「葬祭仏教」戒名」研究会 (於…東京事務所)

・「仏教福祉」第四号 第一回編集会議 (於…箱根)

四月二十六日

・第四回所内連絡会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

四月三十日

・「葬祭仏教」戒名」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「葬祭仏教」戒名」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「葬祭仏教」戒名」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「葬祭仏教」戒名」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「葬祭仏教」戒名」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「葬祭仏教」戒名」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「葬祭仏教」戒名」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「葬祭仏教」戒名」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「葬祭仏教」戒名」研究会 (於…研究所)

五月十二日

・「伝承儀礼」研究会

講師 増本伎共子先生 (於…東京事務所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・「海外開教」研究会 (於…研究所)

・ハワイ仏教徒連盟開教使セミナー

(総合研究所共催)

テーマ「二十一世紀の開教を考える」

ゲスト・スピーカー

浄土真宗本派本願寺ハワイ開教総長

与世盛智海師

調査報告

鷺見定信主任研究員

武田道生研究員

戸松義晴研究員

水谷浩志研究員

司会

浄土真宗本派本願寺ハワイ別院副輪番

牧野繁徳師

(於…ハワイ本派本願寺仏教研究所)

五月三十一日～六月一日

・「布教・情報」集中研究会

(於…メルバルク TOKYO)

六月二日

・大正大学研修員研修日

講師 水谷幸正研究所長

正村瑛明研究員

(於…東京事務所)

六月三日

・「海外開教」研究会

(於…研究所)

六月七日

・「海外開教」研究会

(於…研究所)

・第八回所内連絡会

(於…研究所)

・「法語集」編集会議

六月九日

・「僧侶養成」研究会

六月十日

・「海外開教」研究会

・教化研修会打ち合わせ

六月十一日

・浄土宗総合学術大会打ち合わせ

六月十四日

・「海外開教」研究会

・第九回所内連絡会

・「布教・情報」研究会

六月十四日～十五日

・「法語集」編集会議

六月十六日

・大正大学研修員研修日

講師 田中勝道研究員

水谷浩志研究員

(於…東京事務所)

六月十七日

・「海外開教」研究会

・「葬祭仏教」戒名」研究会

六月二十一日

・「海外開教」研究会

・第十回所内連絡会

六月二十一日

・「海外開教」研究会

・第十回所内連絡会

(於…研究所)

六月二十一日～二十二日

・「法語集」編集会議

六月二十四日

・「葬祭仏教」戒名」研究会

六月二十五日

・「比較浄土儀礼(時宗)」研究会

六月二十八日

(於…時宗総本山 遊行寺)

六月二十八日

・各宗研究機関交流会(於…増上寺会館)

テーマ「僧侶と僧侶養成について」

(担当・浄土宗総合研究所)

・第十一回所内連絡会

・個人研究発表会

・分室会議

六月二十八日～二十九日

・「法語集」編集会議

七月一日

・「海外開教」研究会

・「葬祭仏教」戒名」研究会

七月二日

・「布教情報」研究会

・「海外開教」研究会

七月五日

・「海外開教」研究会

・第十二回所内連絡会

七月五～六日

・「海外開教」研究会

(於…研究所)





- ・第二十二回所内連絡会 (於…研究所)
- 十月一日
- ・「布教・情報」研究会 (於…東京事務所)
- 十月四日
- ・第二十三回所内連絡会 (於…研究所)
- 十月六日
- ・「海外開教」研究会 (於…研究所)
- 十月七日
- ・「海外開教」研究会 (於…研究所)
- 十月十二日
- ・「布教・情報」研究会 (於…東京事務所)
- 十月十三日
- ・「海外開教」研究会 (於…研究所)
- ・大正大学研修員研修日 (於…研究所)
- 講師 林田康順 研究員 袖山栄輝 研究員 (於…東京事務所)
- 十月十四日
- ・「海外開教」研究会 (於…研究所)
- ・第二十四回所内連絡会 (於…研究所)
- 十月十六日
- ・「浄土教比較論」合同会議 (於…研究所)
- 十月十八日
- ・「法語集」編集会議 (於…研究所)
- ・「海外開教」研究会 (於…研究所)

- ・第二十五回所内連絡会 (於…研究所)
- 十月二十一日
- ・「海外開教」研究会 (於…研究所)
- 十月二十五日
- ・第二十六回所内連絡会 (於…研究所)
- 十月二十六日
- ・分室会議 (於…京都分室)
- 十月二十八日
- ・「浄土宗教化研修会」 (於…大阪 東洋ホテル)
- 十一月一日
- ・第二十七回所内連絡会 (於…研究所)
- ・「法語集」編集会議 (於…研究所)
- 十一月二日
- ・浄土宗教化研修会 (於…増上寺)
- 十一月四日
- ・「浄土教比較論」公開講座  
「念仏の教えはどう展開したか  
— 法然の念仏を聖光・澄空・親鸞・  
一 遍門流はこう広めた—」  
第一部 講演  
「法然の念仏」 梶村 昇  
総合研究所客員教授 梶村 昇  
「浄土宗の展開」 宇高良哲  
大正大学教授  
「浄土宗西山派の展開」 大塚霊雲  
西山短期大学専任講師  
「浄土真宗の展開」

- 東京仏教学院講師 五十嵐大策
- 「時宗の展開」 岡本貞雄
- 広島経済大学教授 シンボジウム
- 「念仏の教えはどう展開したか」 パネリストは第一部講演者 (於…増上寺三縁ホール)
- 十一月八日
- ・第二十八回所内連絡会 (於…研究所)
- 十一月十五日
- ・第二十九回所内連絡会 (於…研究所)
- ・「法語集」編集会議 (於…研究所)
- 十一月十七日
- ・大正大学研修員研修日 (於…研究所)
- 講師 武田道生 研究員 (於…東京事務所)
- 十一月二十二日
- ・第三十回所内連絡会 (於…研究所)
- 十一月二十五日
- ・専任研究員会議 (於…研究所)
- 十一月二十九日
- ・「法語集」編集会議 (於…研究所)
- ・第三十一回所内連絡会 (於…研究所)
- 十一月三十日
- ・「浄土教比較論」合同会議 (於…浄土宗西山禅林寺派総本山 禅林寺永観堂)
- ・全日本仏教会 戒名研究会

※熊井康雄研究員出席

(於：東京事務所)

十二月一日

・大正大学研修員研修日

講師・熊井康雄研究員

(於：東京事務所)

・分室會議

(於：宗安寺)

十二月二日

・「海外開教」研究会

(於：研究所)

十二月三日

・「布教・情報」研究会

(於：研究所)

十二月六日

・第三十二回所内連絡会

(於：研究所)

十二月八日、九日

・「法語集」編集會議

(於：研究所)

十二月九日

・「海外開教」研究会

(於：研究所)

・「葬祭仏教―戒名―」研究会

(於：研究所)

十二月十三日

・「海外開教」研究会

(於：研究所)

・「法語集」編集會議

(於：研究所)

・第三十三回所内連絡会

(於：研究所)

・専任研究員會議

(於：研究所)

十二月十五日

・大正大学研修員研修日

講師 戸松義晴研究員

(於：東京事務所)

十二月十六日

・「海外開教」研究会

(於：研究所)

・「葬祭仏教―戒名―」研究会

(於：研究所)

十二月二十日

・「海外開教」研究会

(於：研究所)

・「布教・情報」研究会

(於：研究所)

・第三十四回所内連絡会

(於：研究所)

十二月二十一日

・「伝承儀礼」研究会

(於：知恩院)

十二月二十二日

・「海外開教」研究会

(於：研究所)

十二月二十七日

・「海外開教」研究会

(於：研究所)

・「布教・情報」研究会

(於：研究所)

平成十一年度第一回運営委員会

(於：東京事務所)

平成十二年一月十二日

・大正大学研修員研修日

講師 福西賢兆主任研究員

・「法語集」編集會議

(於：研究所)

・「海外開教」研究会

(於：研究所)

・「布教・情報」研究会

(於：研究所)

一月十三日

・第三十五回所内連絡会

(於：研究所)

一月十七日

・第三十六回所内連絡会

(於：研究所)

・「法語集」編集會議

(於：研究所)

・専任研究員會議

(於：研究所)

一月二十一日

・「浄土教比較論」合同會議

(於：研究所)

一月二十四日

・第三十七回所内連絡会

(於：研究所)

・「布教・情報」研究会

(於：研究所)

・「海外開教」研究会

(於：研究所)

・「法語集」編集會議

(於：研究所)

一月二十五日、二十八日

・「伝承儀礼」研究班

(於：研究所)

・「世界仏教音楽大会」参加

(於：台湾)

一月二十七日

・「葬祭仏教―戒名―」研究会

(於：研究所)

一月三十一日

・「法語集」編集會議

(於：研究所)

二月七日

・第三十八回所内連絡会

(於：研究所)

・「布教資料」編集會議

(於：研究所)

二月九日

・「海外開教」研究会

(於：研究所)

二月十四日

・第三十九回所内連絡会

(於：研究所)

二月十八日

・「伝承儀礼」公開講座打ち合わせ

(於：増上寺大殿)

二月二十一日

・第四十回所内連絡会 (於…研究所)

二月二十二日

・「浄土教比較論」合同会議

(於…東京事務所)

二月二十四日

・「葬祭仏教―戒名―」研究会

(於…宗務庁)

・分室会議

(於…京都分室)

二月二十八日

・「布教・情報」研究会

(於…研究所)

・第四十一回所内連絡会

(於…研究所)

三月一日

・「比較浄土儀礼」公開講座

(於…増上寺大殿)

三月二日

・専任研究員会議

(於…研究所)

三月六日

・第四十二回所内連絡会

(於…研究所)

三月七日

・「布教・情報」研究会

(於…研究所)

三月十三日

・「法語集」編集会議

(於…東京事務所)

・「布教・情報」研究会

(於…研究所)

・第四十三回所内連絡会

(於…研究所)

・「海外開教」研究会

(於…研究所)

三月十六日

・平成十二年度浄土宗総合学術大会実行委

員会

※福西賢兆副所長出席

(於…佛科大学)

・智山教化センターとの情報交換会

※浄土宗出版室とともに

(於…東京事務所)

三月十七日

・「宗門意識調査」(仮称)打ち合わせ

※鷲見・武田研究員出席

(於…宗務庁)

三月二十四日

・第四十四回所内連絡会 (於…研究所)

三月二十五日

・「浄土教比較論」公開講座

「現代人にとって極楽浄土とは  
―極楽浄土とは何か。いま極楽浄土  
の意味を問う―」

第一部 プロローグ

「民俗にみられる世界観」

総合研究所主任研究員 鷲見定信

「仏教の受容から法然上人まで」

総合研究所客員教授 梶村昇

「極楽浄土とは」

大正大学助教授 廣川堯敏

第二部 浄土教各宗派の極楽浄土とは

「西山浄土宗の極楽浄土」

西山短期大学教授 中西随功

「浄土真宗本願寺派の極楽浄土」

龍谷大学教授 浅井成海

「真宗大谷派の極楽浄土」

同朋大学教授 田代俊孝

「時宗の極楽浄土」

時宗宗学林学頭 長島尚道

「私にとつての極楽浄土」

大正大学教授 宇高良哲

第三部 シンポジウム

「現代人にとって極楽浄土とは」

パネリストは第一部、第二部講演者

(於…増上寺三縁ホール)

三月二十七日

・「僧侶養成」研究会 (於…研究所)

三月二十八日

・「布教・情報」研究会 (於…研究所)

三月二十八日(三十日)

・「典籍版本の研究」調査 (於…京都教区西寿寺)

三月二十九日

・「法語集」会議 (於…東京事務所)

・第四十五回所内連絡会 (於…研究所)

・第二回運営委員会 (於…東京事務所)

三月三十日

・分室会議 (於…京都教区西寿寺)

三月三十一日

・大正大学研修員入所式 (於…東京事務所)

## 編集後記

▽『教化研究』第十一号をお届けする。

▽昨年十一月の水谷幸正所長の宗務総長就任以来空席となっていた総合研究所長に、大正大学名誉教授で当研究所運営委員長の上上善應師が、本年四月一日付で就任した。

▽石上新所長は、昭和四年北海道小樽市(天上寺)生まれの七十歳、本宗教師。二十八年大正大学仏教学部(梵文学)卒業、三十一年同大学院文学研究科仏教学専攻修士課程修了、同学教授、仏教学部長、人間学部長等を歴任、本年三月定年退官した。また浄土宗宗宝保護審議会会長、浄土宗教学院理事、三康文化研究所研究員なども歴任、昨年二月から当研究所運営委員長に就任していた。主著に『東の智慧・彌蘭陀王問経』(筑摩書房)、『日本の名著5・法然』(中央公論社)、『仏像―その語りかけるもの』(浄土宗)、『法然―選択本願念仏集―』(筑摩書房)、『往生要集』(NHK出版)など多数。

▽従来各研究班の活動は「研究報告」としてその概要を掲載していたが、本号より掲載可能な範囲で「研究成果報告」として取り上げるようになった。今回は開教

(海外布教)研究班の「ハワイにおける日系宗教の現状」と布教・情報研究班の「PCの普及化と阿弥陀仏の表現」について」の二つを取り上げ、それ以外の研究班の活動については従来どおり「研究活動報告(概要)」に記載した。

▽本誌は従来三月発行であったが、本号より七月発行とし、新年度の「所員名簿」並びに「研究課題」を掲載していくことになった。総合研究所の研究機関誌として一層の充実を計りたく、今後とも宗内各位のご理解とご教導を切にお願い申し上げます。

(細)

## 教化研究 第11号

平成12年7月15日 発行

発行人 石上善應

編集・発行 浄土宗総合研究所

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 照明会館内  
電話(03)5472-6571(代表) FAX(03)3438-4033

印刷 株式会社共立社印刷所





**JOURNAL  
OF  
JODO SHU EDIFICATION STUDIES**

**(KYŌKA KENKYŪ)**

No.11, 2000

*Published by*  
**JODO SHU RESEARCH INSTITUTE**  
(Jōdo Shū Sōgō Kenkyūjo)  
**TOKYO, JAPAN**